
エンジェルクロイツ

青空白雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジェルクロイツ

【Nコード】

N2920T

【作者名】

青空白雲

【あらすじ】

銀行強盗を倒し、日本に一校しかない魔術学園への転入が決まっていた倉敷壱は、幼馴染との偶然の再会を果たし、色々な騒ぎに巻き込まれる、が全て圧倒的な力で解決してしまう。

そして、出遭ってしまった天使を司る者——天司——クレア。その天司は言う。

悪魔と一緒に退治して欲しいと。

「…………え？ 俺？」

「はい。倉敷壱さんです」

そして、世界を巻き込んだ物語は始まって行く。

銀行強盗と勧誘兼拉致

倉敷壱はバイト代が入ったから金を下ろしていこうと銀行に入
た。

自動ドアを潜ると冷風が身体を冷やし、頭がスツとして気持ち
い。

受付番号を受け取り、銀行備え付けのウォータークーラーに歩
寄り、紙コップに水を注ぐ。

もう直ぐ夏も差し迫ってきている時期なので、外は暑く喉が乾
いていたのだ。

水を飲もうと唇に紙コップを近づけた瞬間、

銃音が鳴った。

倉敷壱は思わず水をぶちまけてしまう。

「ああっ!？」

ジーパンが水で濡れた。

壱は素早く首を捻って辺りを見渡す。

まず初めに目についたのは銃を銀行員につき付けている青年だ
た。

声を上げるのを何とか我慢する。

(銀行強盗……?)

茫然とする頭のまま周りを見渡す。

未だに状況が理解できずに呆然とする者、子供を抱き抱えて目を
背け奮えている者、銀行強盗が押し入ってきているのにふわりと笑
っている上級者も居る。

そのふわりと笑う美人さんは自殺志願者という訳でもなさそうだ。
窓口で青年が銀行員に指示していた。

銃は何時でも撃ち抜けますよ、と言わんばかりに頭に銃口を向け

ている。

銀行強盗の青年はワックスをつけ、髪を逆立てピアスをしていた。覆面を被っていないのが凄く惜しい。

くるりと銀行強盗は身体をこちら側に捻ると、一発天井に向けて発砲した。

銃音と共に銃弾が壁にめり込み、発砲音に身体が無意識に跳ねた。やはり体験したことのない恐怖がある。

寺はこの平和な国で発砲音など聞いたことがないのだ。

銀行員がそろそろと、テーブルの下にある通報ボタンに手をかける。

それを見た青年は思い出したように言った。

「俺の魔術で警報機とかぶっ壊してっから意味ねえぞ」

人々が驚いたように身体を強張らせる。

室内の雰囲気が一瞬硬質なモノへと変わった。

それもそうだ。

何せ魔術は天使に愛された者——人口の三パーセントしか使えないモノだからだ。

たまに誤解されるが心の清い者だけしか扱えないというファンタジックな物ではない。

この情報社会の世の中、そういった噂は淘汰されつつあるのだが、信じている奴は信じている。

因みに愛されなくとも、無理やりに、天使と一時的に契約することも出来る。

「俺が銃を選んだのは、外観で恐怖を与えられるからだ。魔術なんて見ないと恐怖を感じないだろ？ 大きな魔術を使うのは疲れるんだ」

そう男は言ってから何もない空間から袋を取り出した。

「おら、この中に金をありったけ詰める」

銀行員は数回小刻みに頷き、奥へ消えていった。

「ああ、そうだ」

男は思い出したように躊躇なく、気軽に発砲した。
狙いは壱だ。

は！？ と驚き、頭が真っ白になる。

誰かの声が聞こえた気がしたが、壱には誰がどういう声を出したのか理解をしようとさえ思わなかった。

壱の目の前——数センチ前の空間で銃弾は止まっていた。

壱はふうふう、と大きく深呼吸する。

「危なく死んじまう所だったろうが！」

犬歯を剥き出しにして怒る壱をスルーして、

「ほう、お前も魔術を使うのか」

やる気満々、理解半分の男は銃を投げ捨て、手をかざす。

「雷撃！」

突如、水平に轟く雷が襲い掛かってきた。

壱は一步も動けない。

だって相手は雷——つまりは亜光速だ。

光を見て避けるよ、と言われてるに等しい。

壱に雷撃が突っ込んだ。

一般人ならば死んでいた一撃。

しかし、壱は無傷で立っていた。

「ダメエ、今殺すつもりだったろ！」

壱は怒鳴る、というよりも友達に突っ込むような気軽さで怒鳴る。
透明な光の粒子が壱の周りに浮かんでいた。

それらが壱を護っていたのだ。

「なっ！？ 俺の最強の魔術が——っ！？」

ふざけるなあ！ という負け犬の遠吠え。

壱は両手を上げて言う。

「警察に自首してくれ。自首してくれたら俺は何もしない。誓って
もいい」

「舐めんなよ？ 癪に障る顔しやがって」

「か、顔！？ まさか顔が気に食わないからって発砲したんじゃないか、

えだろうな!？」

壱の顔は中の中位だと自分では自負している。
いや、自分補正が効いている可能性もあるので悪くて中の下というところ。

しかし、自分の姿を磨こうとも思わない寝癖をつけたままの髪の毛や、穴が開いているジーパンなのが気に障ったのかもしれない。
相手はなんかお洒落に気を使ってそうだし。

しかしそれだけの理由で発砲なんて馬鹿な真似をする筈もない、
と思う。

「テメエの魔術がどれだけのモンかは分かんねえが貫通力をあげりやあ問題ねえ!!」

男は壱に突っ込んでくる。

右掌には雷を球にした雷球、左掌には炎の球があった。

「さつき以上の貫通力だ!」

二つの手を合わせて、壱に突き出すが、壱に両手を包み込まれるようにして止められた。

光の粒子を纏わせてグローブ代わりにしているのだ。

光の粒子は炎と雷の合わさった魔術に入り込み、ガラスを砕くようにぶち壊した。

炎を雷は空に溶け込み、消える。

「はい、俺の勝ち」

試合しゅーりょーと、両手を解放してやる。

「な……」

男は呆然と壱の顔を見る。

携帯電話をポケットから取り出し、警察に連絡する。

これで終わりだな、と携帯電話を仕舞い、そして、

「キヤー! これこそ私の求めていた逸材!!」

ふわりと笑っていた美人さんに抱き締められていた。

「へ?」

柔らかい双丘が顔に押し付けられているが、壱は困惑するのみだ

った。

「えーと、誰です？」

ようやく興奮から醒めたのか、その女はふわりと笑って舌を見る。改めて見ると尚更美人だということを認識する。

大きな瞳は意地悪そうに輝いてはいるがそれも一つのアクセントとなつて小悪魔のような印象を与える。

恐らくは男子が好きそうなタイプだ。

いや、舌も男だけだ。

銀行強盗もこの手の展開は想像していなかったのか呆然としている。

「ふむふむ。顔はB - っところね」

勝手に人の顔を審査し始めた。

なんという常識のなっていない女の人だ、と舌は思ったが口には出さない。

(つか、B - ってどうなの？)

「B - っていいんですか？」

「普通」

「そりゃ良かったです」

一つ頷いてから、

「何の用ですか？」

「んーまあちよつと待ってね」

そう言つと女は何らかの呪文を唱え、男を亀甲縛りにした。うげつと男は嗚咽を漏らす。

更に猿轡まで噛まされた。

男は可哀相だが警察が来るまで喋れないだろう。

「何で亀甲縛りなんだよ！ 女王様か！」

律儀に突っ込んであげる舌。

というか、この女は相当な使い手だと今更思ふ。

女は男を一瞥してから小悪魔のような笑みを浮かべ、拍手する。

「まあまあ、それより貴方はこれより星陵学園の一生徒となる権利

を与えられました！ わあー！ おめでとうー」

「は？」

何言ってるんですか？ と訝しげな目で女を見るき。

唐突すぎて訳が分からない。

「そうなる気持ちもしっかり分かるよ？ 私は星陵学園の理事長で井上沙耶って言います。気軽に沙耶ちゃんって呼んでね？」

「二十代の女の人ガキにちゃん付けで呼ばれるってどうですかね？ ていうか理事長？」

「私は永遠の十七歳だから問題なし！ それよりどう！？ 入らない？」

「いや、意味わかんないしいいです」

沙耶はうんうん頷くと、

「そうでしょうそうですね。何せ星陵学園は世界で唯一の魔術師達の学び舎！ しかも幅広い職業選択の自由！ 大学の推薦！ 入りたい人は居ても入りたくない人なんか——ってなんですって！？」

「いや、だってあそこの偏差値やばいじゃないですか」

そう、確か六十七だ。

そして、壱の平均偏差値は三十九だ。

そんな人間が星陵学園に入れる訳がない。

しかも世界で五つしかない魔術を教える学校だ。

そんな所に入りたくはない。

それに自分の学校がある。

「大丈夫大丈夫。私がそこらへんは何とかするからさあ行くわよ！」

は？ 銀行強盗は？ つか警察来るし色々事情徴収とか——！

そう言おうと唇を動かそうとした瞬間——視界が真っ白になっていた。

宣戦布告

「財善事高校から来た倉敷壱くらしきいちです。よろしく願いします」

内心泣きつつ、へらつと笑いながら自己紹介をしたのは勿論、倉敷壱だ。

三日前のことだった。

転移魔術により銀行から強制移動させられた倉敷壱は家へ招待させられたのだ。

その時はまだ、両親は反対してくれるだろうと高を括って沙耶を招待したのだが……。

『授業料免除！ 寮生活無料！ 制服代、教科書代だって無料にします！』

そんな沙耶の特待生もびつくりな破格の待遇に両親が乗らないはずもなく——壱は強制的に学園に向かい入れられたのだ。

全くもってふざけてる。

しかし、不幸中の幸いと呼べるものが二つあった。

一つ目の幸運はこのクラスは一年二組——要するに実力的には普通のクラスということだ。

S (special) クラスというクラスは将来有望な奴らが纏めて収容されている所で、理事長である沙耶は壱をここに入れたかったらしい。

理事長権限をフル活用しすぎてSクラスに入れることは先生方に阻止されたのだとか。

そして、もう一つの幸運は沙耶先生がここには居ないことだ。

沙耶はSクラスの担任も受け持っているらしい。

化け物みたいな体力をしている先生兼理事長である。

「じゃあ、倉敷君はあそこに座ってね」

斉藤先生が指差す先はよく知っている少女の隣の席だった。よく知ってる少女だった。

幼い頃の裸さえ知っている少女。

黒髪を長く垂らし、瞳は綺麗な漆黒。

万人受けしそうな美少女だった。

胸は盛り上がっており、引越して別れてから三年で成長したらしい。

「うわああああ！？ 壱！？ え？ あ、嘘？」

その少女は驚きで呂律が回らなくなっている。

名前は辻綾瀬^{つじあやせ}。

一足先に驚きと混乱から抜け出した壱は手を振って隣の席に座る。途中でお前、辻の何なんだ？ と好奇心と嫉妬の入り混じった視線を送られたが何とか無視してかわしていく。

「久しぶりだな」

綾瀬は頬を赤く染め嬉しそうに頷くと、疑問をぶつけて来た。

「何で転校してきたの？ この学校、転校なんてあり得ないのに」

まあ、確かにそうだ。

世界で五つの魔術科高等学校はアメリカ、中国、インド、ロシア、そして我らが日本にある。

この四つの国のどれかから転校してくるのが普通だ。

日本の普通科高校から転校してくるなんてことはまずあり得ない。

「あーいやーその……えと……見込まれちゃって」

「見込まれた？」

「理事長に」

「ああ、あの理事長に……そつかばれちゃったんだ。壱の能力」

と何故か満面の笑みを湛えながら言う。

「まあ別に隠してた訳じゃねえけど」

そう軽口をたたく。

まあ、あの理事長には知られたくなかったが。

「なあ、オイ。お前ら何なの？」

前の席に座っていた男子が振り向いて訊いて来た。
野性的な瞳をした顔立ちの整った男子だ。

「もしかして幼馴染とか？」

「よくわかったなあ」

「ま。んなのあり得ないよな。大方中学のときのクラスメーえ？
何だった？ 今？」

「いや、だから幼馴染」

「代わってください。僕の幼馴染は料理べたで掃除をすれば何か一つは破壊するという最悪な女の子でしてぶらあ！？」

突如飛来してきた魔術で作ったであろう鉄製の円盤が綺麗に男子の後頭部に入った。

「誰が最悪ですって！？」

ガタン、と立ち上がる綺麗な少女。

金髪碧眼だった。

「クリス！ テメエのことに決まってるだろうが！ 辻さんとチェンジだ！」

「私だって海田京とチェンジして欲しいわ！ 死ね！ バーカ！
遊星のくそバカ！」

「海田あ？ あのハイスペックで主人公並みに鈍感でハーレム建造中のアイツ！？ 馬鹿じゃねえの？ アイツがお前なんか相手するわけねえだろ！」

「うるっさいわね！ アンタだって辻が相手してくれる訳ないでしょ！」

二人の言い争いを先生は無視して連絡事項を伝える。

「魔術模擬戦大会が一週間後にある訳ですが、誰か出たい人は居ませんか？」

「魔術模擬戦？ 大会？ それ何？」

綾瀬に訊くと、言い争いをいつの間にか止めていた男子生徒――
遊星が答える。

「あれだよ。魔術を使った戦闘」

「危ないだろそれ」

「危ないとか言ってられないじゃないか？」

遊星の言葉に呟き返す。

「戦争か……」

戦争。

魔術がこの世に現れてから三十数年。

五年前に土地を創り出す能力を持った子供が産まれた。

二つの国の国境の上——飛行機内で産まれたらしく二つの国がその子供を巡って対立。

そのまま戦争に突入した。

当初、国連などが余りの事態に割って入ったらしいが子供の能力に危機感を抱いた国連に加盟している一つの国が子供を殺害しようと目論み、泥沼化。

それを哀れに思ったのか、または別の目的があったのか最終的に子供は大天使が掻っ攫って行ったという呆気ない終わり方になった。しかし、その煮え切らない終わり方のせいでも、または国のトツプが無能だったせいもか冷戦状態に突入。

次にそんな能力を持った子供が産まれてしまえばどんな事態になるか想像もできない。

そんな訳で全ての国は自衛できる最低限の戦力と——日本は——戦力と信用のある国同士の友好関係が欲しいのだった。

「なるほどなあ……」

壱は大変だなそりゃ、と他人事のように呟き机にへばりつく。

先生がふと何か思い出したのか掌を打つ。

「あ、そうだ。倉敷くんには問答無用で出てもらいます」

「え？」

思わず背筋を正す。

「え？ 何がっすか？」

「理事長があの子はマジで凄いから入れといて、と」

「そりゃ、ねえよ……」

はあ、とため息を吐いた。

あのクソ理事長が！ と罵詈雑言を浴びせなくなる。

（でもまあ断るくらいの権利をあるだろうし……）

と先生に断りを入れようとした時、後ろの方で座っていた女子生徒が突然、席を立った。

「ちよつと待ってください」

背中まで伸びている銀髪を揺らしながらその女子は胡散臭そうな瞳を壱にやる。

「この、倉敷壱という方は強いんですか？ とてもそうは見えませんが」

『まあ確かに』

とクリス、遊星、綾瀬に壱本人。

『弱い』と自分で言うのはいいが、人に言われると嫌なもんだな、と壱は思う。

「ということではこの方がどれだけ強いのか私に試させて下さい」

「何でそうなの！？」

壱は思わずツツコミを入れてしまう。

「まあいいでしょう」

先生は一つ頷く。

「先生？」

この展開はまずい！ 危機感を覚えた壱は立ち上がり、

「では二日後の放課後四時きっかりに実習室で」

先生は壱が文句を言う前にぱつぱと決めてしまった。

壱は転校生で遠慮がちな所もあり「ふざけないで下さいよ先生！」と強く言えない。

「いや、ちよつと……危ないかなーとか綾瀬さん！ 助けて！」

綾瀬は笑顔を向けてきた。

（その反応はおかしくね？）

史上最強

理事長室の机で沙耶は携帯電話を通じてある人物と話していた。

「ええ。上手くいったわ……まあ強引すぎただけだね」

『現実から剥離しすぎた事象は、人間の判断能力を極端に鈍らせるもんだ』

威厳に満ちたその言葉は空気を震わし、沙耶の鼓膜を叩く。

「全くあんな事の為にこの学園に入学させるなんて……何考えてるの？」

机においてあった熊のぬいぐるみの鼻っ柱を、まるで見えない現実を倒すように指で押し倒した。

『ただ俺は実力のある者が欲しいんだよ。もしかして……またあんな力スじゃねえだろうな？』

言外に次はないぞ、と脅しているのを明確に感じた沙耶は見えない圧力で汗が吹き出る。

あの少年——倉敷壱の力は魔術ではない原理で動いている。

間違いない。

あの壱こそ、史上最強の力の使役者。

「大丈夫よ……」

言葉を搾り出した。

勉強

フレア・カルフェは一人で暮らすには馬鹿でかい家に住んでいた。父親は戦時中に一人で軍事機密を盗み出した伝説の魔術師で今は大手会社の社長である。

しかし娘に一人で住むにはでか過ぎる家を勝手に買い日本へ送り魔術を習わせている最低の父親でもあった。

フレアはベッドに寝転び、挑戦状を叩きつけた倉敷壱という男のことを思い出す。

雰囲気としては優男で戦いには絶対に向いていない男だった。

魔術の才と戦闘の才は全く違うモノなのだ。

大会に出ても怪我をするだけだ。

ならば、

「私が圧倒的な差を見せ付けて勝てば余計な怪我を負わずに済む」
そう呟いた。

フレア・カルフェと戦うんだから魔術について知らないと！とノリノリな綾瀬を無碍にすることも出来ずに放課後の第一図書室でお勉強である。

というか、あの子はフレア・カルフェというのかと今更ながらに名前を知る。

「あり？ これは俗に言う勉強デートというやつなのでは？」

ふっと思いい口に出してみるが、

「ホラホラ、女の子の裸だよー」

とか言いながら絵画を見せてくる幼馴染にそんな気があるとは思えない。

というか絶対ない。

ここは『学習コーナー』で、白を基調にしたテーブルと椅子が
○組くらい置いてある場所だ。

学習コーナーは図書室の四つ角に配備してある。

この学習コーナーには壱と綾瀬とクリスと鞍馬遊星しか居ない。
進学校でも図書室利用は少ないのだろうか？

それとも皆部屋に籠って宿題をしているのか。

「馬鹿なことやってんなよ。ほら戻して来い」

しっし、と犬にするように手をひらひらさせて言う。

「はい」

素直に棚に戻しに行く綾瀬。

しかしこの図書室は広い。

図書室は第一図書室と第二図書室があり、第一図書室がすごく広
い。

まるで体育館だ。

図書室のクセに別館にあるという時点で驚きだが、その蔵書量は
七〇万を超えるのだとか。

適当に『魔術関連』という棚から引つ張ってきた本を眺める。

黒と白の線が交差している面白みのない表紙。

二秒で嫌になった。

勉強は学生の大敵だ。

「で、壱はどれだけ魔術に知ってるの？」

綾瀬は横に座りつつ尋ねる。

「ちよっ！？ お前に料理なんて似合わねえから止める！」

「なっ！？ 見てるだけでしょ！？ それにアンタに作る気なんて
毛頭無いし！」

後ろで繰り広げられる小うるさい夫婦喧嘩が静かな図書室に反響
する。

BGMにしてはうるさい。

「あーそうだな。天使っていうウイルスとか菌みたいにはら撒かれ
てる奴が居てそれを魔術師が使って魔術発動ってことくらいかな」

足らない知識を晒しつつ魔術の本をパラパラ捲る。

『天使の全長は個体差はあるが一マイクロメートル。皆さん御存知のとおりだと思うが天使の性質は『魔術師のPSと意思を感じ取る』事と人を『愛す』事、そして『魔術を発動』させることだ』

と書かれていた。

「御存知じゃなかったよ」

「え？」

「ああ何にもねえ」

本を閉じると適当に誤魔化す。

綾瀬はごほんとワザと咳払いすると、

「基礎的な知識としては天使は人の脳内で起こるPS（personal strain）を感知する性質を持っているの。つまりは思考回路つてこと」

「天使、ねえ……」

一マイクロの微生物もいいところなのに『天使』なんて滑稽だな、と思う。

「そのPSが強ければ強いほど強い魔術が打てるの」

「……炎よ出るーとかで炎が形成されるつてこと？」

「んーそうじゃなくて、まずは天使が人間のPSを感じ取って、それから人間が意思を天使に伝える」

魔術の内容がPSで「これを発動してくれ」って言うのが意思ね、と綾瀬。

「それで何億もの天使がネットワークを形成して魔術が放てるの」
雫はまた意味もなく本を捲る。

「炎よ出るーの場合は天使達が結合して炎のネットワークを作り上げるの」

「なら水のネットワークとか雷のネットワークもある訳だ」

素粒子みたいだなと思う。

本に視線を落とす。

『御存知の通り天使が発見されたのは1987年である。その活用

法を見出したのが今から三十八年前の2057年だ」

「だから存じ上げてねえつつうの」

この著者、すっげえムカつくなと綾瀬に話しかける。

綾瀬は本を見て、壺を見てから、

「私の話を聴いてた？」

「あー聴いてた聴いてた」

本をパラパラ捲りつつ言う。

綾瀬は本を剥ぎ取り隣のテーブルに置き、壺の目の前まで身体を

乗り出し、潤んだ瞳で、

「私だけを見・て？」

壺は視線を逸らし、舌を出す。

「あー気持ち悪い」

「ん？ 私の瞳に映った壺が？」

「まあそだね」

壺は面倒くさそうに肯定する。

「え！？ 認めるの！？」

綾瀬は少し面白くなさそうに椅子に座りなおした。

と。

「お前、馬鹿だなー！ ジャガイモの皮は剥くに決まってんだろ！

？ 何で剥かずに茹でんだよ！」

はははははは！ と遊星は思い遣りなど微塵も見せない様子で爆

笑する。

クリスはへへへ、とはにかみながら笑う。

「ホント馬鹿だなお前！ 嫁の貰い手ねえんじゃねえの！？」

ぎやはははははは！ ひいひい、と笑いに笑う。

最初ははにかみながらも笑っていたクリスだったが余りにも馬鹿
笑いを止めない遊星に苛立ってきたようだった。

拳を硬く握りこむ。

「駄目、だ……馬鹿すぎて……ふ、あはははは……げほげほ。や
べむせた……ふっ！ ふへへへへへへ」

ついには柵に拳を打ち付けて笑う。

あー柵を殴るなよ、と舌は呟く。

クリスはついに我慢できずに、拳を振り上げた。

「遊星の、ばかあああああああああ！！」

顎に拳が打ち付けられようとしたその時。

「うるせえッ！」

ゴガン！ いつの間にか二人の後ろに現れていた気の強そうな女性
性が拳を振り上げ二人を黙らせた。

眼鏡を装着し、手には『本』が握られている。

美人だが、お近づきにはなりたくないタイプだ。

（まあ、なったらなったらで楽しそうだけど）

「誰だ？ あれ」

と、舌の純粹な疑問に答えるかのように綾瀬が言う。

「んーあれは海田の第二ハーレム要因の内の一人だよ」

「第二って何？ 馬鹿じゃねえの？」

「第一ハーレム要因がSクラスのキセヤ・フラットというどっかの
外国人で」

「また適当な情報だな」

「もう一人が同じくSクラスの木村早瀬きむらいはやせ」

「三人目」

「Sクラスの綾風文あやかぜふみ」

「去勢手術代くらいなら出そうかな」

「同じくSクラスでフライングカネット」

「すげえなオイ、とため息混じりに呟く。

「五人っすか」

「うんうん。第三ハーレムとファンクラブがあるから三十人くらい
？」

何というか、嫉妬する気も起きない。

大自然を見て「ああ、俺ってちっばけだなあ」とか思う気持ちに
似ている。

勝てる勝てないの問題ではない。プライドさえ刺激されない。

「あーよお！ 雪！」

後ろから声が聞こえたので振り返る。

そこには一人の男と二人の女の子が居た。

「あれが海田京で左がキセヤ・フラットで右が綾風ね」

綾瀬が耳打ちしてくる。

なるほど。二人とも可愛いし男はイケメンだ。

まず、キセヤはふわりと巻かれてある金髪を肩まで伸ばしてある。瞳が真紅だ。

カラーコンタクトだろうか？

そして綾風は黒髪を腰まで伸ばしてある正統派の日本人美少女だ。

「綾瀬と外見被ってんじゃない？」

壱の漏らした感想に耳ざとく反応した綾瀬はむっとした感じで文句をつける。

「私の方が可愛い」

「まあそうかもな」

幼馴染としての鼻肩目もあるだろうが外見は勝っている感じはする、と壱は密かに思う。

綾瀬は少し驚いた顔をしてから顔を赤らめ、ニヤつく。

上位の外見の人間相手に「あなたはソイツに勝ってますよ」と言われれば誰だって嬉しいだろうな、と少し見当違いなことを考える壱。

実際は壱に間接的にしろ「可愛い」と言われたのが嬉しかったのだ。

一方、クリスと鞍馬遊星は面倒くさい、と言いたげに顔を顰めていた。

クリスは海田のことを好きではなかったらしい。

「どうしたんだ？ また本を借りにきたのか？」

雪の元まで近づいた海田が訊く。

海田の隣を陣取る二人は明らかにムツとしている。

ハーレム要員のクセにどれだけ嫉妬深いのか。

「ま、まあ面白い本が見つかったし」

「狙った異性を打ち落とす！？脅威の恋愛術！」

なぜクリスと綾瀬まで反応しているのか全く謎だ。

身体が氷漬けになっているかのように固まっているのが遠目からでもわかる。

壺は投げやりに応援してみる。

「へーお前ってこんなのも借りるんだな。誰か好きな奴でも居るのか？」

すごい鈍感ぶりだ。

「いってええええええええええ!!? オレ何かした!？」

と、恨みがましい口調で雪が言う。

綾風文は言う。

「どこの誰の妄想が具現化してんだよ。ハーレム系主人公ですか」
壺の呟きは誰にも届かない。

勉強（後書き）

さて、天使と大天使の関係性とは……

海田京と倉敷壱

海田京とその仲間達が帰った後、三人から聞いた情報によると、海田京とは頭はまあまあ良く、イケメン、鈍感、運動神経と魔術は抜群によく、魔術などは魔力を天使のネットワークに組み合わせて強化することもできるハーレム系チート主人公らしい。

「魔力を注入出来るって七大魔術師並みじゃねえの？」

壱は消しゴムを弄りながらそう呟く。

基礎魔術を全て会得し、自己魔術を極めたとされる魔術師達の総称が七大魔術師だ。

「だいたいさあ……世の中おかしいよ。顔の基準値なんて誰がどうやって決めてんだっつーの。そもそも運動神経がいいとか魔術が出来るとかでモテる時代なんて小学校だけだろーが……いやできるに越したことはないけれども」

うだうだ。うじうじ。

世の中の不条理を感じる壱は煤けていた。

「まあ頭おかしいくらいに図抜けてるししょうがないんじゃない？」と宥めるように綾瀬が言う。

遊星はうんうんわかるわかと涙ながらに頷く。

「人間やっぱり内面だよな！」

「ならアンタは最底辺の人間になるけど？」

ジト目で遊星を睨むクリス。

「やーすみませんでした！あの時は猛烈な笑いの衝動が……！」

壱は机にだらしなくへばり付きながらポケットからケータイを取り出し時刻を見る。

「もう五時か……帰ろうぜ？勉強は後でやっとくよ」

綾瀬は少し胡散臭そうな顔で壱を見た。

「やるとは思えないけど？」

「基本的な所は勉強するって」

そう言って立ち上がり、腹の調子が良すぎることを再確認させられた杏は三人に言う。

「あートイレ行ってくるから先帰ってて」

海田京とその取り巻き達はSクラスの担任であり理事長である沙耶と廊下で出会った。

「あれ？ 何ですかその紙？」

京は沙耶が手に持っていた紙を指差し尋ねる。

沙耶がにんまり笑うのを見逃さなかった京は逃げようとしたが、捕まった。

「あーその紙については何も言わないし見ないし触らない！ この前は沙耶先生の裸だったし！ どんだけコイツらにやられたか——！」

京はその時のことについて思い出す。

あの時は酷かった。

ボコボコなんてモノじゃなかった。

並みの人間なら死んでたね間違いない。

写真？ もちろんあいつらに燃やされた。

そんなことを回想し終えた京に沙耶は悪魔のような含み笑いをし、「いやあれ合成写真だから」

「え？」

京の表情が固まった。

「で。この紙は大会の対戦相手が書いてあるの」

沙耶はひらひらと薄っぺらい紙を振りながら笑みを浮かべる。

大会に海田京は出る。

というのも海田京は可哀想なことにこの担任と綾風達に大会の申し込みを勝手に出されたのだ。

「どうする？」

ようやく混乱を終えた京は小悪魔のような笑みを浮かべる沙耶に怒るタイミングを見失う。

「俺に教えようってんですかそれ？」

「まあそうね」

「嫌すつすよ」

と京は首を振る。

「何ですかの？ 訊いておけばいいじゃないですか」

キセヤ・フラットが不思議そうに訊く。

京はそれに答える。

「俺だけが知るなんてフェアじゃないだろ？ 皆この時の為に頑張ってるんだしょ」

京はそう言いキセヤ・フラットの頭を撫でた。

顔を赤く染めるキセヤ。

「まあ、そうですね」

京は顔を赤くするキセヤに疑問を感じ、言及する。

「どうしたんだよ一体？」

キセヤと綾風ははあ、とため息を吐き、

「毎度ながら無自覚すぎて……」

「もう怒る気も失せてきましたわ……」

「ま、それでも二回戦で当たる子の名前はどうぞ足掻いたって教えるけどね」

沙耶は悪魔のように微笑む。

「もしかして生徒会長？」

「うんにゃ。この時期に転校してきた子」

京は首を傾げる。

「誰か転校してきたのか？」

「「転校してきたでしょ」「」」

呆れたようにため息をつくキセヤと綾風。

「ふーん。で、相手はソイツな訳か」

「そ。名前は倉敷壱。もしかすると君以上の逸材だから遠慮は無し

でいいわ」

沙耶の言葉にキセヤと綾風は目を丸くして驚く。

「は？ 京以上の逸材？」

「あり得ないでしょうそれは」

「お前ら言い過ぎ。けどそれなら全力を出していいってことですよね？」

沙耶の下に次に来たのは倉敷壱だった。

但し、次は廊下ではなく階段で。

そしてこと正確に言うならば耳に来たのは壱の歌声だ。

「たらったたらったーちゃらちゃらー走れーこの高速でー定こーくまで四時間ー」

音痴爆発な歌に笑いそうになりながらも階段を下りてきた壱に手を上げて挨拶する。

「こんな時間まで残ってたの？」

壱は少し気まずそうに顔を伏せ、そして次の瞬間ふと思い出したように顔を上げて言う。

「あ、そういや勝手にエントリーさせて……！」

「まあまあ。そういうえば勉強はどうだった？」

「訳わかんなかった。あれは無理です」

「でしようね。偏差値三十七とか言ってたし」

「でもあげてくれるんですよね？」

「まあ留年にはしないけど。そこら辺は理事長である私に任せなさい」

「よかったあ……勉強はするけど一年で縮めれる量じゃないですねアレ」

「ま、そんな高待遇を反故にされたくなければ出なさいって所ね」
そう言って手に持っていた紙を渡す沙耶。

「ふざけないで下さいよ……反故にされたら留年大決定になります
って……」

壱はそう文句を言ってその紙に目を通す。

「一回戦は対戦者無しか……ってこれ対戦表っすか？」

「まあそうよ」

「ふーん。って海田京が二回戦の相手かよ！」

「ま、頑張ってね」

やっぱり壱の方が可愛げがあるわねーと沙耶は思う。

「はあ……明日はフレアと対決だし海田ともかよ……」

壱はそう言ってから、フレアにギブアップして負けるから大会自体出れないんだけど、と心の中で付け加える。

流石に大会に出ないからって約束を破り、留年決定ということはないだろう。

思考が途切れ、不意に思い出した。

あの銀行強盗のことを――。

まるで疑問にずっと布を被せられていたかのようなうだ。

「あ、そういうえば銀行強盗って何で俺のことを狙ったんだろ？」

「へ？　ぎ、銀行強盗？」

沙耶の形の良い眉は一瞬、それも壱が気づかないくらいに少しだけぴくりと動く。筋肉が硬直した。

「そうそう。何で俺のこと狙ったんだと思う？」

沙耶はおどけたように笑いながら言う。

「さあ？　私はそのお陰で壱を発掘できたんだから感謝だけどねー」
大きな胸を顔面に当てるようにして壱の頭を持ち、引き寄せて抱き締める。

壱は苦しそうに胸に顔を埋めたまま、左右へぐいぐい動かす。

「ふおい（おい）！　ういきがうえきらい（息が出来ない）」

「ちよっ！？　そんなに動かないで！」

予想外にアクティブな動きをする壱に沙耶は驚き声を上げた。
声が胸に当たり、何か変な感じがする。

「ましてういきがあ……」

更に上下に動き、ようやく息をする権利を得た壱は大きく息を吸う。

「死ぬかと思った……」

と、真上を見てみれば何故か沙耶は顔をほんのり赤らめていた。

「どうかした？」

沙耶は壱を絶妙な力加減で突き飛ばし、唾を飛ばす勢いで言う。

「私、男性経験皆無なのにー！！ 初めて——」

何か言いたげだった言葉を呑み込むようにして沙耶は更に言った。

「わあああん！！ 壱君の、壱君の馬鹿あああああ！！」

暴言を吐きながら自称永遠の十七歳——実質二十代の可哀想な女性はそのまま駆け去って行った。

「俺、何かしたっけ？ つか銀行強盗の話は？」

天使と天司

寮から学校までの道程は短い。

寮を出るとすぐ目の前に林道が見え、それに沿って歩いていけば学園に着くのだった。

倉敷壱は道程も終盤に差し掛かる所で、大欠伸をする。

一応勉強しないとやばいよなーと思い、魔術と今日の分の数学の単元——高次方程式の予習をしてきたのだ。

数学の方は全くわからなかった。

やはり最初から勉強するのが近道なのか……。

「はあ……こんな優秀な学校に来るとプレッシャーだよなあ」

ポリポリと後頭部を憂鬱なまま搔き、頭にもの凄い重圧を感じた。

「おおおっ!？」

倉敷壱の能力——名前は決めてないが何か防御的なアレ——は発動しなかったらしい。

重みに負け、林道の真ん中で無様に後ろから倒れた。

後頭部を打ちつけ、脳内がキンキン痛む。

「うっー私はまだ上手く飛べないでした……」

壱の間近で女の子の声。

そして、壱は気づく。

降って来たのは女の子だと言うことに——。

「マジかよ……」

放心状態で呟き、そして今の状態を一瞬で再確認する。

女の子の背中に回された手。

絡み合った脚。

その時、女の子は手をつきしだけ身体を浮かせ、大きな瑠璃色の瞳を閉じたり開いたりする。

女の子の顔が間近に来た。

女の子は可愛かった。

髪は羽毛のように柔らかそうな金色。

睫毛は長くぱっちりしている。

外国人かと思ったが、骨格や絡み合った脚の肌のきめ細かさや柔らかさから言えば身体の華奢な日本人だ。

それとも外国人と言えば骨格が太く、肌が粗いイメージがあるのだがそれは幻想だったのだろうか？

女の子の柔らかそうな桜の蕾みたいな小さな唇から漏れ出る吐息が舌の鼻腔をくすぐる。

舌はもう脱出不可能。

脳幹が混乱をきたしたのか一ミリも動けない。

再確認に要した時間は恐らく一秒にも満たないだろう。

女の子は舌を見て、一瞬で飛びのいた。

「わあ！？ す、すみません！」

ペコペコ舌に謝る女の子。

服装は純白のドレスのような服装だった。

しかし、下がスカートのようにヒラヒラで、凄く歩きにくそうだ。

「まあいいけどさ」

ようやく呪縛から解けた舌は立ち上がりそう言う。

「んで、何で俺の上に落ちてきたんだよ？」

女の子は何かを警戒するようにきよろきよろ辺りを見回した。

右、左、右、左。

まるでスパイ映画の銃撃戦の一部を切り取ったような動き方だった。

「実はですね……」

女の子は少し興奮気味に、秘密のお話を焦らす子供のように一旦間を置いてから、

「私は天司なんです！ 大天使様の密命で悪魔を退治しにきたんです！」

あまりの告白に舌は少し驚いてから半目で言う。

「いや、信じらんない」

壱の言葉に女の子は不満そうに、

「確かに大天使様は人間界との接触を絶つように言いましたけど…」

「…」
「だろ？ お前、もしかして墮天司か？」

昨日見た教科書では（教科書を読む前でも知っていた一般教養だが）大天使はあの戦争以来人間界との接触を絶つようにしたい。そして、天使が感情により、汚染され——墮天した存在を主に墮天使と言う。

天司は魔術の元となる『天使』の集合体だ。

因みに墮天使が集合すると『墮天司』である。

なぜ天司と書くかと言うと、天使を発見した後に人間が理論の上で作り上げた存在だったからだ。

「『天使』ってつけちゃってるしなーんじゃあ天使を司る者的な感じで天司でお願いします」

まあこんな大方こんな軽いノリで名づけられたのだろう。

その数年後に出てきた天司達はがっかりしただろうな、と壱は教科書を見ながら思ったものだ。

「違います！ 私はその悪魔を成敗しに来た——言わば正義の使者なのです！」

「……悪魔？ 墮天した天司のことだよな？」

「ちよつと違います。悪魔は神様を敵に回したり人間に危害を加えたりする存在ですけど、墮天司は自由気ままに生きるだけの無害な存在ですから」

「ふーん」

壱は目線を左へ右へ、意味も無くやってから言う。

「学校あるから俺行くわ」

そう言つて天司の横を通る。

がしつと、手を握られた。

「あの、天司さん？」

「信用してませんよね？ それと私の名前はクレアと言います」

柔らかく温かい手にちよつとドキドキする心を抑えつつ、言う。

「まあ、信用は難しいけど——って羽？」

女の子——クレアの背中から純白の小さな翼が見えた。

翼は天司の象徴だ。

「マジで、天司？」

壱の呆然とした言葉にはあつと顔を輝かせるクレア。

「ようやく信じてくれましたか!？」

「いやいや魔術を使えば羽くらい……」

女の子は少し呆れたように、

「その頑なに信じないのは何でなんですか？」

「いや、だって……天司なんて……」

見たことないし、と壱。

クレアはふむ、と一つ頷く。

「でしたら私能力の内の一つ——天司としての能力——『同調』をお見せしましょう!」

そう言うって何の承諾もなく修道女のように手を組むクレア。と。

周りの天使が集まり、姿を現した。

純白の光がクレアを包み込み、神々しい雰囲気が漂う。

何となく、馬鹿っぽかった女の子だったのに……。

「これは魔術、じゃねえ……」

天使をそのまま操る技術なんて聞いた事も無い。

もしかしたらあるかもしれないが、ここまでして壱に嘘を吐く意味なんてない。

故に、

「ホント、なのか……」

「ようやく信じてくれたんですね!？」

天司と倉敷壱

「お前。これからどうすんの？」

壱の問いかけにクレアは笑みを浮かべて言った。

「はい。悪魔退治に倉敷壱さんという人に手伝ってもらうので学校に」

「んは？」

思わず可笑しな声が漏れた。

何て言いやがったコイツ？

「だから倉敷壱さんに……ってあー」

何かに気づいた様子の天司さん。

「もしかして、壱さん？」

ここで嘘を吐けばよかったのだ。

なのに壱の口は正直に動いた。

「エエソウデスヨ」

「え？ あなたが壱さんなんですか」

よかったあ、とクレアは安堵の声を漏らす。

「何が良かったんだよちくしょう……」

泣きそうな声で壱は呟く。

（何で俺にこうも災難が続くんだ？）

「誰かの陰謀を感じざるを得ない」

壱の言葉を聴いていないのかクレアは鼻歌でも歌いそうな調子で、

「私、人見知りですぐに仲良くなった壱さんでよかったです」

「つか俺は協力する気なんてねえぞ。そういうのは海田京に頼め。」

アイツは昨今のネット小説の主人公っぽいから押しに弱いはずだ」

と、ネット小説を読み漁るのが趣味の壱が言う。

いや、海田みたいな主人公は嫌いなだけけども（噂を聞く限り）

「でも大天使様は倉敷壱さんじゃにといけないって言うてましたし

……」

何で見知らぬ大天使が俺のことを買い被ってんだ？ と壱は懐疑心で目を細める。

何か、あるんじゃないだろうか？

銀行強盗がなぜ壱を発砲したのかもまだ分かってはいない。

銀行強盗に大天使——繋がりはなさそうだが。

「私も壱さんが良いですっ」

そう言っただけでクレアはぺこりと頭を下げる。

うっと、壱の鋼——に見せかけた発砲スチロールのような決意は容易く崩壊しそうになる。

懸命に防空壕を作ろうとするがそんな時間はないし、余裕もない。

「あーいやーそのー」

間延びした無意味な返事をしつつ考える。

壱の予定は盛り沢山だ。

勉強もしなくてはいけないし……あれ？

「勉強しかやることなくね？」

俺の青春って一体……そうガツカリするがまあこれが普通の高校生の実態というものだろう。

鞍馬と綾瀬の性格から推察すると遊びに誘ってくる可能性もあるが、断ることも可能だし……そもそも遊びに行かずに高校三年間を終わる可能性もある。

クレアは壱の発言に希望を感じ取ったのか嬉しそうに言った。

「じゃあいいんですか？」

「まあ……危なくなければ」

洪々と頷く壱。

仕方ない。

悪魔が居るとなればやっぱり危ないし、クレアが怪我を負う可能性だってある。

無論、鞍馬もクリスも綾瀬も、被害を被る可能性があるのだ。

「危ないときは私が護りますから！」

「すげー気合だなオイ」

大天使様の思惑も気になるが、コンビ結成である。

ナンパとクレア

下駄箱の前で『質問会』は行われていた。

「で？ その子は誰なの？」

綾瀬がぞつとするような声でそう言う。

何か一つ履き違えれば殺されそうな勢いを感じる。

「あん？ 大人の階段を登って卑猥な会談してたとか言ってみる？
地獄のローリングスブラッシャーをかけてやるからな」

「遊星・九十五点。でもその子誰なの？」

綾瀬の後ろに隠れて物申す遊星にクリス。

「鞍馬にクリスに綾瀬。聞いて驚くなコイツは天……」

「うわい！？」

壱の後ろに立っていたクレアは壱に物凄い勢いで抱きついてきた。
と、同時に口に手を当てられ耳元で囁かれる。

「私が天司だということは秘密です」

「何だよ？」

と囁き返す壱。

柔らかさと甘い匂いに頬を緩めなくなるが生憎と友人たちの前だ
(周りに誰が居なくとも同じだったろうが)。

しっかり頬を固定するが、それがまた奇妙な引き攣りを引き起こしていることに本人は気づかない。

「私为天司だということがバレたらこの世界のパパラッチという人たちに追い掛け回されるという噂を耳にします」

「いや日本にパパラッチは居ねえから大丈夫……っつか天司でセレブならまだしもお前セレブじゃないし……」

「え？ じゃあ私の正体をばらしちゃっていいんですか？」

「いやそれはNOだ。マスコミや好奇心旺盛な奴らに祭り上げられるのがオチだからな」

「じゃあ、やっぱり秘密に？ うっ……秘密になるとなぜこんなに

言いたくなるんでしょう？」

なるほど、通りで周りに警戒しつつ天司であることを教えてくれた訳だ。

「お前には秘密の相談は絶対にしねえ。今決めた……つか羽は？」

「ええ？ 何で相談してくれないんですか？」

「そこに食いつくなよ……。羽はどこ行った？」

「翼は服に収納可能ですっ！」

次の瞬間、グイツと腕を引かれ、クレアから引き剥がされた。

「あん？ 何だよ一体……」

そこには、なぜか泣きそうになっている綾瀬の姿があった。

どういたんだろう？ と首を傾げる。

「ちゃんと言つて。壱とその女の子がアレヤコレでアアであっても私はもう全てを受け入れる準備が……ってやつぱり駄目ええええ！！」

ゴガン！ 壱の後頭部に物凄い綺麗なハイキックが見舞われた。

「いつ！？ 壱さん！？」

「うわー痛そう……」

「俺もテメエに毎回毎回殴られてっけどな……ってあれ？ 倉敷？

こ、呼吸してねえ！？」

「わ、私のせいだあああああ！？」

「私との決戦の日まで生きてるのかしら？」

ブラックアウトする意識の中でそんな様々な声が聞こえた。

（防御機能……働いてよ……）

※※※※※

起きたら既に昼でした。

壁に掛かっている時計は既に十二時を指し示している。

思考に霧が掛かっているようにぼんやりする。

「あ！ 壱さんようやく起きたんですか」

嬉しそうにそう言うクレアは体調の程を聞いてくる。

「ああ。まあ大丈夫だ」

一つ頷き、綾瀬の一撃で地に伏したことを思い出した。気絶なんて産まれて初めての体験だが、後頭部が石でこつんこつん殴られているみたいということ以外は昼寝と変わらない。

まあ、それが最悪の後遺症なんだが、それは置いておく。

周りを見渡し、現状を確認する。

寝かされていたのは勿論ベッドで、周りにはカーテンがあった。更には湿布のみたいな薬品の匂い。

保健室だ。

もう一眠りしたいが、もうお昼だし腹が減っている。

壱はクレアの方に向き直り言った。

「まあ、十二時だし昼飯でも買いに行くか？ 五百円までなら食堂で奢ってやる」

ついでに綾瀬には激辛ソーセージでも食わせてやろう、と決意してベッドから起き上がる。

「はい」

天使のような笑みを浮かべてクレアは言った。

まあ、彼女は天司なんだけれど。

＊＊＊＊＊

あ、と食堂でフレアが独りで食事を採っているところを見て保健室でのことを思い出す。

そしてクレアは自分のことを起きるまで待っていたのだという事実を、発掘した。

お礼を言うべきだろうか？

そう思うが時期が逸した気がする。

だけど、お礼を言わないとやっぱり駄目な気もするし……、と壱は優柔不断に迷い続ける。

そこでクレアが居ないことに気づいた。

周りをきよろきよろと見渡し、

「あれ？ 何で君、制服じゃないの？」

「昼飯食べながらでも教えてよ」

「ええ、と……私はきさんと食べるので……」

ナンパされていた。

容姿がいいので制服でないとああいふ奴らの対象にされてしまう
らしかった。

断りの文句に自分の名前が入ったのが何となく嬉しい。

「ふーん。じゃあいいや。コレ俺のメルアド。気が向いたら連絡してよ」

「オイ！？ お前用意周到すぎるだろ！ コイツは本当は海田に次ぐ軟派野郎だから連絡はしないほうがいいよ、って首が捻じ切れる
うつつうつつうつつ！？」

「余計なことベラベラ喋ってんじゃねええええええ！」

仲良い二人（片方はヘッドロックされている）である。

クレアはそんな二人を無視して早く早く、とカウンター前で手を振っている。

クレアの元まで駆け足で向かうと、軟派二人はそのままの体勢でテーブルへ向かっていく。

クレアはおばちゃんにところてん（何であるんだろう?）、クリ

ムパン、カレー、緑茶を頼む。

「そんなに食えんのかよ」

言いながらちりり、とフレアを見る。

フレアは独りで白の縦長テーブルにつき黙々とカレーパンを放り込んでいた。

壺はそれを気にしながらもホワイトデニッシュチョコを五個とオレンジジュースを頼む。

パンにチョコレートが入っているのだが、チョコレートもパンも美味しく、昨日で虜になった……というより昔壺が大好きだった菓子パンをパクってんだろ？　と思うくらい似ているのだった。

だってこのパンを創っている会社が『ヤマサキ』だし。もろパクリだし。

カウンターから出てきたところてんとクリームパン、カレー、緑茶をクレアが試行錯誤しつつ腕の中へ積み上げていく。

壺は頑張るクレアの姿をもう少し見ていたかったが、いつの間にか後もつかえているのでカレーを持ってやる。

「ありがとう壺さん」

そう言っさつさと歩き出すクレア。

「オイ。どこ行くんだよ？」

迷いない足取りに疑問を覚えクレアに言う。

「あの人のところに行くんでしょう？」

クレアはフレアを視線で指し示した。

フレアと本

「よう」

「こんにちは」

フレアのテールブルへつき、挨拶を交わす。

壱は特に表情は変化させずに、クレアは満面の笑みだ。

「私達は敵な筈だけど」

フレアは氷のような冷たさで言う。

「まあ、そうなんだけどさ」

友達が居ないのか？　と思うが壱だって独りで食堂で飯を食べるくらいある。

だけど相手は女の子だ。

女の子と言えば、周りの目を男子以上に気にする生き物だと、山内から聞いたのだが、そんなモノでもないのだろうか？　まあフレアがそういうタイプでないだけかもしれないが。

「女子友達はキツイです」とたまに愚痴ってきた川内を思い出す。

川内さんは独り飯を許してくれないと嘆いていたが、その集団が異質だっただけなのだろうか？

「で？　何の用？」

フレアはまたしてもぶすつとした態度で一言。

「いやー何で独りで食ってんのかなあーと」

あくまで気軽な感じで聞いてみる。

すると、フレアはカレーパンを齧り表情を変えずに言った。

「私は友達居ないって聞いてないの？」

「ああ、そうなんだ」

と、壱は頷く。

頷くが、正直どうしようもない。

そもそも、気になって声をかけただけで、特にその後の展開は考えていなかったのだ。

「ああ。そうだカレーパンって好き？」

フレアはカレーパンを齧りながら横目で舌を見る。

「ん？ まあ好きだけど」

質問の意図が分からないままにそう答える。

「じゃあ上げる」

ぽいつと食べかけのカレーパンを渡された。
どうしろと？

※※※※※

「ふへへへへ……」

フレアは自宅で微かな喜びに浸っていた。

部屋の本棚には『友達の作り方百選』だとか『知人以上になるには』だとかが二割——つまり二十三冊——埋まっていた。

ベッドで枕に顔を沈めたりしてみる。

本でよく書かれている特に気負いのしないプレゼント（カレーパン）も上げた。

これはもしかしたらもしかしちゃうのだろうか？

フレアがこの学校に来たのが、二ヶ月ほど前——つまりはグループがもう固まりつつある頃であった。

固まりつつある、ということは皆、その継続に力を注ぎ込んでいるということであり、そして自分自身の対人関係の悪さにより（コレが大半の理由だと思う）友達は無。

更にはクラス内でトップの魔術の資質と成績をとってしまったので『才能ある嫌な女』で定着してしまった。

因みに遅れた理由は、慣れない日本の気候にずっとダウンしてたからだ。

しかし！

転校生が来てくれた。

これはまたとないチャンスだ。

向こうから声をかけてくれたのだし、多少なりとも友達になってくれる気はあるはずだ……多分。

だけど、何を喋ろう？

本を開けて読み、趣味を訊くのを忘れたことを思い出す。

だけど、外国文学を読むのが趣味の自分と合う人ではなかったと思う。

というか、そんな高校生は存在するのだろうか？

「それ以外に趣味ってないし……」

本を視線で貫通させるくらいに真剣に読む。

だってもうこれが最後のチャンスなのだ。

会った瞬間、頭が真っ白になって喋れなくなるのはもう二度と避けたい。

というか、これのせいで友達が出来なかったことは明白なのだ。

『「ねえねえ。○さんの趣味って何？」

「ボクの趣味は読書かなー」

「好きな作者とかは？」

「伊坂幸太郎かなあ」

「あ、私もその人の本を読もうかと思ってるんです」

「へーじゃあ今度本を持ってきてあげるよ」』

こんなに上手く行く訳ないでしょ、とそう思うが多少距離は縮むかもしれない。

でも、明日は決闘だ。

「私が勝って趣味を聞くの？ あ、別にその時でなくてもいいのか……」

あれ？ 倉敷は辻や鞍馬などが居て話しかけられない。

じゃあ、やっぱり放課後？

グルグルと思考の渦に囚われ、思考が熱を帯びてくる。

「倉敷の隣に女子が居たけど制服じゃなかったし……明日はこないだろうな……」

今日は眠れない夜になりそうだった。

クレアと壱の情事

「で。何で俺がテメエを泊めなくちゃなんねんだよおおおお!!」
「？」

「と、言いつつご飯を出してくれるのが優しいですよね」

ニツコリと甘さで毒殺できるような笑みでそう言うクレア。

それに大した反論内容も思い浮かばず、嘆息し、野菜炒め（独り暮らしの男の必需料理の一つ）をかきこんでいく。

「お前、ここは一部屋しかねえし、布団も一組なんだけど……寝る時どうすんの？」

特に何があるわけでもない部屋で壱は訊いた。

「床で寝ます」

……………。

沈黙。

重苦しい沈黙のカーテンが下りるが、鈍感を装い白米を食べながら更に訊く。

「一部屋しかねえんだけど……寝る時は？」

「……え、つと……私は床で……」

そっという問題じゃあないんだクレアさん。

俺達男子高校生は八畳間一部屋の空間に女の子（それも飛びつき可愛い）と一緒に居るとどうなるか……。

壱は自らの想像内でバッドエンドを迎えそうな気がしないでもない。

爆死ルート。

あ、いや、何で自分のが使い物になると思ってんだ？ と、少々自虐的かつエロティックに思考を進める。

「つか、大天使は何考えてんだよ。一緒に住ませようとするなんて」「す、すみません」

うつ、と小さく座りながら頭を下げるクレア。

「まあ、お前が悪いんじゃないしなあ……」

クレアによると大天使はこう言ったらしい。

壱と一緒に住まして貰いなさい、と。

「ふっざけやがって。つかお前は嫌じゃねえのか!？」

壱はグビッと麦茶を飲み、訊く。

まるで自棄酒を呷って文句を言うサラリーマンである。

「私は壱さんが嫌な人ならこんなこと言わずに野宿してましたよ」

ニツコリと糖度百パーセントの笑顔を向けてくる。

人は疑うことを覚えろよ、という言葉を麦茶で押し戻した。

これからは最悪な毎日になりそうだ。

「はあ……」

氷氷氷氷氷

何だかんだでコタツ専用布団を持ち出して、包まり眠る壱。

クレアはスピースピーすうすうと、気持ちよさ気に眠っている。

因みに服装は壱のＴシャツにハーフパンツだ。

パンツは一緒に（相手は壱よりも地理に詳しくないので）買ってきた。

「うっ……俺ってばなんでこんな……」

しかも明日は悪魔を探しに街まで進出するらしい。

悪魔は壱の都合など考えてくれないので仕方がない。

寝返りで布が擦れる音で、心臓がやけに早く動いた。

あつれ？ いやいや相手は得体の知れない天司ですよ？ 欲情な

んて絶対無いって。

負けるもんかよちくしょう、と寝返りを打つ。

何に負けるのかは全く分からない。

そこに、クレアが居た。

正確に言つとクレアの真っ直ぐな背中。

「……あれ？ クレアの羽は？」

「翼です」

少し強めの訂正文。

「あ。うん。悪かった。翼は？」

「硬度を調節できるんですよこの翼は。布から石まで様々な感じに
ですなー色々と」

壱はクレアが自分の話をするときは割と上機嫌なことを今発見し
た。

声が少し弾んでる。

「へー」

興味本位でクレアの背中——もっとしつかり言つのならTシャツ
越しに翼に触れた。

「ひゃう!？」

クレアは何か変な声を出した。

嬌声、というのが一番しつくりくる声だった。

沈黙が降りる。

壱は驚いて瞬きもできない。

クレアは夜目でも分かるくらいに顔を真っ赤にして、神速の動き
で布団に丸まった。

天司のくせに神速だ。

(面白くなかったね!!)

壱は頭の中に蛆虫が湧いたような、熱い紅茶をぶっ掛けられたよ
うな感覚に戸惑いつつ、今までの人生経験を駆使してその感情を完
全無視。

しかし、沈黙からは逃れられない。

どんどん溝ができていくような嫌な沈黙に耐えられない。

そこで頭上においてあったケータイが光を起こした。

「あ、メールだー」

芝居がかった口調でケータイを開ける。

クレアは無視。

もしかしたら寝ているのかもしれない。

寝てたらいいな、ときは思う。
メールの送り主の名前を見る。
『綾瀬』

感情Ⅱ？

『フレア・カルフェについての情報』

そして件名はこう書いてあった。

そう、壱は綾瀬にフレアについての情報を入手しようとしていたのだ。

と、言ってもそれを言ってきたのは綾瀬からで壱から何も言っていない。

「アイツ、すげえ張り切ってたからなあ……」

本文を映し出すとそこには……見るに耐えない長文が映し出されていた。

総文字数七千。殺す気か。

ともあれ、知りたい情報は魔術のアレコレではない。

そんなもの壱が知ったところで何の役にも立たない。

壱が知りたいのはフレアがどういった立ち位置に居て、どのような生活を送っているか、なのである。

しかし、壱の期待に反して魔術、運動神経、成績ともに抜群でSクラスにギリギリなれなかったという情報しか書いていなかった。

「まあ、小説とかなら、プライド云々なんだろうけどなあー」

果たしてコレが当たっているのかいないのか。

※※※※※※※※

何だかんだ言ってもあと十分で決闘である。

「いっちさーん」

と、クレアが手を振って教室に突入してきたのが十五秒前。

「ああもうやだ……」

机に突っ伏してそう漏らす壱。

「ていうか、何でお前が居るんだよ……」

「待ってろって言ったじゃねえかよ」

その不用意な発言がいけなかったのか、綾瀬と鞍馬が凄く不機嫌な顔で壺に詰め寄ってくる。

「おーい何その問題発言。まさか寮で女の子と泊まり？警備の甘さにつけ込みやがってええええええ！！！」

「どういうこと？ 事と次第によっては……」

喚く壺に綾瀬はふふつと不適な笑みを浮かべる。

鞍馬遊星はカッターの刃を無言で出す。

冷や汗が背中を伝う。

「何で不機嫌なんだよ……ていうか、殺気と武器をしまってくれ」
「で？ どういうこと？」

クリスがしつかりと大人な態度（二人に比べて）、そして、好奇心満載な口調で訊いてくる。

「一緒に住んでるんだけどいったあ！！？？」

馬鹿なことを言い出すクレアの頭を平手で打つが、しかし、もう遅かった。遅すぎた。

「殺す！」

と、鞍馬遊星がカッターを振り回す。

「まあまあ。どうせフレアさんに黽められるだけだから」

悪魔のような微笑みでそう言う綾瀬に遊星は嬉しそうに頷く。

「だよー」

「オイ、テメエらぶつ飛ばすぞ？　まあそれはともかく、フレアって友達いねえのか？」

「居ないよ？」

「何で？」

綾瀬はその問いに少し口ごもる。

「アイツがム力つく態度ばっか取るからだろやっぱり」

「まあSクラスのなり損ないだしねー。プライドが高いんじゃない？」

と、遊星とクリス。

決戦まであと八分。

決意まであと三秒――。

※※※※※

決闘場所、というよりまるで競技場のようだった。

芝生が敷き詰められており、広さは体育館の1・5倍ほど。

競技場……ということは勿論、観覧席がついてあり、遊星と綾瀬とクレア（クリームパンを食べている）が席についていた。

「逃げずにこれたことは褒めてあげるわ」

フレアが長い銀髪を揺らして傲慢の塊のように言う。

（……ああーありがとうございます。つかやっぱり、プライド高いから独りなのか？）

一応心の中で礼をしておく。

「えーではルール説明を」

先生は防御ガラスを盾にしながらファイル片手にルール説明を行う。

防御ガラスとは、魔術をある程度なら無力化してくれるというモノだ。

実戦では役に立たないということが実戦で証明されている。

「時間は無制限一本勝負！ ダウンして十カウントしても負け！ギブアップしても負けです！」

「一体どういう武道大会だよ」

壱はげんなりしつづつ言う。

そして思い出したように手を上げて発言した。

「あ！ そうだ。提案が一個」

「えーと。何でしょう？」

「俺だけ勝負の決着方法変えてくれませんか？」

会場内に居る皆が壱に注目する。

何言ってるんだ？ コイツ。と視線で言われている気がする。

「怖気づいたの？」

とフレアが微妙に頬を歪ませて言う。

何の表情を作っているのかはおそらくフレア自身わかっていないに違いない。

「別に少しのハンデはつけてもいいけど」

「んじゃあさ。俺はお前の頭を撫でたら勝ちってことでいい？」

は？ と会場の温度が五度は下がった。

「な、何をさらつと言ってるの？ 壱？」

「うわーそれはねえよお前…… すぎえな」

「何で褒めてんの？」

「ああー壱さん…… それはないです」

「違う！ 違う！ 断じて違うぞ！ 俺はただコイツを殴るのが嫌なだけで……」

「えーこのルール変更でOKですか？ フレアさん」

驚愕のルール変更に戸惑っていた先生とフレアは何とか体裁を保ち、言う。

「まあいいですけど」

フレアは何とか頷き、壱に向き直る。

会場内の壱の味方（鞍馬と綾瀬）が一斉にフレアを応援し始めた。

「あともう一つ！」

「ん？」

とフレアが首を傾げる。

「フレアが勝ったら俺に大会に出るなって言うけど俺が勝ったとき

のメリットがねえだろ？」

「まあ」

「なら、勝ったら俺のお願いを聞いてくんねえかな？ ま、嫌なら拒否してくれればいいし」

壱の言葉にフレアは軽く頷いてみせる。

「いいけど別に」

先生は壱とフレアを交互に見つめて、腕を振り上げた。

「試合開始！」

あれ？ どれ？ 瞬勝

それは一瞬の出来事だった。

壱は一瞬で距離を縮め、フレアは魔術を生成する間もなく子供み
たいに頭を撫でられていた。

「な……っ！？」

全ての人間が息を呑んだ。

「は！？ オイ！？ アレ！？ 何だ敷の奴？ あんなに強かった
のか！？」

と、遊星が驚きの声を発する。

「まあな。これにこりて倉敷の敷は敷物の敷とか劣等性なのに壱と
かくだらねえこと言うんじゃねえぞ」

壱はくうーと一回伸びをすると同時に手を離れた。

未だ呆然とするフレアを見て、後頭部を無意識に描く。

罪悪感のようなモノが心に降り積もり、嫌な感じになる。

『勝ち』というのはここまで嫌な気持ちにさせるものなのか、とや
んわり思う。

「まあ、何だ…… あー俺の勝ち」

「えーと。何が起こったのかよく分かりませんでした…… 倉敷壱
の勝ちです……！」

わああ！！ 凄い凄い！ とクリスと綾瀬とクレアが歓声を上げ
る。

遊星だけはこう言った。

「何でこんなつええのに…… 雰囲気は緩すぎるし、馬鹿だしアホな
んだ……」

観覧席から言われているせいかやたら見下されている気がする。

「ああ、鞍馬は上げてくれないんだな。ま、いいけど」

いややつぱり良くない！ と壱は吼える。

フレアは呆然とした態度を解いて言う。

「何なの？ 今さっきの力は……？」

「ん？」

あの速い動きのことか？ と、倉敷壺が尋ねる。

コクリと、首を縦に振った。

「ああ。純白の粒子を身体に染み込ませることで身体能力を上げれんだよ」

フレアは聞いているのか聞いていないのか分からない呆然とした表情で頷いた。

氷氷氷氷氷

決闘から一日たったその日からフレアは自分がおかしくなっていることに気づいた。

倉敷壺が辻綾瀬に笑いかけるとイラッとするようになったし、もっと喋りたくなった。

恐らく辻は倉敷のことが好きで、倉敷が辻に好意の笑顔を向けていることが怖いのだろう。何で？

もしくは自分にはない体験だから凄く羨ましい、ということも考えられる。でも、何で？

「よ」

目の前に倉敷壺が居た。

「きゃあ！？」

ビックリしたのか、それとも別の感情が働いたのかフレアは椅子ごと後ろにこけてしまう。

宙を舞い、床に叩きつけられると瞼を閉じた瞬間、背中に人の温かい手が突如出現する。

壺が支えてくれたのだ。

「オイ。大丈夫かよ？」

「大丈夫に決まってるでしょ！？」

フレアは恥ずかしさで思わず怒鳴り散らしてしまう。

怒鳴った、という事実にも恥ずかしくなり頬が赤くなる。

「何の用なの？」

椅子に座りなおしたフレアを見て壱は話す。

「ま、友達だし理由なんていらねえだろ？」

倉敷壱の願い——それはフレアと友達になることだった。

「つーのは嘘で鞍馬と一緒に食いたいんだって」

壱が指し示す方向にはクリスにコブラツイストをかけられている遊星の姿があった。なぜか、その言葉がムカついた。

アンタはどうでも言い訳？ と。

「あれは、嘘よ」

思わず言葉が突いて出た。

（あれ？）

は？ と壱は困ったように眉根を寄せる。

「嘘って友達になるってこと？ 俺のこと嫌いつてこと？」

「いや、そうじゃなくて……」

そう、倉敷のことは凄く好きだ。

じゃあ何で『友達』を否定したのだろう？

つまりは……愛してる？

極論すぎるとは思ったが、頬が熱を帯びてきてそれが正解だと告げる。

そんな小説でしか知らない感情に……私が？

「あれ？」

「どれ？」

あれ？ どれ？ 瞬勝（後書き）

タイトルが造語ってどうなんだろう？

あと、何か注文質問などでも感想受け付けています。

注文されてもその通りにやる可能性は低いですが……

小ハーレム（まだまだ拡大中）

「フラれてるー」

綾瀬が壱に向かって指差し笑う。

その後、いくら話しかけてもあれ？ とフレアは首を捻っていたのでスゴスゴと引き下がったのだ。

壱はどうしたんだろう？ と首を捻り、

「鞍馬。テメエのせいだ。一緒に食べたいと言っからー」
何となく責任転嫁。

「意味わかんねーよ。どう曲解したらそうなるんだよ。つか俺の傷つきようを見る」

遊星は机に額を押し付け、声は幾分か沈んでいた。

クリスは遊星の机の真後ろの机に行儀悪く座り、ズカズカ遊星を蹴っている。

どうも、変なヤキモチを焼いているらしい。

「あの、何か勘違いしてない？」

遠慮がちな声に反応して一斉に後ろを振り向く壱、綾瀬、クリス、遊星。

後ろに三個のカレーパンを持って佇んでいたのはフレアだった。

フレアは顔を真っ赤にしながら壱のもとへ歩み寄ると、恥ずかしげな声で、決意を込めて言う。

「私が言いたいのはね……友達以上の関係になりたい……」

綾瀬は血の気が引いたように真っ青になる。

ノーマークの選手にゴールを奪われたサッカーの監督のような顔だ。

「え？」

そう驚く壱にクラス中の全ての視線が集まる。

そして、恥ずかしそうにハニカミつつ、

「いやーそれは時間をかけないと……ホラ。信頼関係とかまだ築け

てないし」

フレアは寂しげにこんなもんだよね、と儂げな笑みを浮かべて頷く。

綾瀬は嬉しがればいいのか、フレアに同情すればいいのかわからないと、表情を二転三転させ、遊星は悔しそうに歯噛みし、クラスの連中とクリスは興味津々な感じで見守る。

そして、壱はフォローするように言った。

「あ、でも！ 俺はお前とそういう関係になりたいと思ってるぞ！？」

クラスの雰囲気が一気に期待に高まり、綾瀬はもはや、生きる屍と化し、身動き一つ取れないでいる。ホントに指一本動かさずに茫然自失。

フレアは高まる感情を抑え付けられず蕩けた笑みを出るばかりである。

「本当に？ 本当にになりたいの？ 私と？」

しかし、そこで壱は全てを無に返した。

「当たり前だろ？ だって多いにこしたことはないんだから」

.....。

静寂がクラスを包み込む。

『今なんて言いました？』 そんな突っ込むにツツコミきれない雰囲気。

「お前。ハーレムルート建造計画でも立ててんのかゴラアアアアアア！！」

静寂をぶち破り、壱に掴みかかる遊星。

「は！？ 何で親友云々の話でハーレムが出てくんだよ！？ 頭沸いてんじゃないの！？」

この日、クラスメート全員が忘れられない衝撃を受けましたとさ。

『死に、死にやがれえええ！！』

「何でクラス中から怒声が！！？」

「壱、死んで？」

「あれ？ フレアさん？ 手に持ってる炎は何？」

「おらああああ！！ 空気砲おおおお！！」

「鞍馬まで何！！？」

「私は嬉しかったけどね？ フレアの仇よ！」

「仇って何！！？」

悪魔憑き

「さいっあく!!」

一人帰り道の林道で絶叫する男の名前は倉敷壱だ。

類まれなるネガティブ——俺なんかがモテる訳ねえよな——思考により、クラス中の反感を買った鈍感（恋愛面で）男である。

命からがら（しかし無傷で）帰還した壱は皆の形相を思い出し、ぶるっと一つ身震いした。

「何で怒られたか全くわからん……」

ふいつと首を捻り、そして。

「この天使の揺らぎ——悪魔憑きね？」

「ん？」

真後ろに女の子が居た。

気配は感じなかったが、今では膨大なまでの殺気と闇のように濃い気配が漂っている。

黒い髪を肩甲骨の辺りで結わえたポニーテールがよく映える気の強そうな女の子だ。

鋭い眼差しと大降りの真剣をコチラに向ける。

ジーパンにTシャツという出で立ちで身長は壱の頭一つ分低い。

（そっぴや、海田達は悪魔を倒したとか言ってたなあ……）

「悪魔？ そりゃあ俺の……あーアイツって俺の何なんだ？」

壱は首を捻り、そして、木刀が目の前で爆ぜたように火を噴いた。少女が一瞬で壱の間合いに入ってきたのだ。

話せばわかるとか高を括っていた壱は堪らず声を上げる。

「うわ!？」

炎を受け——しかし、純白の結界で守護されながら転がるようにして逃げ出す。

「この悪魔憑き……理性を兼ね備えてる？」

目を細めながら意味不明な驚きを勝手に展開。

「ちょっと待つて！！俺は人間で……！」

「天使が畏怖する唯の人間が居るモンか」

「ひいい！！？　ちょっと待つて！　俺が悪魔憑きだったとしてお前が狩る意味なんてどこにあんだよ！」

「相手が人に仇名す悪魔なら理由は十分よ！」

木刀を横に薙いで壱の尻を捉えた。

灼熱を帯びた木刀は純白の粒子が受け止めてくれ、壱は林の中へと飛び込んだ。

「何て危ない奴だ……！？　悪魔よりこええよ！」

そう言いながら林を右へ左へ敗走を開始する。

※※※※※

「チツ……逃げしたわ」

黒髪の少女は『ケイトス』を操り、木刀を空气中に霧散させる。

人は極稀にある一定の天使に気に入られることがある。

その天使はその人物に憑き、持てる力全てを扱いその人の為に尽力する。

それがケイトスだ。

因みに、その人物から魔力を得られなくなった場合、エネルギーが切れて消失する。

「あー！　イライラする！　何あの悪魔憑き！」

悪魔に魂を売った奴のくせにあの敗走。

「だけどもあ、久しぶりの理性ある獲物だし、本腰を入れて狩らないとね」

歳の差。種族の差会話

「悪魔の件ですが……」

クレアは米粒を頬に引っ付かせてシリアス口調でそう言った。

「何？」

さっきまで「今日、クラス中に追い掛け回されて、更に見知らぬ女の子が……」と愚痴っていた壱が聞き返す。

「明日探しに行きませんか？ その謎女の子も気になりますし」

「い——」

「——というか行きます！ 決定しました！」

「まあいいけど。暴れられる可能性もあるし。でもさあ、二日前探しに行ったのに見つからなかったじゃん。何か天司の術で何とかなんねえの？」

「無理です。私、まだ歳も若いし……そんな高等天術は……」

「歳？ 何歳なのよ？」

「……」

「何歳でしょうか？」

「……千」

「は？ 千歳？」

「千二百八十歳です！」

「ば、ババアどころじゃねえよ！ 化けモンじゃねえか！」

天司がそこまで長生きなんて教科書にも載ってなかったぞ！ と壱は心の中で三順堂に文句をぶつける。

「で、でも天司でこの年齢はまだピチピチの十代というか……」
ぶつぶつと、俯きながら小声で反論するクレア。

壱は話題を修正してやることにする。

「で。悪魔を探すんだな？」

「……え？ 何か言いました？」

「悪魔を探すのかつつたの」

「あーはいはいそうですね」

「お前、さっきまでのやる気はどこ行つた？」

「やる気はありますよー。一杯です。それより壱さんは大会に出場するとか？」

「ん？ まあな。因みに三日後」

「じゃあ応援旗を作らないと！」

「お前は子供に迷惑がられるお母さんになりそうだな」

「すあうあどあ！？」

「何？」

「壱さん、私との結婚を考えてたんですか！？」

「お前……自意識過剰な女だな」

「天司の間では女性と子供の話をするのがプロポーズの遠回りな言い方なんです！！」

「ああ……お前の味噌汁を毎日飲みたい的な？」

「そうですね。別に私だって壱さんに好かれてるなんて思ってたせんでしたから」

「まあ、一緒に暮らしてる時点で結婚と大差ないような気もするけどなー」

「……」

「あれ？ 顔を真っ赤にしてどうしたの？」

「いえ。別に……どうぞ会話を続けてください」

「いやーそんなことで顔を赤くすんなよなー全くよ」

「べ、別にしてませんけど！？ 私は告白とかされたことあるんですから！ こんなことでは……」

「へーどんな奴に？」

まあ、告白されたのは本当なのだろう。顔はいい訳だし。

「……」

「どんな奴？ 付き合ったりしたの？」

（付き合ったこともあんだらうなー何たって千年生きてる訳だし……）

壱は意味もなく物悲しくなった。

「いえ、十歳の子供から……結婚しよーって……もう百歳で奥さん貰ってるんですけどね」

「あれ？ 矛盾が発生してるんだけど追及しないほうがいいのか？」
もしかしてクレアは完全に行き遅れているのでは……？ と少々心配になる。

「というか、凄い鈍感なのか？ それとも本当にモテていないのか？
「違いますよ！ ほら、人間でいう青年期が天司は凄く長いってこととで……それまでは人間の五分の一の速度で成長するのが一般的なんです。ホントですよ」

「まあいいんだけどね別に」

悪魔憑きの壮大な野望

「くはははははは！！」

悪魔に魂を売った男が哄笑する。

目の前には見るも無残な男の生ける屍があつた。

女物のパンツを頭に被り、天井から吊るされた縄で縛られ『S M プレイ中です！』と大きく書かれた紙を口で挟んでいる。

そして、頬には赤い紅葉のような綺麗な手形。

「くうわああ！」

「何を言ってるかわからんなあ」

男はコレ以上ないくらいに不細工だった。

まるで岩石を適当に掘り起こしたような顔で、その頬や額には油がじわじわと浮き、身体からむわりとした湯気さえ出ている。

一生の三分の一をカップルを憎むことに使い、これまた三分の一を女を憎むことに使い、そして自分よりも容姿のいい男を憎むことに三分の一使った男の末路である。

絶賛S Mプレイ中の男は紙を落とす。

「お前、日笠のくそ不細工がふざけんなよ！」

男は一般的に『ちよつとお茶目なヤンキー君（不細工には容赦しないよ！）』な奴だった。

悪魔憑きの男——日笠千夏を苛めていた男でもある。

名前は仙道大輔だ。

「テメエがふざけんな！ 顔がいいからって調子乗ってんじゃねえぞ！ 友達も居なく、彼女も出来ずに同じ不細工な奴らからさえ敬遠された俺の気持ちがわかんのか！！ テメエの存在は正直どうでもよかったけど……」

「どうでもいいなら何でこんなことしやる！」

「いや、綺麗な彼女が居るって聞いたからさ。別れさそうと思って」「テメエふざぶらあッ！？」

千夏は容赦なく大輔を殴った。

それだけで大輔は失神する。

「ま、今までの分、つてことで」

店屋物を大量に頼み、玄関のドアに『勝手に入ってきてね』と書いて出て行く。

「ふははははははは！！」

この力さえあれば、あの忌わしいバレンタインも『せいやのクリスマス』も全て潰せる。

キツカケはネットだった。

悪魔を憑かせる方法というのが載っており、それによると、専用の機器を使い、天使を捕まえたあとに天使に対して恨み辛みをぶつければいいらしい。

それから千夏は天使を墮天させる為に尽力した。

瓶に入った天使にぶつぶつと気持ち悪さを倍増させるような独り言をぶつけ、そしてある日天使はどす黒い闇色になっていた。

蓋を空けると天使——いや、墮天した悪魔が日笠に力を分け与えてくれた。

代償は千夏の魔力。

「さて……」

海田京という奴をブチ殺しに行くか。

崩壊

千夏はまだ夕方なのに人通りの少ない道で見かけたカップルを殴って別れさそうとしたところだった。

男も女もみつともなく千夏に命乞いをしているが、そんなことは聞いていない。

「別れるか？」

男は女を横目で済まなさそうに見てから、左肩に衝撃が走った。灼熱が肩口から真下にすつと降り、腕が斬れた。

ぽとり、と血を流す千夏の腕。

勿論、肩口からも血が溢れている。

「で？ 別れんの？」

千夏は何でもないようにそう問いかけた。

そこで、男と女は同時に気絶。

泡を吹いて倒れた。

「オイオイ。まだ別れるかどうか聞いてねえんだけど」

「お前の相手はこの私よ」

千夏がゆつくりとした動作で振り向くと同時に腕が浮遊し、肩口に引っ付いた。

綺麗に神経の一本までも。

「全く、あの雑魚の悪魔憑きを探してたんだけど別の奴が当たるとはね」

千夏は女の子を見て硬直した。

女の子は可愛かったのだ。

「まあ相手はしてあげますけど。勝ったら付き合ってくださいね」

「はあ！？ 何言ってるの？」

女の子は不快そうに眉を顰める。

「名前は何て言うんですか？」

「……名前？ 海よ」

「海さんですか。ボクの名前とぴったりだ。ボクの名前は千夏ですから」

言いながら視線を廃ビルの方にやる。

「あそこで戦いましょうか？ 邪魔が入らなさそうだ」

氷氷氷氷氷

海は劣勢だった。

相手は全ての魔術を無効化して進んでくる。

「うわあああああ！！」

叫び、全ての力を振り絞り、真剣を振るう。

千夏はそれを横っ飛びで避けた。

真剣は爆炎を吹き、パイプが剥き出しの壁を破壊する。

真剣は粒子となり、一瞬で銃へと形を変化させた。

引き金を二回、三回と引く。

凄まじい爆音と同時に射出される炎弾。

「はあ！」

千夏の足元から水が噴出し、炎弾を飲み込み、更に海を飲み込むとする。

「ッ！」

銃から炎弾を飛ばし、天井に穴を開け更に津波に大きな目の炎弾を撃った。

あまりの高温に水蒸気爆発が巻き起こり、その衝撃を利用して二階まで飛ぶ。

「空中って海さんは動けるの？」

海は横腹を思い切り蹴飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「か、は……っ！？」

空中に浮いている千夏を朦朧とする意識で見る。

強い。

「だけど。これで終わりよ」

千夏の全身が炎の柱に焼かれた。

真下からの一撃。

海のケイトスを使った魔術だ。

「なあ。海。お前知ってるか？　PSってよ『自分の歪んだ考え』が語源なんだぜ？」

身体が所々防御できずに火傷を負い、皮膚が爛れているがそれを悪魔の力で治していく。

「海。お前の歪みは以外に大きいな」

「知った風な口を聞くんじゃない！」

叫び、銃を乱射するが千夏には一発たりとも入らない。

壁や天井に傷跡を残すだけに終わった。

天使を扱い、魔術を扱うにはPSと魔力が居る。

言い換えると歪んだ考えと生命力だ。

人間は誰しも歪んだ部分を持っている。

それは何かに対する差別であったり、世界の見方であったり性癖であったり、人の愛し方だったりする。

それに天使は魅了されるのだ。

人間独特のその歪んだ考えに。

そして、魔力は天使のエネルギーであり、それが少ないと魔術の発動ができない。

つまりは歪んだ天使を魅了する歪んだ考えと、魔力があって初めて魔術師は誕生するのだ。

「さて、気絶でもさせて持って帰るか」

右腕を軽く振るう。

本来なら空気を圧縮した衝撃波が出る、筈だった。

「悪魔の野郎……！？」

悪魔が恋人が出来て力を振るう機会がなくなると困ると思ったのか、右腕から多量の力が吹き出た。

どす黒い怨念のような闇が海を襲う。

千夏はどうすることも出来ない。

「……」

海は身体中の力が入らないことを感じて、力を抜く。

もう無理だ。

動けない。

悪魔を殺す尽くすという目的は果てせないままだが、辛い記憶を背負ってこんなことをしても意味もないことはわかっていた。

もう良い。

「たつく……！ 悪魔を捜してたら見つけたのは悪魔憑きかよ！」
あの悪魔憑きが立っていた。

純白のグローブを身につけて、どす黒い闇を打ち晴らした。

「助けに来たからもう泣くなよ」

「は？ 誰が、泣いてたって……」

頬を伝わる涙の存在を初めて気づいた海は恥ずかしくてすぐに拭く。

「アンタが敵う相手じゃないわ。逃げるのなら逃げ——」

「大丈夫だよ。お前も俺も生きて帰る。それにあんな叫び声を聞いたんじゃ帰るに帰れねえよ」

「な……っ！？ 何ふざけた寝言を」

海を無視して壱は千夏の方に向く。

「おい。悪魔を引き渡す気はねえか？」

「ないね。この力で世間のカッパル全てを別れさせるまでは……！」
「……あー……聞かなきゃよかった……」

「俺の目的を馬鹿にするなあああああ……！」

氷、雷、炎の槍を一瞬で生成、そのまま音速を超える速度で壱を貫こうとする。

「邪魔だ」

三つの槍は壱の拳で全て破壊される。

悪魔、天使を問わず浄化させる力を壱は持っているのだ。

「これでもまだやるか？」

壱の問いかけに千夏は笑う。

「はははははは！！……楽勝だよ teme なんだ」

悪魔を媒体に天使へ己の感情を流し込み、墮天させる負の連鎖を即興で作り返す。

それは壱のみだった場合は成功しただろう。

しかし、壱には天使を操る性格のいい天司が一階に居る。

「な……っ！？俺の悪魔どもが次々と寝返りやがる！！？」

千夏は悪魔を天使と干渉させないように己の中へと閉じ込め、焦る表情で壱を睨み付ける。

「悪魔憑きを倒す方法は何個がある。悪魔の十倍の量の天使を流し込み、悪魔の浄化を図るか、今みたいに天使に正の感情を流し込んで悪魔と対決するか、悪魔憑きを殺すか……」

とん、と音速で千夏のもとへ潜り込み、純白の光の粒子を拳ごと叩き込んだ。

壱の粒子は千夏の身体へ入り込み、悪魔を殺した。

「俺の能力の一つ魔術の構成、悪魔の構成を壊すことのできる『崩壊』を使うか、だ」

帰り

とん、荒事を終えた壱は一階へ降りてクレアと帰ろうときびすを返す。

「あー悪魔じゃなかったなあ」

「そうですね。まあ人を助くれましたから私は満足でしたけど」

「……それより今日は焼き肉にするか」

「え！？ 本当ですか！？」

「ああ、今日はお前も頑張ったし」

二人は談笑しながら扉から帰ろうとした瞬間。

「待て！ 私の話は終わってない！」

少女は二階から顔を出し呼び止めた。

あの会話の中で海と、呼ばれていたので海という名前なのだろう。

「あに？ ああ、別にアイツの負の感情を増大させた悪魔は俺の能力で崩壊させたからもうアイツに脅威はないと思うぞ」

ビビらないように優しく微笑みながら言う。

「何であの時逃げた訳！？ お前は悪魔憑きじゃないの！？」

壱の気遣い爆散。まあいいけど、と壱。

「俺は悪魔憑きじゃない」

「何でお前は私を倒さなかった訳？」

「いや、倒す意味がないし……」

「くっ……！？ やっぱりお前は訳がわからない！ 何でそんな強いのに……」

「何でお前そんなに興奮してんだよ。浮いてるぞ。ま、どうでもいいけどさ。んじゃあ行くかクレア」

「あ、はい」

クレアは海の方を見て、それから廃ビルの出口へと足を進める。早くしないと警察がきてしまう。

日本の警察官と舐めてはいけない。

「名前は？」

海がそう小声で聞いてきたので、答えてやる。

「俺の名前は倉敷壱」

「私はまだこの街に居るから！」

「んじゃあまた会えたら会おうな海」

海の頬が少し赤らんだのを壱は見逃さなかった。

まあ、意味合いはわからなかったのだけれど。

大会スタート

そんなこんなで大会スタートである。

壱達は会場へ向かって歩いていった。

因みに編成を以下の通り。

壱から見て左にフレア。右に綾瀬。

後ろで引き攣った笑みを浮かべるクレア。

そして更に後ろでぎこちない会話を続けているクリスと遊星。

「何というか両手に花って感じだよね！」

壱は堪らずに二人に笑いかけるが、二人はぶすつとしたまま、

「綾瀬のどこが花なの？　せいぜい雑草がいい所でしょ？」

「ふ……っ。私はあなたとはいい友達になれると思ってたんだけど

！」

ぐいつと綾瀬に腕を引き取られ壱はこけそうになる。

更に反対側からフレアが腕を引っ張った。

「何私に相談もなく腕を組もうとしてんのよ！！」

凄まじく痛い。

「痛い血愛知相対！！」

「中国語か何か？」

「大丈夫？　まあ止めないけど」

「最低だコイツラ！！」

「いやー三人とも仲がいいですねー」

「クレアちゃん。どこをどう見てもありえないと思うけど」

「この構図は羨ましいと可哀想が合わさって嫉妬できん」

と遊星がぼんやり呟く。

「京は私にサポート席について欲しいって言ったの！」

そして、遊星の更に後方では海田京を巡っての戦いが起こっていた。

皆の憧れ万能生徒会長——神風麗那と、金髪巨乳美少女であるテ

イナ。

更には眼鏡の雪や、王道系美少女である綾風文とキセヤに赤髪の美少女フライン・カネット。

そして、鋭い眼光を持った美少女である木村早瀬。

「私と京の会話に割り込むなああああああ！！」

「お前らなんでそんなに仲が悪いんだ……」

「鈍感な死ね！」

ギャーギャーワーワー。

ぶっちゃけうるさい。

というか、周りの男子達は煙たそうに敬遠し、海田に視線を向けて去っていく。

女子も概ねそんな感じ。あと海田に群がる女子達を恥ずかしげに見て去るのも居た。海田に羨望の眼差しを向ける奴も存在したが。

壱達は思わず自分達がしていた行為が無性に恥ずかしく思えて無言で縦に並び歩く。

周りの奴らの評価はこうだ。

「あいつ等殺していいかな？」

「遊星。落ち着いて。私が毒殺してくるから」

「お前が落ち着け」

と壱。

そして外野。

「ていうか、周りの奴らの迷惑も考えろつての」

「あーあー海田はあんなにモテていいよなちくしょう……」

「くっ。私だつてあんだだけ可愛かったら海田くんにアピールできたのに」

「私は海田だいつ嫌いだけどね。性格が無理だわ」

「ははっ。海田に惚れるとか感性が定まってないブランド好きだけでしょ。常識的に考えて」

「どこの星の常識！？」

「海田さんって悪魔を倒したり学園の平和を護ったりしてくれたの

よ！ カッコいいじゃない。それに顔もいいし……きゃー」

「ミィハーだなあ……っ！ 生徒会長最強じゃね！ 可愛くね！？」

「あーつか俺はフライング派だけどな！ 完璧過ぎるのはよくない」

「お前ら……今では倉敷ハーレムが展開してるって噂だぜ！ 俺は綾瀬ちゃん派ー」

「俺は告白間近まで迫ったフレアかなー」

「そついや、あのドレスっぽい服きた子はなんなの？ 生徒じゃないだろ？ 何か倉敷といつも一緒に居ねえ？」

「まあこの学園って頭おかしくくらいに部外者歓迎だからなあ……この前も海田の知り合いの小学生みたし」

「あー！ あったあつた。俺おにいちやんって呼ばれたぜ？」

「え？ マジで？ いいなあ」

「お前ら……揃いも揃ってロリコンかよ……まあ擦れてる女子高生とかより可愛いのは認めるが……」

「そついや男がこの学園に侵入してきたときは用務員さんに潰されてたな」

「ああ、一応セキユリティ的なものはあんのかもな」

「売ってあり得くない？ 強そうじゃないし」

「あーわかる。海田は何か雰囲気があるからいいんだけど倉敷は明らかに……あれだもんね」

「そうそう。雰囲気ないっか。可哀想なくらいに弱者の雰囲気丸出しだよな」

「俺はその会話を聞いて普通に沈む。」

「何で女子高生ってこんな人の陰口を叩けるんだ……。俺は、弱者の雰囲気丸出しだったんだ……」

「いや。私はそんな会話しないから大丈夫だよ！ それに最近男子もそれっぽくなってきてるし……嫌な時代だね」

「男女平等を間違っ使用からこんなことになるんだよ。男子は男子らしく、女は女らしいのが『良い』でいいのによー脳の構造だっって違うしさ。区別と差別の違いがわかってねえんだよ」

「何で遊星がそんな評論を……？」

「家庭的な女の子が欲しい」

そんな馬鹿な会話を続け、ようやく会場に入った。

だいつ嫌い

柔らかい土を敷き詰めて作ったその会場は今や熱気に包まれていた。

観覧席と戦いの舞台は防御ガラスで遮られ、選手達は観覧席の真下の壁（に見立てたドア）とガラスを開けて出てくる構造になっている。

そこには海田京と男子生徒が対峙していた。

「頑張れ京ー」

と、フライン。

観覧席の少し前にサポート席という特別なベンチがあった。

縦三メートルに横、三メートルある防御ガラスが目の前にあるだけの危ない観覧席だ。

五人だけ座れるというその席で文、フライン、麗那、早瀬にキセヤが居た。

雪は物凄く悔しそうにガラスに顔面をへばりつかせる様にして観ている。

そこまでしなくてもいいんじゃないか？ と海田は思う。

「初戦から海田とはついてねえぜ。だが、俺の魔術には勝てないな」
イラッ。

海田はムカついて吐き捨てる。

「はっ。ふざけてろ」

防御ガラスを持った審判（某理事長さん）が「試合、開始！」と声を張り上げた。

男子生徒はそれなりの速度でもって京に近づき、光を掌から生成し、放つが、京は難なく避けて男子生徒に掌を当てる。

「攻撃つてのはこうするんだよ」

雷を掌から発動。

相手を痺れさせる。

（今日の俺はデンジヤラスだぜ！）

そう思った瞬間、腕を力強く捕まれた。

「あん？」

「これで終わりだ！ くそつたれ！」

業炎が腕を逆巻き、海田を襲う。

（なるほど。電撃をわざと受けて、俺にこれを……。ま、それがどうしたって範囲だけだね！）

業炎が吹き散らされ、男の顔が驚愕に歪む。

業炎が吹き散らされた理由は簡単。

海田が業炎を解除魔術を使ったからだ。

解除魔術は一握りの人たちしかできないらしいが、海田は簡単にできた。

ま、どうでもいいけど。

「これでチェックメイトだ」

更に強い電撃をぶつけてやった。

※※※※※

壱は控え室に備え付けられているテレビでその戦いを見ていた。

というより、皆と一緒に教室でUNOをしていたところ、教師に

「貴方は海田と戦う気はあるんですか！」と怒られ、録画された映像を見せられることになってしまったのだ。

（「これでチェックメイトだ」ねえ……嫌味な野郎だ）

壱は海田がだいつ嫌いになった。

この戦いで凄くそれが顕著に現れる。

「イライラすんなーアイツ」

あの才能の見せ付け方をされた奴がどんな気持ちになると思っただあの野郎――。

「さて……行つて来るか」

トランプ

「さあ！ 今大会最高のカード！ 魔術を使えない異端児転校生――倉敷壱！」

その呼び名には悪意を感じるんだけど……と沙耶を横目で睨むが華麗にスルー。

「アイツ魔術使えねえのか！！？」

「そんなんで海田の相手になるのかよ！？」

様々な声が会場内の空気を揺らす。

「そして！ この学園一の天才にして天災！ 海田京！」

きゃー！！！！という黄色い声援が辺りを響かせる。

「きゃー！ 海田さんその不細工やつちゃってー！！！」

「ぶ、不細工……？」

「負けんな倉敷いいいい！！！！ 俺達のソウルを受け取ってくれええええええ！！！」

「ありがとう男諸君！！ 嬉しいよ！！」

「八つ裂きにしろ！ 寧ろ殺せ！ 自爆特攻だあああああ！！！」

「あ、あれ？ 俺の心配……」

ぐす、と涙が出そうになる。

でも！ 俺の心の友はサポート席で応援してくれている！

「がんばー」と鞍馬遊星。

「あ！ クリス！ ―〇捨てはローカルルール！」と綾瀬。

「えー？ 私達の所ではこれが普通だったけど？」とクリス。

「私のところでは……うっ……私、が皆でトランプが出来るなんて……」と感動中のフレア。

「テメエら何大富豪楽しんでんだああああああああああああ！！！！？ あとおめでとうフレアさん！！！」

今なら悲しさで死ねるレベルである。

しかしまあ、壱はわかっている。クレアなら応援してくれると……

…。

「頑張ってください壺さあ——」

ほら、精一杯応援してくれて……。

「——わあ！ 革命の時が来ました！ 十一の革命！！！」

「……な、何だって！！？」

「うん。現実って非情だよ……」

海田側、同時期。

「頑張れ！ 頑張れ！ きょーお！」と文。

「私、応援旗作って来ましたから！！」と、キセヤはキンキラ金の旗をベンチの下から抜き出し、言う。

「くっ！？ 家庭的で献身的な女の子を演出しようって言うの！？

それはお姉さんキヤラである私の分野なのに……！？」と麗那。

「演出、何て言わないで下さいませんか？ あくまで京のことを思っ

て行動しただけのこと……そんな浅ましい考えはありませんわ」

「私はお弁当を作ってきたがな」と木村。

「「言つとくけど私も作ってき（ましたわ）たからね」」とキセヤ

&麗那。

海田はコイツら演出だとか、弁当だとか何言ってるんだ？ くれるのか？ とか思いつつ、倉敷の方へ哀れみの目を向ける。

「……俺って恵まれてるのかもな……」

何はともあれ勝負である。

異端と天才

「勝負開始！」

その掛け声を発した瞬間、この学園最強の生物と転校生の勝負が始まった。

二人の少年は音と共に消える。

それと同時に土が小型の爆弾で吹き飛んだように散った。

移動速度は音速手前。

『眼』を強化する魔術を身につけていない人間は見ることさえ敵わない人間離れた勝負だ。

（さて、コイツには世界の広さを知って貰ってプライドズツタズタにしてやる）

「な……！？」

会場内の人々は一様に驚きを隠せぬ様子でうろたえ、京のハーレム要員達は魔術を使い二人の姿を眼に留める。

「まさか、ここまでやるとは思いませんでしたわ倉敷壱……」

「けどまあ、京の勝ち揺るがないでしょ」

キセヤと文がそう言うが、麗那だけは無言で二人を見ていた。

そして、壱とランプな仲間達は綾瀬の勝負で決着がついたらしく、鞍馬遊星は肉眼で悠々と見つめ、クリスは眼を強化する。

綾瀬は空間感知魔術で二人の様子を脳内でトレース。

クレアはクレア自身の能力——『世界の瞳』を発動。

クリスの視界を一定期間借りさせてもらう。

「終わりだッ……」

海田が壱の懷に潜り込み、拳を繰り出した。

わりと強かったが、これは避けれない。

これで終わりだ。沙耶先生は本気を出せとか言っていたがそうでもなかったな……とそう思い——

とん、と足の裏で拳を受け止められていた。

「ほらほら終わりなんじゃねえのかよ？ 足だけで止められてっけど？」

壱の挑発的な口調に怒りを覚えた京は左手から多大な炎を発する。マグマのようなどろっとした摂氏五千度のあり得ない炎は逆巻き、壱の顔を飲み込んだ。

「オイオイ。この程度で俺が火傷でもすると思ってるのか？」
ふっと足を軽く振るい、京の顔面スレスレで止めてやる。

「ホラ。もっと本気を出せよ。じゃないと俺はチェックメイトも終わりにもならないぜ？」

「くっ……！？」

京は壱の足を左手で払い除け、後退する。

会場内はそれだけでざわつき、沙耶が「おーっと壱の優勢だあ！」と会場内を煽る。

「それとも本気でやってこの程度だったか？ だったら謝るよ」

「ふざ、けやがって……」

「言う台詞が全部三下だぞ？ 意識してやってるんなら大したモンだ」

「テメエは俺がぶっ飛ばす！！」

京の身体が青白く光輝き、電流が迸る。

京は音を置き去りにして身体を消した。

自己魔術だ。

自分のPSを魔術に進化させたその人独自の魔術。

「ふうん……音速を超えられるのか」

特に感心した風もなく壱は呟く。

「何であんな三下主人公満載なんだろうなあ」

「テメエ言ってたよな？ 本気を出せてさ？」

「……」

「お望み通り、テメエをぶっ飛ばして俺の本気を見せてやる！」

このザコが——！ と壱の様々箇所を一瞬で攻撃していく。

左肩、腹部、背中、顔面、右肩、腰、左足、右足——！！

そう、海田京は争いごとにわりと縁があり、喧嘩や殺し合いなど日常茶飯事……というほどでもないがまあよくあった。

だからこそ、相手の急所が見える。

（魔術を使わないでも並みの魔術師なら勝てる俺が自己魔術——『紫電』を使えばどうなるか）

「これで、終わりだあー！」

「まあ、それがどうしたって話なんだけどさ」

倉敷壱はその猛攻を喰らってなお、無傷で立っていた。
しかし、京は笑う。

「はっ。テメエの身体に俺の設置術式を仕込んでおいた。それを見抜けない時点でお前の負けだよ。三下主人公が」

パチン、と指で音を鳴らすと——何も起こらなかった。
壱はくつくと笑いながら言う。

「その対策を施していたのを見抜けない時点でお前の負けだよ。三下主人公が」

あの連撃のとき、自分の身体表面に微細な粒子を敷き詰めたお陰で設置術式は粒子に刻まれた。

そして、粒子故にパズルのピースのごとく設置魔術は意味をなさなくなったのだ。

そして、粒子を自らの身体に吸収。

さっきの京を越える速さでもって京の頭を撫でた。

「ま、世界は広いってことだよ。蛙君^{かわず}」

「ふざっけんなあー！」

紫電を纏い、消えた。

円を描くように一瞬で雷の柱が設置された。

「雷柱！！」

決戦場の空気が大きく膨れ上がった。

サポート席からは球状の防御ガラスが展開される。
青白い光が会場内を満たし、そして……。

「これがお前の全力か？ だとしたらガッカリだ」

地面は焦げ、防御ガラスに罅が入り、沙耶は防御に精一杯だった様子で実況をせずにふう、と息を吐いている。

今度は京さえも認識できない速さで近づきポンポン、ともう一度京の頭を撫でた壱は会場内に響くような声で言い放った。

「ギブアップしまーす!!」

SクラスVS壱

『は!!!?』

会場全体が全てこの言葉に集約された。

え? 意味わかんない。

ギブアップ?

『どうなってんだ? 倉敷って奴……』

『あははははははは!! 俺好きだわ! 敷!』

と遊星がベンチで爆笑する。

『あーあ……壱のアホな性格が……全然変わってない』

と、綾瀬は将来の壱が凄く心配になってくる。

あんな性格で将来やっていけるのか? と。

しかし、そんな事を思いながらも綾瀬は誰が見ても笑っていた。

昔と変わらないことが無性に嬉しかったのだ。

『ふふ』

とクレアは少し笑う。

クリスは啞然として壱を見ていた。

『何、を考えてますの? あの方』

キセヤは啞然とした表情でそう言う。

『京とは違うベクトルで変人だね。私には全くわかんない』

と、文。

『倉敷壱……ッ! 相手が全力で勝負をしてきてるといふのにあし

らうだけとは許せんッ!』

と、怒り心頭な早瀬。

『まあまあ。私はああいう子、嫌いじゃないわよ?』

と、生徒会長、麗那さん。

『えー、と。倉敷さん? ギブアップ、ですか?』

なぜか敬語でマイクを壱の唇近くまで持ってきてきて沙耶が言う。

『はい。ギブアップをお願いします』

「ふざ、けんなあああああ!!」

京が凄い勢いで叫び散らすので思わずきは耳を覆ってしまう。

「何だようっせーなあ」

「テメエ、何逃げてんだよ! ふざけんな! 俺と戦え!」

「やだ」

「何だよ!」

「俺の目的ってお前のプライドズツタズタにすることだったし。もういいや」

もつと力の差を見せ付けることもできたがそれをやると流石に可哀想だ。

あの男子生徒と同じ気持ちになったろうし、きの自己満足の復讐はもう終わりだ。

「もう帰っていいっすよね?」

「ふむ。このギブアップは認められません」

「何で!!?」マイクを近づけられて声が巨大化する。

「ホラ。面白くないし」

「理由超適当じゃねえ!!?」

「まあ、過酷な条件をクリアできたらギブアップありにしてもいいわよ?」

「過酷な条件?」

「例えば……あー思いつかないからきが決めちゃって」

「俺が? んじゃあ——」

「あ、頭を撫でたら、とかなしね?」

「なぜそれを!!?」

「いや、過酷じゃないし」

「あーそれじゃあ」

「Sクラス全員相手取るとかは?」

「は?」

「SクラスVS謎の転校生」

「おおい!!? ふざけんじゃねえぞクソババア!!」

「へっへーんだ。もう宣言しちゃったもんねー」

沙耶は壱からマイクを奪い返すと、

「壱はSクラスなんてクソクラス指先一つで十分だ！ これも条件に入れると申しているのだからこれも条件入りしました！」

「言ってねえよ！！！！！！！！！！」

「ギブアップ条件は指先一つで押し倒す奇跡のレイプ方ほ……」

「黙れ！ 痴女！」

ぱん！ と思いつき頭を叩く。

「いった！？」

壱。

過酷過ぎる条件でSクラス全員とバトル決定。

衝突前

てな訳で。

総勢二十名ものSクラスの人間が集まってきた。

海田は人望があるのだろうか？　どこが魅力なのか本気でわからない、と舌は頭を掻く。

この人数相手は正直面倒くさい。

指先一本で（押し）倒す……ってどこの世紀末だよ、って感じだし。

「お兄様！　ミユが助けに来ましたからもう心配はいりません！」

あー妹キャラねいいね。

「ご主人様、僭越ながら私めが助力致します」

メイド……ね。

「仕方ないから私も助けに来てやったぞ」

と、眼鏡っ子の雪さん。

「べ、別にあなたを助けに来た訳じゃないんだからね！　コイツがムカついただけなんだから！」

「あー俺嫌われてんだ……つか、嘘の出汁に使うなよ」と舌は呟く。

ツンデレで確定ヤッホー！

「貴様に死なれては困るからな（生物実験的に）」

「あれ？　今不穏な言葉が聞こえたような？」

と京。

あ、あと女の子は何かマッドサイエンティストだと思う。

「私はコイツと戦いたいから先やらせてね」

と歌うような調子で言う女の子。

戦闘狂だろうな、台詞的に。

あとコイツ嫌いだ。この台詞に自己中及び、戦闘狂な性格が現れている。

そして歌うような感じが更に嫌い。

あれだ。コイツ絶対に海田と同じく知らずに人を傷つけているタイプの人間だ。

間違いない。

「ま、私は京君の味方だからね」

と京の腕に寄りかかり甘い声で言う麗那。生徒会長を不純異性交遊でしょっぴいて下さい。

「ちょ……麗那さん!!?」

「何？ 私は先輩だけどSクラスに所属してるしいいでしょ？」

『全然OKだよ。先輩であろうが後輩であろうがSクラスのメンバーならば誰でも』

「そういうことを言ってるんじゃない！ 京が嫌がってるんだから止めなさいよ！」

「そうよそうよ」

「……」

一人目がフライン。二人目が海田のファン。三人目が長瀬である。

壱はもう海田を直視できない。

これ以上見ると精神が崩壊してしまう。

「コイツらマジヤベえよ。何がヤバイってまず周りに居る女の子が携帯小説のキャラを酷くしたような連中だし。海田のハーレム度合いが底抜けてるしそもそもアイツのどこに魅力があるのかサッパリだしあーやっぱり顔か顔がよければいいのかチクショー駄目だ俺には天使と幼馴染とほぼルート確定状態のハーフさんしか居ない現実って厳しい」

と、壱はハーレム（可愛い子以外は入る権利すらないよ？）の集団の中で一際目立つ胸をした女性を見つけた。

「あー外国人だ……しかも純正だ」

ぼんやりと呟く。

だって海田の回りも壱の周りもハーフで肌が綺麗で骨格が日本人の子が多かったのだ。

「肌が荒れてて骨格太くてニキビ出来てて……スゲエな」

本当に、本当に何の気なしに言ったのだが、その外国人さんは怒ったようだった。

「ああ？ 殺すぞ」

ビクツと壱は眼力にびびってから、

「す、すみません。でも悪口じゃなくて、髪も何かくすんだ金髪だし巨乳だし。なんつーかアメリカ人だなあと」

「……っう……私だって髪の毛サラサラで綺麗な金髪で肌も綺麗で身体は華奢で……いや、六歳くらいの可愛い頃に戻りたいって……そうすれば海田だって振り向いてくれるのに……」

「……あの……頑張つて！ ホラ美人に慣れると性格で決める可能性もあるし全然狙えるよ！」

「でもさ。こんな可愛い子たちに囲まれてたら平均基準が激上がりすることも考えられるんじゃないやあ……」

「……」

これ以上フォローできないと悟った壱は目線を逸らした。

そして、ドアから男子生徒が出てきた。

海田京のメインヒロイン達と親友、あと脇役たちが揃い踏みする。最強の存在を揺るがした者を倒す為に――。

そして、壱は。

「あーあ。世の中って不公平だねえ」

世を嘆いていた。

「あー！！ テメエ！ あの時のクソ野郎じゃねえか！」

遊星がいきなり声を張り上げた。

視線の先には京の仲間で唯一の男子が居た。

もしかして、海田って男子の友達居ないのだろうか。

壱はホロリ、と同情してしまう。

「あー可哀想に……女の子だけが友達なんて……もしかして男子は海田のことが嫌いなのもしねえな」

無双

「あーあの誰だっけ？」

京の仲間の男子生徒が言った。

「テメエ……ッ！ あの入学式の時に教室が分からないからって馬鹿にしたろうが！ あのときからテメエのことが嫌いで嫌いで……」
遊星がマシンガンの如く言った。

「テメエの事なんて忘れたけど……戦うんなら受けてたってやる」
「やってやるぜこの野郎！」

遊星はベンチから闘技場へと入ってきた。

「じゃあ私もやろうかな」

クリスも立ち上がりそう言った。

「一応ね私もハーフじゃないんだよね」

「ぶっ殺してやる！ 羨ましすぎるんだよチクショー！」

と、名もなき外国人さん。

「あーもうお前ら馬鹿二人は……」

壱は頭が痛くなってくる。

「私も壱の力になるわ！」

と、フレアも立ち上がる。

「いや、別に俺一人で十分なんです……」

「あれ？ 私達も戦ったほうがいいの？」

とか何とか言いながら綾瀬が闘技場に入ってきた。

「いやだからお前らはベンチで見とけて……」

もう過酷な条件を増やすのは止めてくれ、と思う。

コイツら無傷で全員押し倒すって結構難しい。

「壱さん、Sクラスの皆さんを押し倒すのって出来ないんですか？」

「いや、海田レベルなら楽勝だけど……仲間が来るならちよい難しいかな？」

「じゃあ私は応援してますね」

「おう」

壱は片手を上げてそう答えた。

『じゃあ試合を開始するわよ？』

沙耶は隅の方で片手を上げた。

『試合開始！』

京＋ハーレム要員＋親友キャラ的な男子VS壱＋バラバラな仲間達＋小ハーレム要員の戦いの幕開けである。

「んじゃあ、仲間敵ともに無傷でちゃっかりギブアップしますか」
フツと、壱が音速の三倍の速さで消えた。

「は、や……ッ!？」

反応できたのは敵味方合わせて六人だけ。

一人は海田。一人は麗那。一人はキセヤ。一人は遊星。一人は海田の視界を間借りしたクレア。一人は沙耶。

そして、ギリギリ綾瀬も空間感知で視えた――が、反応は出来なかった。

そして、次の瞬間。

戦闘狂の女子と海田の妹が押し倒された。

頭を掌でしっかり支え、そして光の粒子で身体を抱きとめてやるオマケ付き。

「はいおしまい。大丈夫か？」

にっとう安心させるようにして言うてやる。

「な……え？ ど、どうなったの？」

「……まさか。今の一瞬で押し倒され……」

二人は呆然とした表情で言う。

（なんつーか、自分が負けたことが信じられねえみてえな顔だな。ま、無理もねえか）

「んじゃあ次行くぜ」

「皆!! 眼と身体強化を……!!」

海田の指示が届く前に更に五人倒れ伏す。
誰一人として声を発しない。

会場内は遊星と海田の友達、そしてクリスと外国人が戦う音しかない。

そして、遊星が空気を固めて放つ空気砲を男に当てようとした瞬間、空気砲は掻き消された。

「わりいな」

声を残し、消えた。

『倉敷壱を誰も止められないのか!!?』

沙耶が言う。

『倉敷は指先一つで本当に敵を倒していくう!』

外国人女性とクリスの戦いでクリスが水の塊に襲われそうになった瞬間、やはり壱が一瞬で掻き消した。

誰にも止められない。

「ちつくしょう! 能力さえわかれば対策だって……!!」

そう言いながら悔しがる京の目の前で壱は止まる。

「俺の能力教えてやろうか?」

「は?」

「だからさ俺の能力を教えてやるよ。だからあの二人下げてくんない?」

くいつと、親指でクリスと遊星と戦っている二人を指す。

「……それだけでいいんだな?」

「ああ……そろそろ鬱陶しいんだよ」

「顯示! ティナ! その二人はいいから応援席に戻ってくれ」

説明

「ちえ……」

「しょうがないわね」

とか何とか言いながらも二人は下がってくれた。

しかし、壱の仲間達は二人とも不満だったらしく壱の背中を軽く殴ったり、蹴ったりしてくる。

「んじゃあ俺の能力の説明をしようかな」

壱は宙にある粒子をくつつけて皆に見えるサイズにする。

「まずはこの粒子の説明です」

そして歩いていき、沙耶のマイクを取り、更に粒子を長方形にする。大きさは黒板くらい。

『えーまず俺の力が大きく区分して『防御』『操作』『治癒』『強化』『崩壊』この五つがあります』

「……」

『防御はその名の通り、俺の危機レベルに比例して粒子が護ってくれる便利能力です。とはいえ、俺が「この程度なら害はない」と思う攻撃などは防御されません』

綾瀬に気絶させられたのは気を許している相手だから攻撃として感知されなかったのだろう。

『そして操作はやっぱりその名の通り俺が粒子を操作できることにあります。基本は俺の半径一メートルの間に粒子がふわふわ浮いてます』

指揮棒みたいなのを作り、手に持ち、黒板をぼんと叩く。

次の瞬間、棒人間が粒を操っているシーンが映し出された。

『治癒は怪我を治すってことだな。弱点みたいなのは……治癒させる部分に比較的多量の粒子を入れないと速く治らないこと……かな』
「……なるほどねえ」

そう言って沙耶はケータイを弄っている。何をやっているのだから

う。

『強化はやっぱり文字通りだな。今さっきのように炎を喰らおうが火傷一つ負わないし、音速を遥かに超えるスピードで動ける』

「はー凄いですねー」

とのん気そうにクレアが言う。

『んで、崩壊は魔術の構成を粒子で壊せる能力のことだな。粒子っていうのは天使より遥かに小さいんだ。そして、悪魔の構成を壊してバラバラにし、天使に浄化させてもらう事も出来る……天使を俺は操れないけど』

「天使のネットワークの間から粒子を入れ込んで壊すってことね？」
『正解です生徒会長。まあ俺は直感でやってたからここに来て初めて持った仮説だけだな。多分、合ってる』

「仮説かよ！」

そうツツコミ、頭をスパン！と叩く遊星。

『ま、これが俺の力だな』

そして、最後まで壱が言わなかったことがあった。

壱の能力が魔術ではないということだ。

終わり

「天使と悪魔に避けられているのに、き自身は気づいていないの？」
と、海が闘技場を覗いて言う。

なぜ闘技場に居るかというとまあ、きを尾行してきたのだ。

いや！ 礼を言う為に声をかけようとしたのだ。

いや、声をかけられずここまで来てしまったのだが……。

「あれ？ これはストーカー行為というモノなのでは？」

いやいやいやいや！ コレは違う！ ……と、思う。

「……うつわああああああっ！！？」

何か自分がとんでもない間違いをしたのではないかと思い、恥ずかしさで爆発しそうになる。

グネグネと身悶えし、周りの人がじろじろと見ているのにも気づかない。

※※※※※※※※

「わッ！？ わわわわわッ！？」

説明途中にいきなり早瀬が殴りかかってきたので横に身を捻って避ける。

「危ないだろ馬鹿！」

「戦闘中に説明し始めるから悪いっえ！？」

早瀬は音速で地面に伏せられた。

「大丈夫か？」

「……」

顔をぷいっと横に向けた。

大丈夫みたいだな、ときは安心する。

脳震盪とか起こされたら洒落にならない（罪悪感的な意味などで）。

「あーもう！ 止めようぜ！ もうこんな意味ねえじゃん」

「……意味がない、だあ？」

「そつだよ。海田、アレが全力だったんだろ？ それで俺に負けた。もうお前らが勝てる要素なんてねえよ……わりいけど」

「テ、メエ……！！ ふざけんなよおおおお！！！」

ドウン！ と土が爆発するように散った。

Sクラスの仲間が土を被って倒れる。

ああ、可哀想に。

「あー」

ボリボリと頭を搔く。

負けてやろうかなあと思うが、それはそれで頭にくるかもしれない。

だからと言って一瞬で勝つのも可哀想だ。

だってナンバーワンだった訳だし。

あーいやーでもなーと優柔不断に悩みまくる。

思いつきり頬を殴られるその前に光の粒子が拳を止めた。

「……つくそ……自動防御がやかいだな」

「まあ、な。自動防御って割といい性能だよな」

海田の右掌に闇が生成される。

「闇？」

そつ呟いた瞬間に闇が腹に放たれた。

「防御以上の攻撃すればいいんだろが……！」

更に腹を目掛けて何度も殴る。連発。

壱は気まずそうに攻撃から眼を背ける。

（ヤバイ……学園最強の人間がこんなのって凄く可哀想だなあ……）

「あー、ん……少し、痛い？ かも？」

気まずい。ヤバイ。

「……テメエ！ マジで舐めてるだろ！」

「そんなにお兄様を馬鹿にしたいの！？」

「いや……もうそついうんじゃないんだけど……つか、ギブアップ

をしたいです……」

ああ！ 偉大なる神様よ！ なぜ勝ち負けを決めたりする人間を増やしたのでしょうか！

マジでしんどいです。

いや、悪いのは僕ですけどね！

「真面目にやりやがれ！ ぶっ飛ばす！」

「わーっ たよ」

本人の希望通りにしてやろうと、思う。

海田以外は地面に柔らかく置いてやった。

海田はギリギリの所で避けたのだ。

「お前ら大丈夫か？」

「…… まあ大丈夫よ」

「ふふっ。大丈夫よ」

疎らな返事が聞こえる。

周りを見る限り、大丈夫そうだった。

『い、今の一瞬で壱は十名ほどの選手を一気に押し倒しました！！』

「す、すげえ……」

と。

会場内が歓声で揺らいだ。

壱は少し笑んだ。

まあ、勝ち負け何てだいっ嫌いだが声援自体は嬉しいものだ。

「ッ！！」

闇の攻撃で壱が包まれる。

「……」

「侵食される！」

グッと、拳を握り締める。

それと連動したかのように闇が壱の粒子を締め付ける。

まあ、締め付けただけで何ともない。

「よっ」

音速の三倍の速度で海田の元へ向かう。

粒子を使い地面も空気にも影響を極力与えないようにする。
周りには人が沢山居るのだ。

「もつと力を……ッ!!」

更に闇を海田の周りの空間に一瞬で生成。
六十個ほど飛んできた。

「あ……ッ!!?」

海田が何か失敗したのかそう言った。

壱は妹さんと生徒会長に流れ弾として誤爆しかけた闇を綺麗に打ち落とす。

それ以外は無視して壱は海田の膝の裏に人差し指をつける。

女の子達にやったように膝を落とさせ、粒子を相手の周りに展開。
身体を護るようになる為の策だ。

瞬時に額に指を移動させる。

しかし、流石は学園最強。

反応して指を払おうとして腕を振るう。

壱はそれを見てから指の速度を更に五倍ほど引き上げる。

とん、と額に指を立て、押し倒した。

「……ん。大丈夫か？」

「くっそがあッ!!」

そう言って地面を叩いた。

(めんどくせー性格してんなあ……)

「あー。ま、俺の負けてことで」

そう言って、壊滅したSクラスを汗一つ流さずに背を向ける。

「UNOの続きしようぜー」

遊星が壱に言う。

「……まあ、いいけどよ。俺が勝つぜ？」

連敗続きの壱が扉を開く。

「えーランプがいいです!」

と、クレア。

「大富豪! 大富豪!」

クリスが大声で喚く。

フレアが更に言った。

「神経衰弱が……私、いつも一人でやってたんだ……」

「さあ！　神経衰弱しようか！」

そう言つて会場内を後にする。

「……あー何？　アイツら……」

会場内が何か微妙な空気になった。

「あーねみい……」

壱は指の腹で目尻を拭く。

「壱さん？」

「うん。何か眠くってさ」

「うん眠い」

「うん私も」

「くっただらねえ試合を見てたからなあ……」

そう遊星は言って欠伸をする。

海田は次の試合を放棄し、Sクラスの試合に出れる人数は決まっているらしく文と接戦したくらいだ。

教室で真剣衰弱をしていたのだが、もう試合が面白くないと思っ
たのか、女子が入ってきて面倒くさいことにクレアや壱に質問をぶ
つけてきたので、会場に逃げてきたのだ（表彰式は見に来ないとい
けないし）。

「んで、もう帰っていい訳？」

と、壱が言う。

遊星が首を捻る。

「さあ？ いいんじゃない？」

「その言葉は信じらんねえな」

「だよなあ……ははははは！」

「別にいいよ」

「あん？ 何でクリスが知ってんの？」

「二人は殴り合ってたから知らないだろうけど」

「ああーでもアレは……コイツが俺をチキン呼ばわりしやがったか
ら……まあ本気じゃねえけど」

「当たったり前だろうが！ 本気だしてたらお前は塵になってるから
な」

「ほう？ 学園最強の存在に楯突くとはな！」

「お前そういうのは嫌いなんじゃないのかよ！」

「こっというのは別だっつーの」

二人して拳をぶついたり、身体を軽く殴ったりする遊びを開始する。

そんな感じで表彰式は過ぎ去った。

作者&主人公の対談（前書き）

まず初めに色々和非礼を侘びておきます。

作者と壺の話なんて興味ねえよ！　な人は次話にいつてください。
カオスが好きな人はどうぞ読んで俺と一緒に後悔してください。

作者&主人公の対談

「コメディとシリアスの中間地点での対談！」

「作者——青空白雲と主人公——倉敷壱のおー」

『雑談タイム！』

「はい。ということですね。始めました！」

「つかさ、何でヒロインがいねえの？ 萌え要素とかいらねえの？」

「三人だとテンポ悪いから。それに三人だと誰が喋ってつかわかんねーだろ」

「いや壱「〜〜」作「〜〜」ヒ「〜〜」にすりゃいいじゃん」

「何で俺が作なんだよ青だとか空だとかあるだろ」

「すみませんでしたあ！ …… って何で俺が謝ってんだ！？」

「俺は作者だからな。全てを動かすことが出来るのさ…… た例えば今から交通事故にでもあつて神様に会い、そして転生の物語でも書けるんだぜ？ 一瞬でこの世界を消すことだってできんだからな」

「…… あ。マジですみませんでした」

「さて。ここでは、エンジェルクロイツについて赤裸々に語っていききたいと思います」

「あのさ、作者が出てくる必要あんの？」

「んーあのな…… 俺はこの作品では遊び倒す！ というか、色々やっていくって（主に『なるう』でやってるようなこと）決めてんだよ…… それが例え、黒歴史の道を歩もうともな……」

「カッコいい風に言ってるじゃねえよ！ つか、遊び倒す？」

「あれ？ 言ってるなかったっけ？ この作品は基本的に習作っていうか、実験というか…… あとはホラ。読者をシリアスに入った瞬間何か反応が爆発的に増えるような…… そんな物語にしたいと。あと読者のお便りが来て、よーしコレやるかあ！ 的な…… 質問コーナーとか」

「ちよつと。待て。前半のこの物語は実験だったっていうのか？」

「まあな。結構わかったことがあったぞ。まず第一に戦いを入れると割とお気に入りが増える。逆にダラダラすると減る！ あとは、文の汚さはあんまり影響なさそうだな……あまりに汚かったらやバイけど……あー！ 前半だけでも一人称で書いてきゃよかったああ！」

「悪びれねえな……でもこの作品青空が作った作品ではナンバー1だろ？」

「そりゃあ、『チート』で『ハーレム』入れればこうなるさ。寧ろこれでお気に入りが五件とかだったら俺は鬱になるぞ」

「……『世界を廻すモノ』は五件だしな」

「そうなんだよ壱！ 俺は結構真剣に悩んだのにだぞ？ この作品の世界観なんか、『煌夜のキセキ』と『世界を廻すモノ』を無様に取って適当に貼り付けたような作品なんだよ？」

「……ぐすつ。そんな作品の主人公をして俺って……」

「あー悪い悪い」

「軽いわあ！ ……でもアレだよな？ この作品が今一番力を注いでるんだろ？ 煌夜も世界も更新停滞中だし」

「いや、今は新作の方に手をかけてるな。つか、その二作は力をつけてから取り組もうと思ってるもんだから」

「……」

「エンジェルクロイツは適当に文かいて適当に頭の中で話作ってやってるからなあ……」

「だ、だから、一日一話とかいうふざけた速度でかけてんのか！？」

「……」

「黙るなよ！ 俺達のことは遊びだったって言うのか！？」

「人が勘違いするだろ……つかごめんなさい！ 正直てつきとうに書いてます！ あ、でも一応文法とかは護ろうと……まあ無理だったりするんだけど」

「謝るなああああああああ……！！」

「いや、壱に朗報だぞ。俺は次、シリ阿斯書くし。それにお前の能

力の秘密が解明されてないだろ？」

「え？　ちよっ……俺の能力の詳細、ちゃんと考えてんのか？」

「ああ」

「うっ……嬉しすぎるんだが……何？　この落としてから上げ……ふわっと物語を書いたわけじゃなかったんだな？」

「そら、俺だってテーマやお前の謎くらい書くさ。伏線だって張ってあるし……まあ、序盤は俺の実験の為に色々酷いこともしたが次はシリアスだからさ……文は少し直すよ……このままだと、感動する場面ですら『ふーん。……で？』で終わっちゃうから」

「感動すんの？」

「個人差があります」

「絶対しないパターンじゃねえかよ！」

「自信がなくて悪いか！」

「まあ、何だ……この小説って大事にされてないんだな……」

「うん……正直な話、短編小説で書いた『ギルド』を連載しようかと思っただくらいだ。大事で言えば『最後の晚餐』<『エンジェルクロイツ』<『ギルド』って感じだな……連載しようかなあ……アレはアレで書いて面白んだよな」

「短編に負ける連載って何だよ……」

「でもな……クロイツには俺の出したかったのが出てんだぞ？」

「あん？　何だよ」

「天司とか、大天使とか。あとは転生モノとか考えたんだけど……」
「……だけど？」

「お前が神様が剣と魔法の世界にチート能力を与えてくれた挙句、美少女に好かれるというそういう展開にさせてくれなかった……まあ、ぶっちゃけ書く気がなかったんだけどね！」

「……で？」

「……で？　って……まあこんな感じだ……」「ごめんねー間違えて殺しちゃった。てへっ」「凄い美少女だな……そして何か白い空間だな。ま、どうでもいいけど」「で、間違っちゃったし異世界へ飛

ばしてあげ——」「——あ、いやいいです。貴方と一緒に暮らさせて下さい」「……………ぶふう！！？ 何で？ 五個までなら願い事だつて聞いちゃうよ！？」「神様並みの力と神様並みの寿命と神様並みの知恵と神様を使役できる権限と神様と一緒に暮らせるようにして下さい」「何でそうなるの！？」「異世界だとか言っても剣に魔法でしょ？ 美少女とか言ってもさ……………俺とは相容れない連中ばつですよ。笑顔でモンスターを虐殺する奴らですよ。そして、どこの世界にも競争ってあるし……………もう面倒くさいんで。それに」「それに？」「間違つて人殺ししちゃう神様のお守りが必要でしょ？」「……………何言ってる訳、もう／＼／＼」

「俺神様落しちやったよ！？」

「あれ？ カッコよくね？ 小説のタイトルは『神様のお守り！？』」

……………で、少年の二つ名が『神落し』コレラノベっぽくね？」

「っーか、お前が書いてるのはいつだってラノベもどきだろうが……………」

「まあね。でもコレはラノベっぽいだろ？ 何か埃被ってそうな……………」

……………」

「自分で言つてって落ち込むなよ！」

「それにエンジェルクロイツはラノベもどきじゃなくてケータイ小説だな……………それを意識して書いてるし」

「そついや、俺に携帯小説を酷くしたようなキャラとか言わせてるしな。海田の存在もそうか……………」

「ま、しゅゆこと」

「つまんねー」

「ゴホン！ つまりはこの小説のテーマはズバリ！ 『強さ』『愛』『異種族』です！」

「恋をしたことないお前に書けんのかそんな重厚なテーマ……………」

「ま、まあアメリカ映画並みにはな！」

「全然ダメじゃねえか！」

「裏テーマは様々です……………っーかテーマよりも意識してたり……………携

帯小説とかモロだし……」

「……この小説、どこ目指してんの？ 適当に書いてるかと思えば、しっかり考えてたり、裏テーマはふざけてたり……こんなことしてみたり……」

「……わからん。トモアレ、この小説のメインヒロインはクレアです！ 間違っても海田ではないのでよろしく！」

「そして、主人公はこの俺！ 倉敷壱です！ 間違っても鞍馬や海田ではないのでよろしく！」

倉敷壱の華麗なる一日 朝の部

倉敷壱の朝はクレアを起こすところから始まる。

夜は流石にあのドレス姿では居られないのか、Ｔシャツとハーフパンツだ。

「おい。起きろ。今日は納豆ご飯だ」

「ふあい？」

そう言っただけで寝ぼけ眼をこしこしと腕で拭いて布団から起き上がる。起きたクレアと共に納豆がけご飯を食す。

「わーいやったー！ 納豆ご飯！！ いただきますっ！」

「そりゃよかった。いただきます」

クレアはとても無邪気な――穢れを知らない子供のように笑って納豆ご飯を猛烈な勢いでかきこみ始めた。

テレビを点けて朝のニュースを聞き流す。

芸能情報とかどうでもいい。

アイドルや俳優が凄まじい速度で生まれ、淘汰されていくこの「時世」に一々名前や顔を覚えてられない。

「何で、芸能人の恋愛事情とかってニュースになるんですか？」

「さあ？ 有名だしそういうのに興味のある人も居るしな。視聴率が取れるんじゃないか？ いや、わかんねえけど」

「へーそうなんですか。あ！ 今日の子犬ですよ！」

「……あー……もう学校に行かなくちゃなんねえのかあー」

「今日も行っただけですか？ 学校」

「えー？ つか、何でいつも学校にくるんだよ……」

「暇なんだもん」

むっとしたようにクレアが言う。

敬語で言うのを忘れている。

「暇で学校にくんなよなー」

「……むー」

壱はむー？ と聞き返し、『今日の子犬』を見る。

どうやら今日の子犬は極度の寂しがりやでどこに居ても着いてくるらしい。

その子犬とクレアが合致して、ストンと腑に落ちた。

「あ、寂しいのか」

「……」

「図星？」

「ち、違います！ 私はあの、暇ですから」

「へいへい。んなら昼休みに来いよ」

「違うんですからねー！」

クレアが両手を上げて言うが壱は無視する。

そろそろ行かなくては挨拶係りに間に合わない。

挨拶係りとは、期間限定の先生役で、校門の前に立って生徒に挨拶する係りの事だ。

で、壱は転校生だから、とか言う意味不明な論理によってこの係りに抜擢された。

迷惑この上ない。

しかも昨日、Sクラスを圧倒していたので認知度は明らかにうなぎ登りだ。

「あ、お弁当は学校に持って行きますから」

そうクレアは笑顔で言った。

※※※※※

倉敷壱は溜息を吐いた。

昼飯代として持って来た六百円をカツアゲされたのだ。

「まあ、六百円だし……クレアと俺の飲み物代だし昼飯はクレアが作ってくれてるし……」

いいんだけど！ と壱は心の中で叫ぶ。

この学校の高校生達に「ねえ？ ちょっと金貸してくんない？」

ああ、コレは金貸してもらってるだけだから」とか何とか林道で言われて金を払ってしまった。

はあ、とトボトボ情けなく歩く。

「まあ、ウォータークーラーがあるし」

最近ついてねえーなー、と忤は思っただった。

※※※※※

挨拶中にされたこと一覽。したこと一覽。

綾瀬に投げキッス（しっかり掴んで投げ返した）。

クリスからの応援（「ならお前も一緒にしてくれよ」と言ったら笑顔でかわされた）。

鞍馬から「おはようございます倉敷さん。あとでボロ雑巾が来るから」という丁寧な挨拶（「おはようございます。ボロ雑巾？」）。

海田から「テメエは俺がぶっ飛ばす」という宣戦布告（「それはヤダ」と言った）。

海田ハーレムの一員——キセヤから「おはようございますその……忤、と呼ばせてもらってもいいでしょうか？ 緊張しますわ……」と顔を赤らめて言われた（「倉敷って呼んで欲しいんだけど」と笑顔で拒否）。

「なら私のことはキセヤと呼んでください」とキセヤはガツカリした様子で言った（ああ、呼ばせてあげればよかったかな、と思う）。

同じく、海田ハーレムの一員で挨拶を共にしていた生徒会長から

「今日から唄って呼ばせてもらうわ。いいでしょう？ 私のことは麗那でいいからね」と言われる（「はい神風さん。倉敷って呼んでくれたら嬉しいです」と言った）

同上。木村早瀬から「貴様は私と京で倒す！ それと麗那、お前も私は許さん。勝手にこんな奴に……」（「こんな奴って……あと喧嘩はする気ねえから」と唄。「あら？ あなたにとっては私達が居なくなったのってラッキーなんじゃない？ それに唄のことを悪く言ったらいくらあなたでも許すわけにはいかないわね」と凄まじく怒っている感じで麗那。意味が分からず首を傾げる唄）

同上から妹キャラ。「私、あの……お、お兄様以外でこんなにドキドキするのは初めてで……うう……おはようございます……唄さん……あ、私の名前は智雪です」と茹で上がったタコみたいに言った（「はいおはようございまーす」）。

同上から戦闘狂。「私をあんなに速く押し倒しちゃうなんて！。このエッチ」とツンツン突っついてきた（「おはようございます……あとエッチじゃないんで……」）。

同上からフライン「カネット。「私と友達から始めなさい！」と顔を真っ赤にしながら（「あん？ 友達？ まあいいけど……ああ、おはようございます」）

更に女子軍団。「キヤーこの子が海田君を倒したんだって！」（「いや、負けたんですけど」）「あーあ。こんな不細工で強そうでもない奴に負けるなんてちょっとガッカリよねー。アンタもそう思うよね？」（「ええ……まあ……そつすね……」）「唄は不細工じゃなくて標準よ！ 京と比べるのは可哀想だわ」と麗那「そういうフオローは止めて下さい」）

更には男子軍団。「壱さんマジパネエッス」(「え? ああ、ありかと」)

「海田マジムカついてたんだよ。カッコよかったぜ!」(「よかったな……色々」)

「俺の彼女がさあ……海田の話をピタリと止めてくれてさあ! お前おかげだよ!」(「う」とA「ら」とB「や」とC「ま」とD「……し?」と半歩遅れて壱)

「じゃあーな!」(「おう! またな!」)

そしてミーハー軍団。「倉敷さん! サイン書いてください! ファンになりました!」(「さ、サイン? 倉敷って楷書で書けばいいの? 筆記体? 無理です」)

「倉敷私と付き合つてよ!」(「あ、はは……神風さん何か顔が怖いっすよ?」)

「友達になってください!」(「まあいいけどって、もしかして神風さんは何がご不満なんですか!」「私は壱に惚れてるの!」「さようですか」)

「壱! 抱いて!」(「おはーようございます!」)

そしてホモ軍団。「壱! 抱いて!」「真剣に俺と付き合ってくれないか?」(「おはようございまーす!……!」)

そして憧れ体質の皆さん。「俺を弟子にしてください!」「舎弟にして下さい!」「皆! 壱さんが挨拶し終えるまで待つて、それから皆で担いでクラスまで運ぶんだ!」(「気持ちは嬉しいけど……止めてくれないかな?」)(「ういっす」「はい」「わかりました」「くうー! 壱さんのそういう謙虚なところにまた惚れた!」「ボクは壱さんにみたいになりたいんです!」)(「あ、うん……頑張つて」)

そしてボロボロになった不良軍団。「悪かったな……アンタが海田より強いって噂になってた人だとは知らず……」「今度から俺以外にもすんなよ。ぶっ飛ばすからな」「は、ハイ!」「……鞍馬が倒したのか?」

「はあ……ようやく終わった……」

無駄に疲れた挨拶運動だった。

「朝から疲れる……コレが海田効果か……」

中古ハーレムと昼と愛

挨拶運動も終わり、授業を昼休みまで四時間するのだが当然着いて行けない。

「何言ってるかわかんねー」

数学が英語っぽいのはデフォルトなのか。

先生の言葉はまるで呪詛だ。

「わっかんねーな……」

壱と遊星は乾いた笑みを浮かべあう。

しかし、壱と遊星の学力は天と地の差がある。

無論、壱が下だ。

「そっぴや鞍馬って不良ボッコボコにしたのか？」

「ああ、したした」

「軽いなお前」

「でも事実だし……っつかお前あの程度の奴らに金渡す事ねえのによ」

「いや六百円しかなかったし。ボッコボコにするのは……。そっぴやお前は寮に住んでたんだっけ？」

「ああ。寮だけど？」

「お前部活してたよな？」

「ふっ……文芸部……別名自堕落部だ」

「何だそりゃ？」

「てつきとうにダラダラする部活だな」

「くそみたいな活動内容だなオイ」

パン！　といい音がほぼ二つ同時に響いた。

「いってええええ！！？」

「あ、先生」

壱と遊星の反応はあからさまに違う。

教科書の角で殴られた遊星は痛がり、壱は粒子のお陰でケロッと

している。

「っ！ 倉敷！ 粒子で防御は止めなさい！」

「え？ あ、はい……」

唇を噛み締め、身体中の力を入れる。

ゴガン！ と鈍い音が炸裂した。

「うごっ！！？ 痛いっすよ先生！？ 明らかに音も重厚だったし！」

「うるせえ！ ム力つくんだよ！ その力！」

「よかった……一発目喰らってホントよかった……」

※※※※※

基本的に昼休みはクレアを待ちつつ綾瀬達と喋っている。

今日は村井くんも一緒である。

とはいえ、特別意味のあることは喋っていない。

そんな平和で無意味な時間を過ごしていた壺に平和な時間を潰す刺客がやってくる。

その名は海田軍団である。

「おにいちゃん！ 京おにいちゃんに勝ったからって調子に乗るなよゴラア！」

何か幼女が居た。

年齢にして十歳くらい。

「え、と……貴方は誰？」

と、綾瀬が問う。

「私を知らないとは無知なババアだ」

「……あつはつは……ババアだってきいい……私はまだピチピチだよな？ 最近はお肌を気にして早めに寝る事にしてるし！」

「そんなの知るかよ」

「まあいい。おにいちゃん達！ そしてババア達！ よく聞くがい！ 私の名前は七草弥生だ！」

⌋
⋮
⌋

「……ゴホン！ 京おにちゃんはホントに強いんだからな！ 壱
おにちゃんなど一瞬で塵と化すだろう！」

「予言風喧嘩の売り方パート1、戦いの果てに」
と小さく呟いて去る。

「踊るおにちゃん大作戦」

と遊星が言い、そしてフレアに目をやる。

「……え？ ああ……え、と……意味は盲目の信賴」

「タロットか！」

と、遊星。

「……ふん、」

そうフレアが自分の何かに絶望したような声を出した瞬間、プルと肩を震わしていた少女改め弥生が切れた。

「無視すんじゃないねえーゴラアアアア！」

「ああ悪い……で？ 何のようだったっけ？」

悪気なく壱は問い直す。

面倒くさげに空を見上げ、海田を恨む。

何だこの刺客は。

「京おにいちちゃんと再戦しろお！ ふざけた勝ち方しやがってええ
えええええ！！」

「ヤダ」

「何で！」

ドンドンと地^{ツチ}駄^ダを踏む弥生。

海田って幼女にまでフラグ建ててんのかーと半分感心し、半分寒心する。

「いや、戦うの嫌いだし……そして俺は負けたし」

「この臆病者！　ばか！　間抜け！　アホ面！　そうだ！　私は今日聞いたぞ！　お前が不良なんて奴らから金を巻き上げられたのを！　この弱虫！」

「聞いた？
どこで？」

「華麗にスルーするなあ！……新聞部の人たちが号外配ってた」
「マジかよ……はー」

ゴツガアアン！と派手な音を立ててやってきたのは海田ハーレム要員達だった。

「あんだよ？　っつか海田の元へ帰れ」

しっしつと壱は美少女達を無下に扱う。

「不良に襲われたって聞きましたけど大丈夫でしたか！！？」

とキセヤが心配そうに言う。

は？　と壱は声が変に漏れ出た。

だって、おかしい。コイツらは海田に無様な格好をさせた壱のことを恨んでいた筈なのに……。

「あつ！　そうだ！　私、お弁当作ってきたんです！」

フライン「カネットが重箱を手提げ鞆から取り出した。

「いやークレアが弁当作ってきたくれるし……」

「クレア？」「誰ですのそれ？」「壱君？　説明して」「まさか、

彼女？」「う……さつさと倉敷の魅力に気づいていれば……っ！」

「わ、わああああん！！」「大丈夫。略奪愛でも大丈夫」

「お前ら怖い……クレアっつーのはアレだ。俺の相棒というか……」

ま、それはどうでもいいから帰れ、と壱は七人のハーレム要員に對して言う。

キセヤ、麗那、フラインに至っては第一ハーレム要員だ。

こんな所で油を売っていると海田が誤解するのではないだろうか？
というか、この展開は壱自身が勘違いしそうだ。

俺のこと好きなんじゃね？　みたいな。

「悲しいわ私……ぐすっ……壱くんは拒絶されて……」
と麗那が嘔泣きする。

「はあ……あのさあ……告白っばいぞソレ。海田に聞かれたら誤解するんじゃない？」

「告白だけど？」

「……へー。俺のこと好きなの？」

「うん」

「へー」

「……何か言えよ！」

と遊星が壱を叩く。

「何か？ ってなに？ ああ……返事？」

「当たり前だろ」

「無理」

「……そ、そう……でも私は諦めないからあああああ……！」
そう言っで逃げ帰った。

ふいつと六人を無表情で見る。

「まさかとは思っけど……お前らも？」

「ち、違います！」

更に六人＋すっかり影が薄くなった弥生が帰って行った。

「ったく……どんだけ惚れっばいんだよ神風さんは……」

愛や恋をしたことがない男——倉敷壱は憂鬱そうな顔で空を見上げた。

「はあ……っってホントそういうのに冷たいよね」

綾瀬がなぜか悲しそうな顔でそう言う。

「何が？ つーか前まで海田のこと好きだった筈なのに俺って……」

「……でもそういうのだってあるでしょ？ 今が好きだったらいいじゃない」

「……けっ！」

遊星は気になったのかクリスとジャンケンをしながら聞く。

「……もしかして敷っで頭かてえ方？」

「っって恋したことないんだよね」

「え？ マジで！？」

とフレア、クリス、遊星。

「驚く事ないだろ！ つーかお前らあんのかよ！」

「私は絶賛進行形……というか……」

とフレアは顔を赤らめつつ、壱の方を熱っばい視線で見る。

「私も進行形かな〜っていうか意外と純なんだ〜」

くくつと笑いながらクリス。

「まあ、わかるけど」

「俺は小学校のときに先生を好きになって……家までつけたりしたなあ……つてクリス痛い痛い痛い！　つーか嘘嘘！　純粹なる性欲でしたすみません！」

「そっか……クリスは鞍馬で鞍馬はクリスで……フレアはよくわかんねーけど好きな人いんだな……」

『誰がコイツって言った！！？』

「誰がよくわかんないんですって！？」

「したことないのって俺だけ？」

激怒する三人を軽く無視して自分を指し示す壱。

「ほら異常でしょ？」

と綾瀬は肩を竦める。

その言葉には棘があり、何か含んだものがある気がするのだが壱にはわからない。

「まあ愛とか恋とか信じてねーし。いいんだけどな別に……」

そう。麗那みたいに簡単に心変わりのする『愛』や『恋』なら知らない方がマシだ。

壱は自分自身、小学生か中学生みたいなアホで純な考えだとは思
う。

「そんな事ありません！」

突如、教室に入ってきた人物が言い放った。

壱たちが視線を向けるとクレアが居た。

両手には壱の分の弁当とクレアの分の弁当がある。

因みに皆にはクレアと壱の関係は全く喋っていない。

言及はされているが、壱はその気配を感じ取ると別の話で逸らす
のだった。

「あん？　クレア？」

「そんな悲しいことを言わないで下さい壱さん。人を愛するという

のはとても素晴らしいことです……アーメン」

「初めて『らしい』所を見たな……」

まあ、アーメンはシスター何かの台詞だと思うがそこはツッコミを入れない。

「つか、お前は恋したことあんのかよ？」

「……はうわっ！？ い、いや私は皆さんのことを『愛してます』よ？ でも、恋とかそれは別物で……あ、あのですね……」

「あーはいはい。お前はそんな感じだよなー」

昼の部2 あれ？ 1は？

そして、クレアの作ってくれた弁当を突きつつ、クレア達と喋る。

「あ、そういや、『アレ』録ってくれた？」

「はい。シツカリ『ふるるん海葡萄』を録りましたよ」

「ちげえよ！ 俺が録って欲しかったのは『ふるるん滞在記』だつ
つーの！ どう間違っただよ！ つかそのタイトル何？」

「そうだったんですかッ！？ すみませんでした！！」

「まあ、いいけ——」

「今の会話、何？」

「あん？ 綾瀬？」

「どう考えても今のは一緒に住んでるって事なんじゃ？」

「……ふ、フレア……さん？ 何も、そんな……」

墓穴った——！！ ときは心の中で叫ぶ。

クレアと居るのがもう日常と化してきたきにとっては今の会話は
特筆すべきことではなく——故に秘密にしていたことを忘れ去って
いた。

それはクレアも同じらしく、両手を可愛らしく小さい口に当てて
固まっている。

どうする？ きの脳内では凄まじい計算が行われていた。

もう隠し切れないのではないか。

「あーあのーアレだよ。近所に住んでるから……ほら世話焼き婆さ
んのな？」

「……ふーん？」

綾瀬は眼を細め。

「そうなんだ？」

死罪を断定する裁判官のような冷え切った声を出す。

クレアときは互いに眼を合わせながら、怖いです、と意思疎通。

「私たち、友達だよね？ 何を隠してる訳？」

フレアは何故か、ヒクヒクと頬を痙攣させながら尋問してくる。その声は何故か舌を糾弾するような響きがあった。

頬が痙攣って病院に行った方がいいんじゃないか？ と舌は思う。つい、と視線を遊星とクリスの方にやるが二人は弁当のオカズ交換に勤しんでいる。

ように見せかけて、意識は舌の方に向けているのがヒシヒシと感じられた。

だって、普通はトマトとウインナーを交換したりはしない。

「……あーその……一緒に、ね？ ホラ……何っーか」

「うん私達は……その、えーと……あ、そういえば二人とも舌さんの事がお好きなんでしたっけ？」

につこり、と。

糖分六十パーセント。

鈍感度三十七パーセント。

色気三パーセントの笑みを浮かべながらそう言った。

クラスメート達はクレアのその笑顔に頬が緩まり、そして何人がが恋に堕ちた。

魅力はあるが、色気がない——子供のような笑顔だった。

「女としては致命傷だよなー」

「ん？ 何か、言いましたか？ 舌さん？」

にい、つこり、と。

毒々しい笑みを浮かべながらそう言うクレアは自分が千年生きていてモテたことがないのを気にしているのかも知れない。

「はうわっ！？ 私は、別に、幼馴染だし！？ お姉ちゃん代わりのな！？」

と、今更クレアの言葉に反応した綾瀬は真っ赤な顔でそう言う。

「（うん。私は舌が大好きなんだから関係性を教えなさいよ！）」

フレアは何か小声で呟いていたがチャイムの音で掻き消された。

「あ、チャイム鳴った……」

クレアは「じゃあ私帰りますね」と言って帰っていった。

壱&クレアの夕方

基本的にクレアは朝に洗濯物や夕食の下拵えを済ませ、昼休みを壱と共に過ごしてから、悪魔を探しに出かけ、壱が帰ってくる四時くらいに帰ってくる。

で。

もう我慢の限界だったのか男子数名と綾瀬、フレア、クリス——更に海田ハーレム軍団（神風麗那も入ってるよ）に尋問され続けていた壱は五時三十分に林道を歩いていていた。

「はあ……クレア心配してっかなあ……っ！か悪魔搜索に二人で行けないって怒ってかも」

壱は溜息を吐きつつ、希望的観測が脳内を過ぎる。

もしかしたら、褒めてくれる可能性もあるかもしれない。

だって、あんだけ問い詰められたのに喋らなかったんだし（一度は義理の妹設定で逃げ切ろうとした）。

風が靡き、髪が揺れた。

無意識に揺れた前髪を追いかけて——前方二十メートルほど前にクレアが居たのを見つけた。

「あ、壱さん！」

クレアは笑顔で手を振ってくる。

「ああ……クレア。待たせたな」

無意識に歩く速度を少し上げる。

「心配しました。全くもう連絡くらい下さいよ！その為の〇円ケータイじゃないですか」

クレアは壱の元まで走ってきて横に並ぶ。

「悪いなホント……ごめんなさい！」

「今日はこのまま悪魔探しに向かいましょうね」

「いつ！？マジッすか？」

「マジっすよ」

「……でもさあ。この辺りにはもういねえんじゃねえの？ 何の事件も起きてないし」

「……そうなんですよね。大天使様が嘘を吐くとは思えないんですけど……悪魔がどこかに行っちゃったのかな？」

「さあ？ でも俺は居ると思えねえんだよな。悪魔憑きは居たけど……ん」

歩きながら形のいい顎に手を当てて小首を傾げる。

最近二人で見たドラマの探偵を意識しているのが丸分かりだ。

「にしても大天使も無茶言うよな。出来損ない天司と俺を連れて悪魔を討ててんだろ？」

「出来損ないじゃないもん！ 確かに私は飛ぶのが下手です……天術もそんなに使えないですけど……」

「お前……」

「で、でも大天使様が私を派遣したのには理由があると思うんです」

「世界の瞳ってヤツか？」

「そうです」

世界の瞳、という能力をクレアは有しているらしくその能力は世界中の人の視界をハッキングして覗き見することも、A君の視界をB君の視界へ転換することも可能というチートな能力だ。

海と悪魔憑きとの戦いに横槍を入れたのもこの能力のお陰である。

「それでも、悪魔が見つかんねーんだろ？」

「悪魔は見ただけでは分からないこともありますから」

「で、直に見ればわかると……はあ先はなげえな」

壱の溜息にクレアは少しむっとしたように壱を見る。

「早く悪魔を退治できればいいですよ……」

寂しげな表情を浮かべながら言うクレアに壱は横目で見やる。

壱&クレアの夕方2

結局、ホームレスが住んでいる廃病院を回るに終わった。

ここをクレアが残っていた理由は百パーセント怖いからだろうと、壱は推測している。

晩飯を食いつつ、『ふるるん海葡萄』を見る。

教育番組だったらしく、懐かしい雰囲気があった。

今日の晩飯は焼き飯と豚汁、そしてゴーヤチャンプルだ。

「うん、旨いな豚汁って」

「それはよかったです……それでこの怪物は一体……？」

「いや、それは着ぐるみだ。あー人が着てんだよ」

「何でこんなわけの分からないモノを好んで着るんですか？」

「……子供に人気だからじゃねえの？」

クレアのケータイから黒電話のリンリンという音が鳴った。

メールか電話だろうが……。

「お前って教えたヤツ居んの？」

「今日何人かの人に訊かれて教えました」

と、嬉しそうに報告してケータイを開きフムフムと頷くこと三秒。

「ぶふう!!!？」

ゴーヤを吹いた。

べちゃ、と壱の顔面にクレアの唾液で濡れたゴーヤが当たり、テーブルに落ちた。

「壱さん!？ こ、コレ見てください!」

クレアは興奮しながら壱にケータイを握らせる。

反対の手でタオルを使い顔を擦った。

「……ゴーヤを飛ばすほどのモンなんだろうな？」

そう言いつつ、見ると……

「ぶはっ!!!？」

焼き飯を思いつきり吹いてしまった。

超至近距離にクレアが居たため、全てが顔面にぶつかる。

「きゃあっ……………!？」

「あ、わりい!」

「もう……………壱さん……………まあ、驚くのはわかりますけど」

壱が使っていたタオルで顔をゴシゴシ拭きながらクレアは言う。

「悪い……………っか。告白? コレ」

「……………多分。好きです付き合ってくださいって書いてありますし…

……………」

「あーコイツ、誰? ていうか、付き合う気あんの?」

「……………この人のことよく知りませんし……………そもそも何で私を好きになっただんでしょう?」

そう言えば、といった感じでクレアは首を傾げる。

「そりゃあ、外見がいいからだろ。男が女を好きになる原因なんてそんなぐらいいかねえって」

豚汁を飲みつつそう言う。

告白くらいで驚いてしまったのが馬鹿みたいに思えてくる。

「……………そういえば、天司長キノコさんも仰ってました。男が女を好きになるのは外見で女が男を好きになるのも外見で。男が女と一緒にになる理由は従順さで女が男と一緒にになる理由は金だって……………本当なんですか?」

悲しそうな顔で壱に尋ねる。

「……………えー? そんなこと訊かれても……………っか天司長シビアだなオイ」

どうだろう? それだけではないにしても結婚相手に求めるモノ、としてはランクインしそうだ。『性格』と『甲斐性』という聞こえがっつの良い言葉を使っ、だが。

しかし、この顔を目の前にしてソレを言うのも余りに可哀想な気がする。

「っか。どうすんの? その告白」

「……………うゝ。どう断ったらいいんでしょう? 何かありますか?」

「普通に断ればいいんじゃないの？ どうせ一週間くらいでケロツと他の女を好きになってるって」

「そんなの分かりません。もしかしたら、ショックで自殺……」
「ないない。お前がそんなに魅力的な訳ねーしな」

あつはつは、と壱が笑う。

そんなこと、と文句を言おうとしたクレアはモテないという事実を思い出したのか「あるかもしれません……」と力なく呟いた。
そんな感じで夜の時間は過ぎていく。

氷氷氷氷氷

壱が寝静まった午前二時。

クレアはボイス日記を録ることにする。

ポケットから小さなマイク型の録音機を取り出す。

親切な方から貰った品である。

クレアの約二週間の思い出がここには詰まっている。

「壱さんに聞かれると恥ずかしいですから」

そう独り言を言いつつ、トイレに閉じ籠り話し始める。

氷氷氷氷氷

えーコホン。では七月十九日の日記です。

今日は壱さんと私は人生初の告白をされました。

えーと。壱さんは物凄く酷く振った、と私に告白してきた男の子

……え、と……畑さんが言っていました。

どうやら壱さんは『愛』というモノを信じていないようです。

でも、その割りに優しくったりモテていたりと思議な人です。

海田さんは壱さんに再戦を申し込んだり、闇討ちしたりしてるらしいですけどことごとく壱さんに無視されたり、たしなめられたり、壱さんのことを慕うようになった海田さん軍団の女の子達がボコボ

コにしてるらしいです。

そういえば、海田さんは壱さんに負けて以来、学園のファンクラブが解散したらしいです。

壱さんに言った通り、人間には愛がないんでしょうか？

……ってあれ？ これ私から見る壱さんの日記になってますね。えーと。

今日の私は壱さんのお弁当と私のお弁当を作って、お店で買い物行って壱さんが昨日「あー芯切れちゃったな」と言っていたのを思い出したので芯も買い学校に行きました……あ、そういえば芯を買ってきたので壱さんが珍しく褒めてくれました。

録画番組を間違えちゃいましたけど……プラスマイナス〇ですよ
ね！

それから帰って洗濯物をして悪魔を探索に行つて、不良の皆さんに絡まれた子を助けたりしました。

それで四時になったので壱さんが帰つてくると思い寮に。

壱さんには世界の瞳が通用しないので暇です、と呟きながら待つ事一時間。

流石に心配になって三十分待ったら壱さんが帰ってきたので嬉しかったです。

でも、壱さんがげんなりした様子で「先は長いなー」と言った時、少しむっとしました。

悪魔を早く退治するのはいいことなんですけど……何でなんですよ？

……あ、アレ？

また壱さんの話題に……。

ま、まあ壱さんは私と同居中のパートナーですから全く不思議じゃないですよ？

壺の力

まるでそこは映画館だった。

事実、ここは映画館を完璧に模したモノだった。

ご丁寧に非常用出口まである。

それがたった一人の男の為に作られたモノだとは誰も思わないだろう。

しかし日本、イギリス、オーストラリア、韓国、アメリカなどの日本と手を取り合っている国に武器を売り、商売している『大和製鉄合同会社』の社長だと知れば誰しもが納得するだろう。

薄暗闇の中、ぼんやりと発光する大幕は海田と女達をくつきり映している。

ほぼ同時に全ての女子が倒れた。
と。

皺が深く掘り込まれた六十三歳の社長——大和和也やまとかずやの横でむしやむしやポップコーンを食べていた青年は欠伸を噛み殺す。

鮮やかな茶色の髪に、好戦的な大きく鋭い瞳が特徴的なカッコいい容姿をしている。

名前は一雨宮時雨あまみやしぐれだ。

「こんな情報で倉敷壺の強さはわかんねえな。敵が雑魚過ぎる上に動作が飛んでる」

映像は写真を一秒間に何回も撮り、それらを繋ぎ合わせることで初めて映像として出力できる。

しかし、あまりにも速いモノがあった場合、写真を写す瞬間に別の場所へ行っている為、飛んでしまうのだ。

「そこまで速いということか」

低音の声を映画館内に響かせて、大和がゆったりと言う。
動揺もしていなければ驚きもしていない。

このカメラは一秒間に千コマ撮るモノだったのだがそれでさえ追

いきていない。

時雨の見立てだと、音速は軽く超えている。

更に言えば、音速を超えた人間が放つ衝撃波すら見当たらない。ということは、倉敷壱は全ての人間を護りつつSクラスを無傷で撃破したことになる。

あの純白の粒子の性能の良さと万能さは凄まじいモノがある。

「まあそういうことだな。つってもこの海田って奴弱いな。こんな奴をお前は欲しがったのかよ」

ポップコーンを放り投げ、口に入れるその直後に手が伸びて大和に弾き飛ばされた。

「あ」

「お前はわしの社員だろう。お前呼ばわりは止める」

「わかったわかった。社長……でもこの映像はどういう見方をしようとかの役にもたたねえな。女子高生の屈辱シーンが好きな人には需要はあるかもだけど」

くつく、と笑いながら容器を傾け、一気にポップコーンを口に流し込む。

「海田が弱すぎるのか」

「ま、俺達七大魔術師や倉敷から見ればな。世間から見りゃあ、十年に一度の天才クラスか。運が普通なら勝ち続けて人生終われる」

「よくも悪くも天才クラス、か。お前ら異端とは違う訳だ」

「しかしまあ。あのモテ具合は異端クラスだと思うけどな俺は……
ってマジかよ！ アイツら倉敷に惚れやがった！！」

ぎやははははは！ と腹を抱えて笑う。

昨日見た雑誌に書いてあった夏は『出会いの宝庫』だとか『開放感いっぱい』だとか『恋せよ乙女』だとかいう馬鹿みたいな言葉の羅列を思い出して更に笑う。

横で大和が侮蔑のこもった眼差しを向けているのにも気づかない。大和は時雨が笑い終わるまでたっぷり二十秒ほど待ってから言った。

「お前にやつてもらう仕事はもう言ったな？」

時雨は鬱陶しそうにポケットからグシャグシャになった写真を取り出してぶっきらぼうに言う。

「天司を連れて来ればいいんだろ」

「そうだ。多少なら手荒に扱っても構わない」

「天界や国が黙ってねえかもよ？」

時雨は手にしている容器を魔術で消し飛ばす。

容器は眼に見えない程に細かく切り刻まれ、宙に飛ぶ。

「国に圧力でもかけるし天司に法的な人権はない。そして天界は干渉してこない」

へえ、と時雨は眼を細める。

「楽しめそうじゃん」

壱の逃走

「ああもう！ お前らうぜえうぜえ！ 超うぜえええええええええええ！！！」

倉敷壱は海田、木村早瀬、神風麗那、キセヤ、七草幼女、妹キヤラ、戦闘狂、不良などなどに追いかけられていた。

「お前らもう俺の友達だろ！？」

「俺の新しく作った技でテメエをぶったおす！」
と鼻息を荒げるのが海田京。

ついこの間までその才能で格下相手に無双していた『チート主人公』である。

おそらく『某携帯小説サイト』で量産されている量産型主人公だ。しかし、ソイツらは基本的に負けられないので負けたらこうなるのかどうかは壱の知るところではない。

可哀想な末路である。

そして壱の台詞は完全スル！。

「京！ お前は今日は見ている！ アイツは私が倒す！」

そんな物騒なことを言うのは木村早瀬である。

なぜか最近、海田を押し退けて壱を倒そうとしてくる武士道系ヒロインだ。壱はヒロインなどとは絶対に認めないが。

「待ちやがれ！ ゴラあ！ 壱おにいちちゃん！ 私のオモチャになりやがれ！ ていうか一緒に遊べえ！」

可愛いのか物騒なのかよくわからない台詞を吐きつつ凄まじい速度で走ってくるのは幼女——七草様だ。

壱が皆を振り切って逃げれない理由はこの我侭っ子にありたりする。

壱が姿をくらすと泣くのだ。

単純だが効果的なやり方である。汚い。

「私はお弁当を作ってきたの！ 食べて！」

と、神風会長は重箱片手に言う。

絶対にお弁当は崩れている。賭けてもいい。

適度に皆が追える速度で走り続ける。

因みに七草よりも足の速い海田や麗那は壱の粒子を纏わせて遅くしてある。

あくまで七草様のご機嫌を損ねないための方法なのだ。

お陰で七草よりも足の遅い不良たちは脱落し始めている。

「壱！ あとで一緒にU.N.Oやってもらうからな！」

「い・や・だ！ だってお前ら金かけるもん！」

と、不良たちのカモにされている壱が叫び返す。

一回誘われたので『友好関係を保つためにもやるか』と思いやつたのだが、金はかけるわ、罰ゲームし始めるわで壱は全敗。アイツら強すぎ。

つか、カモにしてる節があるのでもう友好関係とか無理っぽい。

「私の買いい物に付き合ってはくれませんの!？」

と、何故かキセヤは言ってくる。

キセヤはスツカリ壱のハーレム要員気取りだ。

誤解を上塗りするような態度ばかりとってくる。

そりゃあ確かに押して駄目なら引いてみる、という名言はあるが好意はしっかり好きな人に伝えるのが一番だと思う。

「海田に付き合ってもらえよ！」

キセヤは壱の言葉に凄く傷ついたっぽい顔をして、涙目になりながら廊下でこけた。

壱はしっかり粒子でフォロー。

百パーセント無傷な筈だ。

何で俺がこんな目に遭わなくちゃいけないんだ、と思いつつ学園の中を逃走する。

「壱を傷つけるならお兄様は引っ込んでいてください！」

「おま……！ まさか壱のことが……!!?」

「テメエら何勝手に壱呼ばわりしてんだよ！ ぶっ飛ばすぞ！」

「そうよ！ 名前呼びは私と壱の愛の証なんだから」

「……一方的な愛の証ってこと？ はは！ これは笑えるわ」

と、名も知らぬ戦闘狂（女子）が笑う。

「私と壱の方がお似合いよ」

「コイツら人の話きけよ……っ！ つか何で全員名前呼び定着？」

壱の悲痛な呟きが集団の横を横切った遊星、クリス、綾瀬とその友達達、そして沙耶（理事長）を涙させた。

『苦労してるね』

ドラクエ式結婚式

「えー健やかなる時も？ 病める時も？ …… 何だっけ？」

「愛しますか？ 『はい』か『いいえ』で答えて！」

「あ、選択権あんだ。んじゃあ『いいえ』」

「『はい』か『いいえ』で」

「『いいえ』」

「『はい』か『いいえ』」

「ドラクエ仕様か…… んなら『はい』」

「ちゃらららちゃっちゃん。私達は夫婦になった」

「レベルアップ！？ …… 離婚しよう」

「この装備は外せない」

「ここ教会だろ？ 絶対外せるって！」

「外したいなら慰謝料五千万」

「…… 離婚は取り止めよう」

とか、何とか。

意外に楽しく七草と結婚式ごっこで遊んでいる壱。

あの後、曲がり角で七草のみを攫って校舎裏まで連れて来たのだ。
った。

ずっと走り続けるよりもこの方が労力的にマシだと判断した結果だ。

と、いつか海田達相手にサービスするのが面倒くさくなったというのが本音である。

なぜコチラに迷惑をかける奴らに壱の姿を晒すというサービスを
行わなければいけないのか。更に逃げる、というオマケつきだ。

それに一緒に遊んで欲しいと言われれば多少なりとも嬉しい訳だし。

とはいえ、海田ハーレム軍団に言われるのは海田に引け目を感じるから嫌だが。

「神風も俺に恋してるってのがなー。まあすぐに俺に対しても飽きそうだしそれまで付き合うつてのもアリかもな……」

だって外見はいいし。

正直な話、一回誰かを好きになってるんだしコッチが別れを切り出しても三日後にはケロッとしてそうだ。

「とはいえ、精神的にコッチが無理だな……」

綾瀬、クレア、遊星、フレア、クリス、その他大勢に何てバッシングをされるか分かったモンじゃない。

この世界はなぜかこと恋愛に関しては神聖化する奴が多く、壱のような考え方をする奴を『心無い人間』として処理される傾向がある。

「ホント、ふざけた世の中だよなー」

恋だの愛だの科学で証明されてるモンだっていうのに。

(ジェットコースターと一緒に乗っただけで誤認するような恋なんて誰がどう信じればいいんだよ)

「いーちくん」

甘い声に壱は後ろを振り向いた。

そこにはコーラを入れる瓶のような形をした容器に入っているアイスを二本携え、蠱惑的に笑っている沙耶が居た。

壱は付いて来いってことだよな、と溜息を吐く。

「壱おにいちゃん行っちゃうの？」

「ああ、悪いな。結婚式ごっことはまた明日ってことで」

「じゃあねー！ 続きは遊星おにいちゃんにしてもらっー！」

「ん。遊星おにいちゃんを困らせんなよー」

ドラクエ式結婚式（後書き）

伏字ってこういう場合いらないんだろっか？

大和製鉄

壱は理事長室でクー利っ主（アイス）を食べながらふと、気づいた疑問を口にする。

「俺をよく短時間で見つけたな。何か監視カメラとかでも？あと、理事長なんてやってるけど何歳なわけ？」

クー利っ主が夏の日差しの中、沙耶の手にあるというのに水っぽくなっていないのだ。

なら短時間で壱を見つけた、ということになる。

「んー。私の能力かな。天使の微細な振動なんかを肌で感知することが出来るから……あと、私の年齢は永遠の十六歳」

「……そういえば、海もそんなことを言ってたな……天使の揺らぎとか」

独り言を展開した壱に沙耶はアイスを頬張りながら、友人と接するような感じで問う。

「ケイトス、って知ってる？」

「自分の天使、だよな？」

「そう。自分の天使。で、その自分の天使を持つ者が手に入れられる能力がソレ」

「天使を肌で感じれるってこと？」

「ま、人によって全然違うけどね。ある人は自分の半径二、三ミリの範囲でしか感じ取れなかったり。ある人はON、OFFの切り替えが出来なくて精神錯乱しちゃったり。慣れれば空気みたいなものなんだけど……因みに私の搜索範囲は半径百キロメートル」

容器から漏れ出したミルク色の液体をねっとりと舌で舐めとる。

壱が。

「そりゃ、あぶねえな……」

「その為の学園だから」

「そういえば……この学園を設立した人って大和也だったっけ？」

沙耶は容器をぱくつと口で啜えて上へ上げて中身を全て飲み干しながら頷く。

「ま、自衛力を上げるための学園でもある訳だしね。国が運営する筈だったんだけど……財政ガツタガタだったから。今もそうかな」

「ガキみてえな飲み方するな……」

「んー」

「で？ 俺は呼んだ理由って何？」

クー利つ主を理事長室の端にあるゴミ箱に二人して投擲する。とうてき

「「ストライク」」

沙耶と壱（粒子で補正した）は二人して言う。

「呼んだ理由はね……あなたと同居してる天司さん……狙われてるわよ。ま、一つ忠告」

まるで、羽毛のように軽い言葉だった。

「は？ 狙われてる？」

それゆえ、脳に上手く言葉が馴染まない。狙われてる？

「そうそう。天司、なんて最高にいい人材じゃない？ 人間界での絶滅危惧種よ」

「絶滅危惧種……」

「そ。誰に狙われてるかって言えば今の日本を支えてる大和製鉄よ」
「嘘だろ？」

「嘘じゃないって。そもそも大和製鉄はほんの六年前までは武器を密売する会社だったんだから。だからすぐに日本に強力な武器を売れたし、それを元手に学園を設立も出来た。ようするに時代が来なきゃ、法律で裁かれるべき対象なのよ」

淡々と。

それが事実であるかのようにそれを語る。

いや、声質で見える限り、それは事実なのだろう。

そして。

壱のすべきことは。

「……ちよつとクレアを見てくる」

大和製鉄の歴史を聴くことでも。

沙耶がなぜそれらを知っているのか問い詰めることでも。

革張りのソファで悩んでいることでもない。

「大丈夫かアイツ……」

壱は一瞬で部屋へと舞い戻った。

「流石ね……あれならクレアを無傷で助け出せるかもしれないわね

……期待はしないけど」

大和製鉄（後書き）

シリ阿斯突入です！

期待しないで見てやってください

クレアの感情

「大丈夫か!？」

「ふえい!？」

壱が血相を変えてやってきたのでクレアは思わず素っ頓狂な声を出す。

同時。

齧っていたお煎餅に歯を立てるところだったが、歯元が狂い舌を噛んだ。

「うっぎゅうっぎゅうっぎゅうっぎゅう!!?」

ドストスバタバタ、と口を押さえながら転がる少女を見て壱はほと息を吐く。

「よかった……」

「よかつたくないです! 痛いです!」

舌を蛇のように出して抗議してくるクレア。

「あー悪い悪い」

笑顔を浮かべながら言う壱にクレアは少し疑問を感じる。

「何笑ってるんですか?」

「あ、いや……無事でよかったなあ、と……」

あはははは、と壱は表情を引き攣らせる。

「あ、そうなんですか……」

自分を心配してくれた事実がクレアの心中に渦巻き頬が勝手に赤らまるのを感じた。

初めての感覚に少し戸惑う。

「どうしたんだ? 顔赤いぞ?」

「……私にもわかりません」

ぶはっ、と壱は噴出した。

「何だそりゃ……熱はねえんだな?」

「はい。それは大丈夫です! 私は健康には自信があるんです!」

クレアはわからないまま、やけにハイテンションな声音で壱に言う。

なぜかそれが、言い訳のように感じて——クレアは『？』と首を傾げる。

壱は安心しきったような感じで腰を降ろす。

「まあ何だ。とにかくよかった」

「そういえば、休み時間でしたよね。今」

「あ」

忘れてた、と壱は呆然と言う。

それからすぐに掌を返したように言った。

「ま、いいか。特に授業もわかんねーし。理事長も知ってるだろうしな」

「？」

小首を傾げるクレアに壱は手を振る。

「何でもねえよ」

安心と焦燥が同時に胸に沸いて、熱くなる。
痛い。

どうしたらいいのだろうか？

クレアが狙われているのが事実だとすれば護るためには学校に着いてきて貰うしかないだろう。

流石に大人数の前では動かないだろうし。

だけど。

相手は大会社だ。

国に大きなコネだってある筈だし……。
と。

そこまで考えた所で思考が中断された。

理由はインターホンのチャイム。

「すみませーん。大和製鉄の者ですが。今日はお話をしに参りました」

ぞくつと緊張が一気に喉元までせり上がった。

思考回路がショートしたかのように空白で埋め尽くされる。

その空白を一つずつ埋めていくように再思考する。

（居留守を使うか？ いや、実力行使じゃなく話なら何とかなるかもしれない。相手は『会社』なんだし…… だけどとりあえずクレアはどっかに隠しておかないと）

と、ここまで考えてきはクレアを問答無用でトイレに押し込み、クレアが不満の声をあげる前に手で口を押さえる。

「お前はここに隠れてろ。いいな？ 物音一つたてるなよ」

そう一方的に言い放ちクレアが頷くのを見てから手を離し、ドアを開けた。

平和的に引き下がってくれろと、心のどこかで思いながら。

対決1

ドアを開けた瞬間に見えたのは男の顔。
壱の頭二つ分は高い身長を持ち主だった。

威圧的な瞳で壱を見ている。

雰囲気が普通じゃない。

押し隠していてもわかる、妖刀のような刺々しく禍々しい雰囲気。
(コイツは、ヤバイって……)

腰を引けるのを感じる。

心臓がバクバク高鳴っていく。

「俺の名前は山内陣……あがっていいかな？ 色々話すことがありますし」

「ああ。別にいいですけど」

声が震えていないかどうか、反芻する。

大丈夫だった筈だ。

陣を部屋に上げると、陣はテーブルの前に座って黒光りするケースを真横に置いた。

陣は部屋を観察するように周りを見渡す。

「天司が居ないようですが？」

壱はトイレに目を向けなくなるのを抑える。

「別にいいでしょう。どうだって……それより話を」

「ああ。それもそうですね」

ケースの留め金を外して開け放つ。

そこには、札束が漏れ出る程にあった。

「まさかとは思うが、金をやるからクレアを渡せって言うんじゃないかねえだろうな？」

表情が引き攣る。

「わかってるじゃないですか。一億上げるから天司を渡してくれないでしょうか？」

そう言う陣は、しかし、壱がどういつ答えを出すのかわかっているように薄く笑っていた。

壱は予想通り、想定通りの言葉を口に出す。

「嫌に決まってるんだろ」

壱はこれから何が起こってもいいように粒子に感覚を研ぎ澄ます。

海田レベルなら文字通り一瞬で叩き潰す用意をする。

（相手が海田並みなら僥倖なんだが、そりゃあねえか）

陣は快楽を求める人間そのものの顔でこう言った。

「さて、倉敷壱さん。殺し合おうか？」

「……ッ！？」

ゾクツと、恐怖が背中から頭にかけて冷気がせり上がった。

「ふざけんな」

「……なら天司を殺す」

「……あ？」

何、言ってるんだ？ と壱は訝しげに問う。

「トイレに天司が居るよな？」

「何で知ってるんだ！ そんなこと！」

「そう怒鳴るなよ。七大魔術師の弟子なんだからこれくらい出来て当たり前だろうが」

耳に一指し指を入れて穿る。^{ほじ}

気負いのないその態度は誰がどう見ても『異常』だった。

「テメエ……！ クレアを殺したらぶち殺すぞ」

「……」

トイレのドアが激しく開いた。

「……クレアっ！？」

クレアは転がるようにトイレから出てきた。

「い、壱さん！？」

引き攣った声で壱の名前を呼ぶクレア。

「ま、天司も来いよ。殺し合いを見せてやる」

「殺し合い！？ 何言ってるんですか！？」

「俺は殺し合いなんて……」

言いかけた言葉は途中で途切れた。

理由はクレアの首筋に立てられている空気の刃。

空気を圧縮、固定化して刃を作り出しているのだ。

「デメエ……ッ！」

「だから怒鳴るなよ。お前が殺し合いを受けて立つてくれれば天司は殺さない」

「クレアを殺す？ 無理だろ。そんなの」

「別にインパクトを出す為に殺すって言うてるだけなんだけどな……。別にボコボコにして差し出してもいいんだよ俺は」

クレアの首筋から血が垂れた。

空気の刃を押し当てられたのだ。

怒りの衝動が壱を支配しそうになる。

拳をその顔面に叩き込んでやろうかと思った。

怒りで震える声で言う。

「……わかった。戦う」

「壱さん！？ 止めて下さい！ 私のことは……っ！」

悲痛な叫び声は空気の手でクレアの口を閉じさせることで止められた。

クレアの力では空気を押し退けることも出来ない。

「さて……闘技場へ案内する。着いて来な」

つつても、学校内のだけだな、と酷薄な笑みを浮かべた。

対決2

「学校の闘技場で戦うんですか？」

「そうらしいけど」

不安げな表情で問うクレアに壱は気負わず言い返す。

不安と動悸が歩く度に大きくなる。

「……オイ。さっさと入るぞ」

陣は学校の正面玄関から堂々として行つた。

「「は？」」

二人は同時に声を発した。

壱が思い直して言う。

「……ま、クレアも堂々として入ってるし……この学校そこら辺甘いかなあ……」

「今から逃げられないんですか？」

「無理。相手は組織だし多分どこに行つたって捕まえられる……それに俺の力でその風をどれくらいで破壊できるのかもわからないし。射程距離もわからない」

無茶をすればクレアはまさに一瞬で死ぬ。

そんな危険な賭けは出来ない。

「すみません……私のせいで」

「わああああ！！！！？ お辞儀をするなあああああ！！！」

「わ、わひゃあ！！？」

※※※※※※※※

海田京はピッキングの出来る先輩（神風麗那）や他の女の子達と昼飯を食べ終わった後、階段で倉敷壱とクレア、そして高校生ではないだろう青年を見た。

「……あれ壱じゃない？」

そんな目で壱のことを真摯に真っ直ぐに見つめていた。

不思議な感覚が壱を取り巻く。

ふわふわとした現実味のない感覚。

絶対に実現する訳がないという思考がまず壱にあるからだろう。

「気にするに決まってんだろ。馬鹿なこと言ってるじゃねえぞ、このアホ天司」

壱とクレアは目の前に広がる闘技場に入って行った。

壱とクレアの想い

闘技場へ足を踏み入れた瞬間、後ろの扉が完全に閉まった音を聞いた。

真横で心底心配そうにしているクレアを見て壱は言う。

「クレアを離してくれねえかな。怪我するかもしれない」

「お前が全力を出せない方が俺には都合がいいから無しだ」

余りにも当たり前な返答に一瞬言葉が詰まる。

しかし、断られることも考えていたので特に駄々はこねない。

壱は余波から身を護るための粒子を必要最低限クレアに与える。

一万もの粒子は流されるようにクレアの身体の周辺に浮いた。

直後。

陣の拳が壱の顔面ギリギリに迫った。

恐らく本気 of 海田と同レベルの速度。

壱は油断していたこともあり、焦って掌底で顔面を狙う。

コッチは防御は音速の拳くらいなら跳ね返す自動防御がある。

攻撃に徹すれば勝てる。

(殴りたくないかねえけど……)

陣は薄く、小馬鹿にするように笑う。

「お前、何躊躇してんだ？」

掌底が風に巻かれた。

風を阻止しようと掌底を行った右腕に粒子が移動しようとしたが、

遅かった。

「……ッ……!？」

それに伴って身体までぐらつく。

腹部に拳が打ち付けられるが、粒子が咄嗟に防御する。

風で拳が巻かれてから〇・〇二ミリ秒——十万分の二秒しか経っていない。

これが意味するものは、空気の凶器の完成。

衝撃波は室内を蹂躪し、対衝撃用の銀の壁が悲鳴を上げた。クレアにぶつかろうとする凶器は粒子が完全に跳ね返す。

次の瞬間、『世界の瞳』を敵に発動していたクレアは見た。

「壱さんッ!!」

クレアが鋭く叫ぼうとした。

そう、しただけだ。

二人の戦いは音速すら超えている。

故に声は届かない。

ただ一音すらも。

上から下へと襲い掛かってきた拳を粒子を受けたその瞬間、風が真下から吹き上げた。

スコップを模した風だ。

粒子が耐え切れずに弾け飛ぶ。

そう。

壱の粒子は完全に無敵ではない

耐久力。

俊敏性。

それらは壱の思考外の働き——つまり自動で動いている時は意識して働かせている時よりも質が落ちる。

つまり、壱の能力は無敵ではない。

（俺の防御が破れちゃった……ッ!!?）

初めての経験に壱は咄嗟にするべき選択肢が見つからない。す、と。

余りにも呆気なく壱の腹部が裁かれた。

風の刃だ。

「……くあ……ッ!!?」

壱はすぐさま後ろに飛び退いた。

クレアの叫びが聞こえる。

痛み。

それは壱にとっては常人よりも慣れていないモノだった。
それが襲い掛かってくる。

圧倒的な恐怖と暴力性を秘めて。

「……はあ、はあ……っ」

腹を押さえて、粒子で治療を開始する。

しかし、陣はそれを許さない。

音を置き去りに壱の鼻を蹴り飛ばした。

「……っ!!?」

治療に集中しすぎたせいか防御が発動しなかった。

粒子で身体能力を上げていなかったから潰れたトマトのように消滅していた筈だ。

鼻を押さえてうずくまる。

「い、つてえ……ッ!」

戦いたくない、と強く思う。

痛い思いなんかしたくない。

壱は思わず泣きそうになりながら思う。
だけど。

「うぜえ!!」

すぐ近くで鈍い音がした。

「え?」

クレアが倒れる所が遅く、遅く見えた。

「何で、クレアが?」

何、やってんだよ、と壱は呆然と呟く。

戦う力なんてコイツにはないのに。

粒子は絶対の防御じゃないって今のでわかった筈なのに。

「壱さんには手を出さないで下さい」

クレアはそれでも、戦う力も護る力もないのに立ちあがって壱を護ろうとする。

震える指先を壱は見る。

戦いは怖い。

傷つけるのは嫌だ。

痛めつけられるのも嫌だし、怖い。
だけど。

クレアを失うのはそれより嫌だ。

もう無理だ。

痛められず、傷つけずクレアを助け出すなんて。

そんな甘いことは言ってられない。

これまで通りなんてもう夢だ。

（覚悟を、決めろ……）

「テムエ、殺されないからって調子乗ってんじゃねえぞ」

「乗ってません。私はどうでもいいから壱さんを、もう殴らないで
下さい」

（クレアは護るんだ……。じゃなきゃ、俺が『力』を持つてる意味
がない）

壱は迷わない。

どれだけ痛い目に遭おうとクレアを助け出す。

「いい。ありがとうクレア。俺、もう倒れねえから」

クレアの肩を押して、前に出る。

「でも、私のせいで……それに、壱さんはこの人に殴られて……っ」

「大丈夫だって。俺はクレアを護る。もう倒れない」

言葉を口にする度に斬られた腹が痛む。

まだ腹が治っていないのか血が滲み出す。

「約束する」

作戦

「無力な天司を護りながら俺に勝つ、ねえ……無理じゃねえかな。どう考えても」

身体の周辺に小石を衛星のように周回させつつ言う。

「たつく。まさかあんなだけ持ち上げられてた海田よりも強い奴があつさり出て来ちまうなんてな……」

壱は世界の理不尽さをヒシヒシと感じながら言う。

（コイツと戦いながら壁を壊す、なんて実力差から見ても出来ないし……助けも期待できない……クレアの分の粒子を使った所でどれくらい能力値があがるのかもわかんねえ……）

八方塞だ。

圧倒的な劣勢に奥歯を噛み締める。

と。

そこで柔らかな手が壱の肩を叩いた。

「壱さん。作戦」

その声は真後ろから聞こえた。

「クレア？」

「（私の能力の全てを使って壱さんをサポートします。だから粒子を外してください）」

「は？ 粒子を外す？ 出来るわけねえだろ！ 死にてえのかお前は！？」

壱の驚きの混じった怒声にクレアは否定して言う。

「大丈夫です。私は天司ですから死にはしません。それに、このままだと壱さんは負けてしまいます」

「……」

「だから私の能力でサポートさせて下さい！ 成功すれば、勝てます」

真っ直ぐで情熱に溢れた瞳に壱は思いっきり溜息を吐く。

「何か、お前のそういうところ苦手だわ俺……でも、まあよろしく頼む。完璧な支援を期待してるからな」

護らなければいけないという強迫観念に似た思いが壱から抜けたからか、緊張が少し解れた。

身体が軽い。

陣は待ちくたびれたように欠伸をする。

「作戦会議は終わりか？ つつても、人の視界を奪ったり間借りするだけの能力で何をするんだか」

「私の能力はそれだけですけど。もう一つ、天司全員が持っている能力がありますから」

「天使を操る能力か……言っとくが、ソイツも俺には通用しない。

俺には俺の天使が居るからな。操れないぜ？」

壱はその言葉に一瞬不安になり、クレアを見るがクレアは真剣な表情を崩していない。

多分、大丈夫なのだろう、と思う。

普段が普段なので絶対と言い切れない所に一抹の不安を抱く。

「ま、いいや」

どんな作戦があつたとしても『実力』で何とでもなると、言外に告げるように軽く首を振った。

刹那。

小石が散弾銃のように飛んできた。

「くっ！」

壱は右手で弾丸と化した石ころを弾き飛ばす。

今はクレアが相手の視覚を全て奪っているので目が見えない筈なのだが……もしかしたら風でコチラ的位置を掴んでいるのかも知れない。

粒子が壱の眼前に集まった。

『壱さん！ 風の壁がやって来ます！』

それは擦れるような声だった。

音を伝えるのが遅い空気の変わりに天使を媒体とした超高速伝達

術。

壱の耳元に天使と配置させ、空気と同じく『揺らぎ』を起こすことにより『声』を作り上げる。

この方法を使うには壱の『粒子』は使えない。

クレア曰く、粒子から天使が逃げてしまつから、らしい。

上位の天司ならば壱の粒子の届かない場所から『天使』を使役して操れるのだがクレアはまだ天司として未熟な為、肌で触れる天使しか操れない。

故に。

（アイツを護るための粒子は使えない！）

しかし、壱の粒子でも操つた天使なら無理やりに介入させることが出来るのは僥倖^{ウラハシ}だった。

直後、クレアの言っていた壁がやってきた。

ベコツ！ とあり得ない音を粒子は響かせる。

ゴムボールを両手で押し潰すかのように、粒子がへこんでいく。

壱は風を流す為に粒子を操作しようとした瞬間、

『壱さん！ 背中に……！』

背中に衝撃が走った。

「……かつ、は……？」

まるで鈍器で殴られたような痛みは背中から腹にまで届いた。

（風の棍棒^{メイイス}……ッ！？）

息を吐き出すことも吸うことも出来ずに咳き込む。

「ったくよお。舐められてるよなあ俺も。こんな穴だらけの作戦で俺の勝てると思ったのかよ？」

見下すような声が届く。

「が、は。ごほ……あ、が……」

壱は息を懸命に整える。

何でクレアは見抜けなかった？

それとも、クレアの反射神経じゃ届かなかったのか？

呆れたように陣は言う。

「俺は確かに風を視覚化させてよく見えるようにしてるけどそれだつて俺の魔術だ。ONOFF可能に決まってるだろ？それに俺の視覚を天司に奪われて利用しないとでも思ってるのか？呆れるな」

「お前は今。クレアに視覚潰されてんだよな？」

「風を感じて、お前らの位置は把握出来てるけどな」

「っーかさあ」

壱はふつと囁くように笑う。

「俺らもこの状況を利用しないとでも思ってるのかよ？」

陣の顔が引き締まった。

「ま、さか……ッ！？」

「ああ。そのまさかだ。俺の粒子は素粒子並みだしな。どこに行つたかなんてこの空間全てを——素粒子すら一つずつ把握してねえとわかんねえよ」

視覚さえあれば、壱の視線などでわかったかもしれない。

もしかすると、純白に光る『何か』を見つけてこの作戦は水泡に帰したかもしれない。

だけど、視覚さえ奪えれば壱の粒子を発見することはまず不可能だ。

「……くっ！俺の風の法則から逸脱したモノを調べれば……ッ！」

「もう遅いつつの！」

陣の身体に巻きつけてある風から突如現れた純白の拳。

それが、陣の顎を跳ね上げた。

「……がッ！！？」

陣の身体が浮き上がる。

瞬時、壱のを護っていた粒子が風で巻き上げられた。

ベギリ、と銀の壁が耐え切れなくなり、根元から捲れた。

大砲ですら無効化する対衝撃用の壁が戦いの衝撃という間接的な要因で潰れたのだ。

「え……？」

壱はまだ陣が粒子を吹き飛ばせるほどの力があることに驚く。

（イタチの最後っ屁ってヤツか……）

しかし。

壱の考えは一瞬にして根底から覆される。

陣は浮き上がった体勢をビデオでも巻き戻したかのように整えた。

「嘘、だろ……？」

あの一撃は常人には耐え切れない筈だ。

そして、顎に鈍器で殴られた衝撃が襲い掛かった。

「が……ッ……！」

ギャグ漫画のように天井に音速を超えてぶち当たる。

そのままの勢いで地面に身体を打ち付け、跳ね上がりボロ雑巾のように転がって行く。

「壱さんっ！！！！」

「お前、まだ俺を殺す気で来ないと本当死ぬぞ？」

圧倒的なまでの一撃。

視界がチカチカと点滅して上手く見えない。

「壱さんに何を……」

クレアが何か言う前にサンドバッグを殴った音を百倍にしたような鈍く大きい音が耳を叩いた。

そして、次の瞬間。

「……！！！！」

声が飛ぶ（・・・）というあり得ない音が聞こえた。

声が置き去りにされるような音。

もはや音として成立されない音だ。『残声』ざんせいとでも呼べばいいのかもしれない。

「……」

クレアだ。

クレアが今、やられた。

風の鈍器なのか、何のかはわからないが傷ついた……。

「デメエ……」

己の無力を感じながら、静かにしかし怒りに満ち溢れながら言った。

ゆっくり、立ち上がる。

風の弾丸が粒子を千個程弾き飛ばした。

「クレアに、何しやがった！！」

作戦（後書き）

文章力、あがってるでしょうか？

ていうか、読者のには前の文章の方が見やすかったりするんじゃないか？

そこら辺の感想を下さい。

……いや、そこら辺でなくも感想は欲しいんですがw

えーでは一つ、くそどうでもいい裏設定でも。

フレアのお父さんの大手会社と大和製鉄は関係良好ですw

決着

壱の激昂に陣は軽く首を振っただけだった。

「風の塊を腹にぶつけたただけだ。別に死傷はねえよ」

死傷がなければいいと思ってるのか？ と。

壱は血液が沸騰したかのような錯覚に囚われた。

「ふ、ざけんなああ!!」

粒子を片手に集めてメートル前後の長さの『剣』を作り上げる。粒子を密集させて作り上げたこの剣はそこの刀よりもよっぽど斬れる筈だ。

土埃が舞った。

否、地面が削り取られた。

圧倒的な破壊力を秘めている風は地面を粉々にしながら壱の元に飛んでくる。

（風が来る……ッ!!）

「おおおおおおおおおッ!!」

剣を力の限り、振るう。

秒速千キロで標的に向かう風の鈍器は真つ二つに斬れた。

壱の周りに浮いていた粒子が千単位で弾け飛ぶ。

恐らく、斬られた瞬間に別の『型』を生成したのだろう。

頬が風の刃で薄く斬れた。

しかし、まだ肌は斬れない。

肌が斬れた、と感じ取っただけだ。

そしてそんな些細な事に構っている暇もない。

陣の懷に飛び込み、左足から右肩にかけて剣を振るう。

それを察した陣が風の防御を施した足で柄を蹴り飛ばす。

「く……ッ!」

蹴り飛ばされた勢いのまま声が空気を震わせるよりも早く、身体を捻り再度右肩を斬りかかる。

絶えず攻撃をかます。

もう『甘え』なんて一切見せない。

クレアを助け出す。

作戦だとか、相手の強さだとか自分の能力の特性なんていうものは全部頭から抜け落ちていた。

粒子が一瞬強く光った。

急速に手に馴染む。

「おせえ!!!」

陣は何やら口を動かして、閃光のように放った右拳を剣に叩きつける。重い衝撃が右手へと伝わる。

剣を押し続け、右手を押さえ込む。

まだ身体は捻ったままだ。

瞬時、左手に合わせて剣を作り上げ、斜め上から斜め下——右肩から左足へと全体重をかけてスイングした。

陣の防御は絶対に間に合わない。左手は剣に届く事もなく虚しく空を切る。

膜のようにして作った風の防御に剣を叩き込んだ。

風は剣の軌道を逸らそうとアメーバのように剣に纏わり付いたが、耐え切れなくなり制御を失って室内を縦横無尽に駆けた。

天井はへこみ、扉は曲がり壁は一部崩壊した。

(クレア……っ!!)

壱の思考を的確に読み取った粒子はクレアを完全に防備する。

は？ と呆気にとられている陣に壱は『剣』を振るいながら粒子を解放した。

ムチのように剣は形を崩し、三日月型の閃光が走った。

「!!!」

陣の身体に粒子が叩きつけられ、音すら残さず吹き飛んだ。

「ま……ッ!？」

陣は声を残し、壁ごと廊下に叩き出された。

それを見届けた壱はクレアの方へと視線を飛ばし、視界が黒く、

白く、塗り潰された。

倉敷壱と海田とハーレム

「む……」

壱は未だぼうつとする思考で周りを見渡した。

「保健室……か……」

白いカーテンで区切られたベッドで寝ていることを再度、確認する。

シャツと勢いよくカーテンが開いた。

「よお倉敷」

イケメン海田だった。

「はあ……ハーレム型チート主人公さん（場合によってはご都合主義も厭わないぜベイバー）……別名『某携帯小説サイト量産型ザ……主人公』」

「それは俺に対する嫌味か？ あと、変なネタ持ち出してきてんじやねえよ」

はあ、何で俺の周りはキャラの濃い奴らばっかなんだよ、と京はこれまたテンプレートな小言は吐く。

「つーか、誰が俺の運んでくれたんだ？」

「先輩……麗那さん」

「ああ、あの生徒会長か」

「すげえ心配してたぞ。つーかアイツ誰だよ？ あ、やっぱりいい。面倒には巻き込まれたくない」

「全く……お前のそのテンプレートっぷりには笑えるな。多分アレだよ。お前は今ここで俺と会話してる時点で物語に巻き込まれるフラグは立ってんぞ」

「……はあ……嫌なこと言うなよ。悪魔と戦った時だってそんなことが文が言ってたし」

（さり気にこういう意味深なことを言うのがこれまたテンプレだよなあ……人格攻撃になりそうだから言わないけど。中二っていうか

……俺の前の学校に居たなあこういう奴「そういえば俺この間ハツキングしたなあ」とか言つて俺が「え？ 何それ」って訊くまで側でいい続けてた奴……懐かしいなあ。そういえばオタクだったなあ。あ、zipファイルで漫画を借りてたっけ？ 読まない……でも解凍するのが面倒くさい。あー。っーか……）

「そう言えばクレアと倒れてた奴は？」

「そういえば、と言つたが忘れていた訳ではなくタイミングを見計らつていただけだ。」

「無事だつて言うことは陣の証言からわかつているんだし。」

「クレア？ ああ、アイツなら隣のベッドで寝てる。倒れてた奴は、逃げちまつた」

「そつか。あー神風さんにお礼言つていくんねえか？ あと、海田もありがとな」

「別に俺は何にもしてねえよ。あと、お礼は自分で言えよ」

「そう言つてポケットから小さなデフォルメされたクマが四隅で唸つている小さな紙を手渡してきた。」

「メモ帳？」

「麗那先輩の電話番号。あの人「壱君にいつ渡そういつ渡そう」つてずいぶん悩んでたぜ」

「ふーん」

「そんなことを俺に言つてどうするつもりなのだろう？ と、壱は首を傾げる。」

「ま、お礼の電話はしてみるわ」

「ありがとうな、と壱はがもう一度言つてから、海田は踵を返した。」「じゃあ……」

「な、と言つ前にガシッと白いカーテンから真つ白な手が伸びて海田の腕を掴んだ。」

「ちよつ、早瀬！？ 何でいきなり腕組むんだ！？」

「何でつて……だつて、で、デー」

「ああ、そつか。カップル限定の食べ放題なんだっけ？ って痛い

痛い！！ 何で間接技を決め……ッ！！？」

「うるさい。行くわよ」

「（京はやはり鈍感を発揮している模様）」

「（多分、今日中にはくつつかないんじゃない？）」

「（甘い！ 男なんて獣なんだから一瞬の間違いで……！）」

「（監視を続けるわよ！）」

「（（ラジャー！！））」

「あれ？ 何か声聞こえなかったか？」

「聞こえてない聞こえてない！（アイツら、私と京の仲を進展させまいとして……っ！！）」

何ていうハーレムうふふな声が聞こえるが、壱には少し海田が羨ましい。

「死ねばいいのにアイツ」

何ていうか、一番居心地のいい体勢ではないだろうかコレが。愛や恋を信じていない壱だが『好かれる』という事実のみは羨ましい。壱みたいに運のない男の場合は悲惨なモノだ。

遊星ルートで決定しているクリス。

まだ知り合って間もないのに告白して撃沈してしまった生徒会長（ラノベなら中古品扱いの傷物状態。少女漫画及び、別の『某ケータイ小説サイト』なら返り咲く可能性アリ（どちらを本当に愛しているのかを知ったとかで海田のもとに舞い戻ることが条件だが……そしてヘビーな場合は海田が死ぬかもしれない）……しかし基本的に『完璧超人』は少女漫画の主人公になりえないので結果的にナシ）そして、海田を倒したことでオマケのように付いて来たハーレム（海田のだよ）要員達（フラグを立てることすら不可能）。

しかし今出ていなかったフレア、綾瀬、クレアが壱に惚れるという展開があれば海田のようなハーレム（海田の十分の一程だが）を作ることが可能かもしれない。

「つーか、神風さんのファンクラブがあるって話だしそこから適当に強い男の子を見繕ってくればいいのに……」

もしくは、恋に破れた生徒会長が行き着く先——今までずっと助けてくれた副会長とか（居るかどうかは知らない）。

「って。俺は何について考えてんだ」

意識を切り替える。

隣のベッドとを区切る白いカーテンに手をかけた。

倉敷壱と海田とハーレム（後書き）

海田サイドを次の話ではちろつと書くかもしれません

海田京と考え方

「食べ放題だけどさ……」

海田は暴飲暴食を地で行く雪に呆然とする。

そして、美少女を連れているせいか視線が痛い。

（ていうか、何でコイツら食べ放題に来てるんだ？）

「いやーこの生ハムメロン美味しいよ？ 食べる？」

と、フラインがメロンに生ハムを乗っけただけ、というある意味斬新な食べ物を口に近づけてくる。

につこにつこ、笑いながら何かを期待するような瞳でコッチを見ってくる。

何？ それを食べればいいのか？

「ちよつと待ちなさい。今は京は、わ、わわ私の彼氏だ！ 私が食べさせるべきだろう！」

とか超理論を展開する早瀬。

いや、止めさせるだけでいいんじゃない？ とか海田は思う。

「……にしても、壱の戦いは凄かったよね」

と、涼宮が思い出したように言う。

（確かに凄かったな……）

京は気になったので壱の後を尾けると、二人は猛烈な勢いで戦い始めたのだ（透視魔術を使った）。

というか、見えなかった。気づいた時には対衝撃用の壁が剥がれたり、凄い音が響いていたり。

「アレはもう人じゃねえよ」

プライドがズタズタにされた場面、と言ってもよかった。

学園に来てから色々巻き込まれたが、負けることなくここまで来た。

そして壱が現れてから全てが一変した。

京に絡んできていた何人かの女の子は壱に惚れて京に会いに来る

ことはないし（挨拶くらいはするが）、視線も変わった気がする。
今までは「すげえなあ」みたいな感じだったのが「あー転校生に
負けた奴か」に格下げされているのだ。

まあ、そんな些細なことはどうでもいい。

大事な事は壺にとつて海田京とは全力を出すまでもない相手であり、路上のアリのように無視できる相手であるという事実だ。

確かに負けはしたが、修練さえ積みめば勝てる相手だと思っていたのだ。今までの相手のように、楽勝で。

「胸糞わりい」

壺が本気になればSクラスは全壊、全員病院送り決定だった。

なのに本気を出せ、何て言っていた自分は恐らく壺に内心小馬鹿にされていたに違いない。

『本気出したら指先一本でデメエら殺しちまうっつーの』みたいな
感じで。

「京？　なんか怖いよ？」

フラインが顔を覗き込んでくるので意識が現実世界へと帰って来た。

全員、京の只ならぬ雰囲気圧倒されたように黙っている。

その事実が海田の胸に突き刺さった。

「多分、俺、調子乗ってたんだな。学園来てからいきなりお前みたいな可愛い女子に会って、嫉妬してくる奴を黙らせて……色んな事があつたよな。アイツに会うまで」

全部が全部、暴力で解決してきた。

絡んでくる奴も、ム力ついた奴も。

その結果がコレだ。

女友達は壺に惚れて、地位は大きく落下した。

『転校生に負けた無様な人間』となっている。

壺はかつての海田とは違い『絡みやすい変な奴』として定着している。

多分、海田は道を誤った。

もつと方法があつたんじやないだろうか？

電撃や闇の槍、なんてヘタすれば死んでたし。

思えば、学校の迷惑なんて考えてなかったような気がする（まあ
ほぼ京の周りに居る女子のせいだが）。

完全に調子に乗っていた。

実力がわかつているのなら戦わなければよかったのだ。

壱のような方法でもよかったかもしれない（早瀬みたいなプライ
ドの高い奴は怒るだろうが）。

「アイツは蛙かわずって言ってたけど、その通りかもな。自分よりも実力
のない奴しか居ない箱庭の中で暴れてただけだったんだ」

京の言い分に雪は言い返す。

「……アイツも似たような感じでしよう。私達のプライドや関係を
ズタズタにして笑いながら帰っていっただけでしょ」

「でも、誰も傷つけてない。アイツは戦うのは止めにしようぜって
言った時に止めてけばよかったんだ」

その時は全員敵意剥き出しだったし。

関係を悪化させたのは寧ろ、引き止めた沙耶先生であつたり京自
身だ。

「……でも……」

「それに、関係は仕方ねえよ。アイツの生き様や強さに惚れなくな
る気持ちもわかるしな」

「えっ!？」「京ってホモだったの?」

「無理やりコメディ調に持って行こうとするんじゃないやねえええええ
!?!?!」

強襲

「先生！ 神風さんから聞いたんですけど壱が怪我したって本当なんですか！！？」

と、綾瀬が血相変えて沙耶に詰め寄る。

隣にはフレアと遊星、そしてクリスも居た。

「あーまあ、ね。ちょっとケンカしたみたい」

「ケンカ……？」

信じられないというように綾瀬は呟く。

「何言つてんだ？ 先生。アイツがただのケンカで傷つく訳ねーだろ！ 何隠してやがる！！？」

掴みかかるように吼える遊星に沙耶は少し逡巡してから言う。

「はあ……別に隠してないけどまあ、そうだね。大和製鉄に狙われちゃってる女の子を助けるために立ち上がったから怪我したっていうのが真相だね」

大和製鉄！？ と四人全員が驚き叫ぶ。

「そんなの一国と戦争起こすレベルなんじゃ……」

と、フレアが言う。

「でしようね。七大魔術師も特別社員つてことで居るしね。多分日本の地図が書き換わるレベルで戦うんじゃないかな」

「……そんなの、壱でも勝てないんじゃない」

綾瀬は心配そうに言う。

「さあどうだろね」

沙耶はギャンブラーのように笑んだ。

※※※※※

カーテンに手をかけようとした瞬間、
「壱さん！ 大丈夫ですか！！？」

クレアがジャツとカーテンを開けて顔を突き出してきた。

「うわお！！？」

壱は思わず上半身を逸らす。

「大丈夫だけど、お前は……？」

「私も大丈夫です」

とクレアは心配を減らそうとするような笑みを浮かべた。
直後。

クレアの笑みはぐにやりと崩壊し、クレアは慌てたように無理やりに笑顔をもう一度作り上げた。

壱はそれが痛々しい。

もつと感情を出せばいいのに、とさえ思う。

「すみません。私のせいで、壱さんを巻き込んで……護るって初めて会った時から決めてたのに」

初めて会ったとき？ と壱は思い返してみる。

確かにクレアは「危ないときは私が護りますから！」と言っていた。

そして、あの時は壱を自分の身も省みず助けてくれた。

「お前は俺のことを助けてくれたよ」

「え……？」

クレアは呆然とした表情で壱を見る。

「あの俺が腹を掻っ捌かれたとき、助けてくれただろ？ だから俺は戦えたんだぞ？」

だから、恥じることなんて全然ないって、と壱は続ける。

「ありがとう壱さん」

そう言って微笑んだ後、クレアは唇をもう一度開いた。

「でも、もう迷惑はかけられません」

「何で！？」

思わず壱は大声で聞き返していた。

「だって、大和製鉄って会社は兵器なんかを開発してるらしいですし七大魔術師だって居るって……」

七大魔術師…… 壱はその言葉を聞いた瞬間、身が竦むような感覚に陥った。

「だけど、言った。」

「大丈夫だって。俺が絶対に救い出すから」
「護り通すから、と。」

なぜここまでの覚悟が出てくるのか、何て壱にはわからないし、わかる必要もないと思う。

どれだけ強い敵が居ようと護り通す。

その意思さえあれば、クレアと一緒に居れるのだ。

天界に帰るまでは。

「つて、ほとぼりが冷めるまでは天界に帰ればいいんじゃないか？」

壱は天界に帰る、という名案を出す。

ほとぼりが冷める頃にまたここに来ればいい。

それまでは寂しいけど、いつかまた会えるのだ。

「……え、と…… 私はまだ飛ぶのがヘタで……」

「気まずそうに、恥ずかしそうにクレアは言う。」

「天界までは自力で帰れないんです」

「……」

壱は呆れが心中に渦巻く。

そんな壱の内心を悟ったのかクレアは慌てたように付け加える。

「あ、でもいい案ですよ！ それ！ 私、大天使様をお願いしてみます。迎えを出して欲しいって！」

二時間くらいで着く筈ですよ！ とクレアは言う。

「……二時間護ればいいわけだ」

「楽勝だな、と壱はクレアに微笑むと。」

「何が楽勝だって？」

男の声が聞こえた。

加勢

カーテンから手がぬつと突き出た。

いや、違う。

男はカーテンを斬って壱の首を刎^はねに来たのだ。

「助けに来ました!!」

手と壱の間に突如現れた女性は手を拳で打ち上げた。

「あ？」

男は驚きに声を上げる。

カーテンがハバリ、と落ちた。

「何だ？ …… ああ、愛利か」

そうです、と女性言う。

「お前誰だよ!？」

壱の言葉に女性改め愛利は短く答える。

「七大魔術師です。因みに通報を受けて来た警察官ですから」

通報……？ 海田か？ 神風さんか？ と壱は一瞬考えるが答え

はわからない。

ともかく、ラッキーだ。

「全く。自分を分解してケイトスに運ばせる瞬間移動……だったっけ？」

「雨宮時雨、あなたに答える必要はありません」

「愛想ねえなあ……」

壱は授業でようやく学んだことを思い出す。

瞬間移動は自分を一度素粒子単位で分解してから自分の天使——ケイトス——に運ばせて瞬時に移動する瞬間移動法。

世界で沙耶とこの雲川愛利しかできない。

魔術を極めているがゆえの荒業だ。

並みの魔術師なら分解する時点で身体が崩壊して死ぬか、分解自体できない。

「お前ごときに俺が止めれるとか思ってたんの？」

時雨は薄く笑って愛利の真横に移動する。

地面を滑るかのような移動法だった。

「水魔術……！！」

愛利は空間からバトンを生成し、時雨の頬に狙いをつけて振ったが時雨はそれを見ることもせずになを裏拳放つ。

後出しの攻撃はバトンよりも速く、愛利の頬を打つ。

「……あッ！？」

更に追い討ちをかけようと拳を繰り出すが、愛利は既に消えていた。

「そっぴゃ、お前のケイトスってやけに存在感なかったけな……ん
くここのら一帯を吹き飛ばして身体を再構築させないようにも出来る
んだけど……」

クレアのように天使を媒介に愛利に声を伝える。

「やってみたらどうですか！！」

真後ろに陣取っていた愛利は手に氷のハンマーを持って、振った。
ゴッ！！ と、衝撃波が放たれた。

因みにこの衝撃波は今、放たれたモノではない。

時雨の移動と裏拳の衝撃波だ。

壱は仕方ねえなあ、とばかりに室内を粒子で覆う。

室内のモノは全部破壊され、粉々に解体されたが外への影響は○
だ。

（つたく。これじゃあクレアの何か話してる暇ねえな。俺、天使操
れねえし……さて、クレアはまず安全な場所に置いてくか……）

壱とクレアは保健室から掻き消えた。

「あとで、加勢するからさ。それまでは待っててくれよ」

存在確率

クレアを教室に置いた。

クレアの呼び止めようとする唇の動きは見なかった事にした。

壱は死闘を演じる室内へと躍り出て、時雨の顔面を蹴り飛ばす。

「が……！？」

時雨はたたらを踏んで、数歩退った。

「何で戻ってきたんですか！？」

悲鳴のような声で言う愛利。

「何でって？ 愛利さんが時雨に勝てるとは到底思えないからだよ」

「な！？ 勝てます！ こんな人なんかに負ける筈がありません！

！」

声を荒げて主張するが、その表情から実力差は分かっているようだった。

「愛利さんは余波を防御してください。まだ、俺の方が闘えます」説明だけすると、壱は瞬時で時雨の懐へ飛び込んだ。

時雨の表情が満足気に歪む。

拳を一気に五千発撃ち出す。

空気が歪み、膨張する感覚が拳に伝わり、時雨の腕の感触で上塗りされていく。

全て、防御された。

「やっぱりかあ……」

衝撃波は部屋中を駆け抜けるが、愛利の魔術のお陰で崩壊は免れた。

（よし、シッカリ出来るみたいだな）

試しているみたいで嫌だが、試さない事には周りに気を遣って攻撃できない。

「……確実に強くなってるなお前……」

時雨は薄く笑い、顎に手を付けた。

「やっぱりアレか。普段実力をださねえ分、潜在能力がえげつない事になってるって事か……」

「そうみたいだな。お前の部下なんだろうけど、陣内だったっけ？ 忘れたけど、とりあえず、ソイツに勝った時、能力が上がったし」

「俺にも勝てるって？」

時雨は獰猛な笑みを浮かべる。

「誰もそんな事言ってねえよ。けどさ。お前がクレアを天司って理由だけで狙うんなら負けるわけにはいかねえな」

そのセリフを聞いた時雨は思わずと言った調子で笑った。

「あ？ 何かおかしいのかよ？」

「お前さあ、兵器開発してる会社が天司って理由だけで狙うと思うか？」

「どういうことだよ？」

訝しげに壱は訊いた。

時雨は質問に答えるだけという意識が含まれる声音が空気を叩く。

「アイツには兵器としての素質があるってことだ」

「兵器……？ アイツの能力のことをいつてんのか？」

「違う。あの能力も魅力的だけどな。インパクトに欠ける」

時雨は首を横に振る。

壱は意識せず、心臓が高鳴っているのを感じていた。

アイツが俺に話していない能力でもあるのか？

「それ以外の能力なんてあんのかよ……？」

「力は天司の身体の中に隠れてる。俺だってどんな能力なのかはしんねえけど、途轍もないって話だ」

「誰から聞いた？」

その質問に時雨は首を振るだけだった。

知らないのだ。

「じゃ、質問タイムは終わったし、どいてくんねえかな？ それとも、半殺し決定でいいか？」

「お前がかよ？」

壱は精一杯挑発をかける。

成功はしていないだろうが、時雨が飛び込んできた。

緊張が走る。

一秒。

長い長い時間。

手数で言えば百万手。

壱は九百六十八発もの攻撃を喰らった。

敵に喰らわした攻撃はたった一回。

それも頬を切り裂いただけの弱々しい攻撃だ。

「が、は……？」

防御の意味がなかった。

圧倒的な攻撃力は壱の粒子を突き抜け、本体を容赦なく貫いてきた。

強い。

「強くなったとは言えこの程度か」

「突き抜けた……？」

確かにこの男は強いが、防御をしたのに無効化されるどころか突き抜けるなどありえない。

魔術だ。

「愛利の『移動魔術』と同じ原理だ。天使を使役して、身体を半分なくしてんのさ」

何だよそれ、そう言いながらも、粒子を使い、傷を癒していく。

「『存在確率』みたいなもんだ。コインの裏と表を当てるゲームをする時『表である』のと『表でない』のがあるよな？ 俺の存在はソレだ。自分の都合のいいように攻撃を擦り抜けさせたり、当てさせたり出来る」

「は……ふざけやがって」

勝てる見込みがなくなってきた事に絶望を感じ、視界が暗くなってきた。

存在確率（後書き）

ひっさっしぶっりの更っ新！

闖入者

倉敷壱が雨宮時雨と闘い始めて三〇秒後の事だった。

クレアは懸命に走り、運の悪い事に理事長の沙耶と神風麗那たち、そして京たちに見つかつてしまう——二〇秒前の出来事。

「壱さんはどうしたら私^{わたくし}の方に振り向いてくれるのかしら？」

キセヤ・フラットが言う。

「告白すればいいんじゃないかな？」

助言を送る憂鬱な表情をした神風にキセヤとフライン・カネット、綾風文、ジョリーは首を振る。

『絶対にヤダ』

そこで、沙耶が後ろから声をかけてきた。

「壱に乗る為の相談？」

「……ひ、卑猥な冗談は止めて下さい！！」

とフラインは顔を真っ赤にして怒鳴る。

「あーはいはい。にしても京が可哀想だね。いきなり友だちゴツソリ減っちゃってさ。今だから言うけど、すっごく落ち込んでたよ京は」

沙耶の言葉に皆うつ、と喉に何かが詰まったような顔をする。

「あれ？ お前ら久しぶりだな！」

と海田京が元気よく声をかける。

皆は一斉に振り返り、今までならあり得ない愛想笑いを向けた。

木村早瀬と長瀬、そして一ファンに過ぎなかったレインが海田の取り巻きへとなっていた。

「（私達ってあんな感じだったのかな？）」

「（うん。そうだったんだろーな。何か嫌だな、あの時の自分をぶっ飛ばしたい）」

「ていうか、今はそれ以下だと思っただけ……」

神風麗那とジョリーとのセリフに沙耶が冷静な呟きを残す。

と。

クレアが三つ巴の集団を横切った。

「あ……」

と、神風。

「アイツ……」

と京

「あの子は……？」

沙耶。

そして、クレアは焦燥感に狩られたような顔で走り去っていく。
二つの集団と一人は顔を見合わせ、追いかけた。
また、壱の事だと分かったのだ。

壱は攻撃を避け続けるしか方法がなかった。

壁に張り付き、拳を身体を捻り、避ける。

「くッ！？」

粒子を槍に五〇本生成し、飛ばした。

秒速五万キロメートルの速さで飛ぶ槍は逃げ場のない攻撃だ。

「行けええええええええええ！！」

能力を発動する間もなく重体にする。

「オイオイ」

時雨は踊るように五〇本もの槍を避けた。

槍と槍の極々小さな隙間に身体を滑り込ませ、避けたのだ。

「お前は、俺を殺す気がないだろ？」

壱は唇を噛み締める。

「急所の部分にだけ、槍が来なかった。殺す気がないってことだろ？」

「うっせーよクズ」

壱は地面に突き刺さり、盛り上げかかった床は滑らかに動き、元

に戻った。

愛利の魔術だろう。

粒子を右腕に溜める。

「らあああああああああああッ！！」

近づき、拳を繰り出す。

顔を狙った拳は突抜け、全く攻撃にならない。

壱の最高速度の攻撃が余裕で避けられた。

「あああああああッ！！」

そのまま、拳を連続で繰り出す。

音速よりも光速に近い攻撃を一億発繰り出すが、無意味だった。

「意味ねえよ」

粒子の防御を擦り抜けた拳が壱の頬を貫いた。

「あ……！！？」

衝撃で身体が吹き飛び、壁に叩き付けられる。

そこで、クレアと海田たちが扉を開け放った。

「来るなああああああ！！！」

壱の叫びは飛び込んできた時雨の強烈な蹴りで消え失せた。

速度（前書き）

吉の声は気分というか、感覚で読んでください。
全部後から聞こえるのが書いてて不自然なので。

速度

クレアは息を呑んだ。

今この瞬間、壱が命を賭けて助けてくれている。

一瞬、そのことに幸福を感じる。

だけどそれ以上に絶望感を味わっていた。

絶対に勝てない。

壱は蹴られて血だらけの唇を拭い、敵を睨みつけていた。

「おい。お前らさつさと逃げろよ。逃げねえとボコボコにされるぞ」
けほつ、と咳き込む。

直後。

二人は掻き消え、そして壱はクレアの前へ、時雨は愛利の元へ現れた。

海田は何か信じられない物でも見るような目で時雨を見やる。

愛利は齒を食い縛り、青白いガスのようなものを身体中から流していた。

それが、音と余波を潰しているのだろつと予測できる。

「逃げるぞ。お前ら」

海田はポツリと呟く。

「私もですか？」

クレアの問いに海田は頷く。

「当たり前だろうが。俺ならまだしもお前らがこんな連中の戦いに生き残るのなんて無理だ」

「逃がすかよ」

時雨はゆつくりとした調子で、但し、常人からすれば明らかに異常な速度で駆けて来た。

海田が消える。

「舐めてんじゃねえぞデメエー!!」

海田の声が部屋に反響した。

ハーレム要員たちはただ、海田を心配するように——そして壱の方を見る。

クレアは世界の瞳を発動した。

標的は時雨。

時雨への視点へと切り替わる。

そして、クレアの視点も脳内で映像として出力される。

「舐める？ コレは余裕っつーんだよ！」

真後ろの放った裏拳は海田の顔面を貫いた。

「うがっ……！？」

インパクトと共に壱が時雨の腹をぶん殴った。

「……！？」

時雨は思い切り、身体を捻り、ギリギリで避ける。

拳の周りに見えないほどの少量の粒子が纏っていたのか、脇腹が切り裂かれた。

「ありがとな海田！」

拳を引き、もう一度切り裂く。

「くそ……っ！？」

連撃。

拳を更に放つ。

「おおおおおッ！」

時雨の身体を透過し、まだ吹き飛んでいる最中だった海田に当たりかける。

「うわああッ！？」

壱は拳を咄嗟に引き下げ、その際のほんの少しの隙が時雨のとつての長い時間だ。

「や、べえ……」

まだ、海田は現状把握もできずに顔を歪めている。

クレアは叫んだ。

壱は時雨の拳を額で受けた。

「こ、あ……！？」

海田より先に壁へと叩き付けられた。

クレアの声がそして、響いた。

「私はどこにでも行くから皆さんを助けてください!!」

速度（後書き）

声は

自己犠牲

クレアの叫び声で空間がシン、と静まり返った。

「何だよ。もう降参か……」

時雨は面白くなさそうにクレアを見る。

そして、愛利の魔術を突き抜けてひび割れた壁の前で、倒れている壱を見て嘆息した。

「まあ、コレ以上するのみな面倒だな。いいぜお前の望みを叶えてやる」

壁にもたれかかるように気絶している海田には目もくれない。

クレアはあからさまに安堵の表情を浮かべる。

この中の誰も、もう傷つけられないと分かったからだろう。

「……」

時雨はもう一度嘆息する。

「今この部屋に居る人間を助けたところで、兵器に変わるってのに何嬉しそうに笑ってんだよ」

「大天使様が助けてくれます」

クレアの毅然とした声に時雨は無感情に言う。

「その大天使様公認だぜ？ この計画は」

「え……？ 大天使様が……？」

クレアの呆然とした声。おそらく真偽の程を測っているのだ。

「まあつつても大和——」

時雨の声は途中で遮られた。

原因は壱の背に積もっていた小さなコンクリートが落ちた音。振り向く。

壱は焦点の合っていない目で、しかしどこまでも敵意に満ちた瞳で時雨を見る。

時雨は思わず、笑んだ。

「七大魔術師になって二度目の誤算だな……」

壱は肩をゆつくりと上げ下げし、酸素を取り込む。さながら、上空へと浮かぼうとする風船のように。

「今、何だった？ クレアが、兵器……？」

血で赤く染め上げられた唇を芋虫のように動かしながら、訊いた。時雨は頷く。

「兵器になるんだよ。言っただろ？ コイツの中には莫大な力が眠ってるってよ」

瞬間。

壱がぶれて、消えた。

速度があり得ないほどに上がっている。

（コレがアイツの潜在能力の本領——？）

直後、うなじの辺りがビリビリと震えた。

危険を知らせるシグナル。

七大魔術師である時雨に危険を知らせるほどの『力』がすぐそこに迫っている——！

「おおおおおッ！……？」

力のある方向へ——真後ろへ——裏拳を放つ。

推測はほんの少しズレ、二の腕に頭が当たった。

ぞくり、魔術によって強化された『本能』が脊髄を伝い、全身へ危険信号を送る。

無意識に身体が固まった。

存在確率を使うという意識が一瞬、飛んでいた。

背に、拳が突き刺さり身体が前方へ押し出される前に更に一撃。

「う、あ……ッ！？」

三撃。五撃六撃と攻撃が続いていく。

存在確率を使い、身体全体の分子結合を失くす。

次の瞬間、拳が背を突き抜け、腹から飛び出した。

後ろから迫り来る衝撃に歯を食い縛り耐えながら、後ろへと身体を向ける。

衝撃を振り払った。

壱が宙を跳ね、遠心力を利用した蹴りを首へと放つ。

「おせえってんだよ！」

時雨は蹴りを拳で跳ね除け、吼えた。

その時、壱の全てが手に取るように分かってしまう。

七大魔術師同士の戦いでも起こる事のない奇跡の打ち合い。

天使と天使が互いに交じり合い、その人のPS（歪んだ思考）に直接働きかける手合い。

ソレは、壱の謎の力が呼んだ奇跡なのか——それとも時雨と壱の力が拮抗し、天使がリンクした結果なのか。

ともあれ、壱にも時雨の全ての情報が行き渡った。

「おおおおおおおおおおおおおッ！！！」

壱の咆哮に釣られるように拳に力を載せた一撃を放つ。

壱はもう、限界を突破している。

逃げ回っただけで勝てるが、時雨のプライドが許さなかった。

壱の拳と時雨の拳がぶつかり合う。

無音の一瞬。

次の瞬間、時雨の拳が壱の拳を滑るように走った。

壱の右肩に拳が深く入る。

今までの衝撃波が部屋を駆け巡るが、愛利の空間制御能力と液体魔術のお陰で崩壊は免れた。

人が倒れる音が愛利の魔術で吸収される。

内部への防御を全て攻撃へと転化した壱は、その代償として全身が焼け焦げ服が分子単位で無くなり、倒れた。

終結（前書き）

すみません

誤爆しました……

終結

その一瞬の戦闘は見る者——いや、見えざる者の全てを混乱へと導いた。

なぜ、壱が倒れ、焼け焦げているのか。

なぜ裸なのか。

「つてきやあー壱さん裸見えてる！」

空気の読めない発言をした綾風文は愛利の魔術により、昏倒。当然の報いである。

空気読もうぜ。俺もまだ完全には読めてないけどさ、と海田京は気絶から目を覚まして思う。

「壱がやられて——あいつが勝ったって事か……？」

壱が勝てないじゃ、悔しいが自分が勝てるはずが無い。

海田達は、見えない暗闇に襲われているような今までにない感覚に戸惑いを感じた。

「ふん。馬鹿な奴だ……。自分を犠牲にしてまで救おうとするとはな」

視界の中心に居る時雨を見る。壱は戸惑い、それでも身体が動く。「あ？ お前、なんで立てんだよ？ 普通死ぬだろ？ いや、何で立つんだよ。もうお前は戦えねえよ。それくらいわかんたろ！」

時雨の苛立った声。

呆然としていたクレアが壱に駆け寄る。

そして、壱の傷ついた身体を癒すかのように抱きついた。

「え……？」

壱は一步、二歩、退り下に居るクレアを見る。

身体感覚など、当の昔になくなっている。それなのに、この抱

擁で痛みが和らぐかのような錯覚が起こった。

「そう、ですよ！ 壱さん！ 何で立つんですか！？」

泣きそうな顔でクレアは叫ぶ。

（何で……？）

何で、ってソレは、クレアを護りたいから。

「何で、負けるに決まってるのに！ 私のこととはもう、いいんです！」

負けるに決まっている、確かにそうだ。

負ける戦をして、手放す事がもう決まっているのに渡したくなくて戦っていた。

もう、時雨との戦いは一ナノ秒すら持たないだろう。

（正に一瞬で俺は殺される……）

それでクレアが泣くなら、自分のした事はなんだったのだろうか？

偽善？ 自己満足？

精神的にクレアの心をズタズタにしているだけではないのか。

「お願い、します……。私を、笑顔で送ってください。ボロボロの壱さん何て見たくないんです……」

鈍い壱にはコレくらい言わなければ伝わらないと思ったのか、大事に——本当に大切なものを全ての悪意から護るようにクレアは壱を抱き締める。水を吸うスポンジのような柔らかい声音が、涙が溢れるのを我慢している声が壱の耳朶を叩く。

壱はさっきまではこの行動が正義だと——正解だと信じて疑わなかった。

綺麗な自己犠牲。

自分よりも他人を優先するヒーローのような、行為けれど。

ヒーローとは敵よりも強い事が確定している人間のことを指すの

ではないのか？

弱い人間が警察官の制止を振り切って、大事な人を銀行強盗から助けに行けば、無残に殺され、状況の悪化を招き、そして何よりも大事な人が涙で濡れる筈だ。

ソレは懸命な判断でも勇敢な行動とも言えない。

「俺は……」

絶対に勝てる、何て都合のいい事は言えない。信じてくれとも。

一発逆転の秘策も無い。

あるのは、引いてクレアを笑顔で引き渡す事だけ。

そして、クレアに「ありがとう。頑張れよ」とでも言えば完璧だろう。

意識が遠のけばいい、壱は自分の拳を潰すように握り締める。

さつきまでは、意識を保つのが、意識を手繰り寄せるのに命だつて賭けていたのに。

クレアは何かを期待するように、顔を焼き爛れた身体に引っ付ける。

「汚いから、どけよ……」

「嫌です。私を送り出すまでは……」

目頭が勝手に熱くなり、クレアを手放したくなくて、腕をゆっくりと持ち上げる。

二十センチもしない内に、手が止まった。

油の差していないカラクリ人形のように動かない。

もう、護る事を挑戦することすら出来ないのだ。

涙腺から、涙が膨れ上がる。

それでも、壱は涙を流さなかった。

一番傷つき、この先の未来が闇へと確定している少女が涙を流していないのだから。

「ゴメン……俺は、まだ、アイツに勝てねえから」

壱は、懸命に笑ってみせる。

感覚が戻りつつある身体が悲鳴を上げるが、それでも、笑う。

「だから——」

「うん。分かった」

クレアは壱の身体から遠のく。

「私は大丈夫ですから。頑丈だから——だから、いつでもいいです」
クレアは他人を気遣う笑みを浮かべて、壱から去っていく。

ただ、壱は己の無力を呪う。

中途半端な力を身につけて、護りたい少女の一人も護れずに去って行くしか出来ない自分を呪う。

激痛が瞼を刺激し、開ける事も叶わなくなる。

クレアの綺麗な金髪が、残像として瞼の裏に焼き付く。

膝が笑い、立っていることすら困難になるがクレアが部屋から出るまでは崩れ落ちたくなかった。

クレアの心配する顔はもう見たくない。

「壱さんは大丈夫ですよね？」

「ええ。私たち『魔術師』たちを治すための病院へ運ぶから」

こんな時にまで、人の心配をするクレアに壱は声を荒げそうになる。

やがて、ドアの開閉する音が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2920t/>

エンジェルクロイツ

2011年10月12日03時10分発行